

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)
～知的障害青年のための大学教育の創造～

目次

1. 多様な学びの場づくりの取り組みの中の KUPI.....	2
2. プログラムの概要と経過	7
1) 募集要項とチラシ	7
2) 説明会開催	8
3) プログラムの内容作り	16
4) 入学者募集の状況と応募、選考	17
5) 神戸大学学生のメンター募集.....	18
6) 大学教務の協力で「特別の課程」制度の発展を	18
7) 保険の加入について	18
8) 入学式の様子	18
9) 卒業研究発表会と修了式の様子	19
10) 4 回目受講生の扱いについて	21
11) 卒業生の参加について.....	21
3. プログラムの内容	22
1) 「よりよく生きるための科学と文化」	22
2) 「障害共生教育論」	50
3) 「話し合う！やってみる！」	73
4) 課外活動「WILL キャンプ」に参加をして	87
4. KUPI 学生の声	89
5. 4 回目受講生による卒業研究	93
1) 概要	93
2) 研究内容およびサポーター所感	93
6. プログラムから何を学んだか	100
1) 授業担当教員	100
2) 一般学生.....	109
3) メンター学生	129
7. コーディネーターの感想	134
8. KUPI に関する論文、発表、原稿掲載.....	139
9. おわりに：KUPI の磁場.....	150

1. 多様な学びの場づくりの取り組みの中の KUPI

津田英二

ラッキーセブンのぞろ目

令和 7 年度、7 年目を迎えた KUPI には、7 名の KUPI 学生が参加した。いわゆる「ラッキーセブン」が重なる、どこか縁起のよい年度である。その巡り合わせがどこまで影響したかは定かではないが、今年度の KUPI も、例年にも増して多くの学びを内包する実践となった。

KUPI は、Kobe University Program for Inclusion の頭文字をとった愛称であり、知的障害者に大学教育を開くことをめざす教育プログラムである。正式名称は「神戸大学学ぶ楽しみ発見プログラム」といい、学校教育法に位置づく特別な課程として、神戸大学大学院人間発達環境学研究科および神戸大学国際人間科学部が、文部科学省の委託を受けて実施・運営している。

KUPI は、大学後期にあたる 10 月から 2 月にかけて、週 3 回（月・火・木）、各回 17 時から 20 時まで実施している。各曜日 15 時間、合計 45 時間の授業を標準とし、真摯に学びに取り組んだ KUPI 学生には履修証明書を発行している。

月曜日は、人間発達環境学研究科に所属する教員が自身の専門分野について講義を行うオムニバス形式の授業である。哲学、教育学、心理学、生物学、音楽学、芸術学、社会学など、多彩な分野が並び、今年度は新たに物理学が加わった。分子模型を組み立てながら、物質科学が環境問題の解決にも関与していることを学ぶ内容は、KUPI 学生にとって新鮮な経験であったようである。完成した分子模型を大切に持ち歩く姿からも、その学びの手応えがうかがえた。

火曜日は、神戸大学国際人間科学部 3 年生向け授業「社会教育課題研究」との合同授業として位置づけ、「共に学ぶ」ことに挑戦している。毎年テーマを設定し、最終的には神戸大学の学生と KUPI 学生が協働して、テーマに即した作品を制作する。今年度のテーマは「共生とはなにか？」であった。2023 年度は「SDGs」、2024 年度は「命をつなげる」をテーマとしてきたが、いずれの年度も担当教員の想定を超える展開を見せ、独創的な作品が生み出されてきた。この合同授業は、神戸大学の学生にとっても、他では得がたい学びの機会となっている。なお、許可を得た学生の最終レポート全文は、毎年の報告書に掲載しているので、参照されたい。

木曜日は、教員が直接関与しない話し合い学習を基本とする授業である。神戸大学の学生が学びのサポーターとして関わり、コーディネーターおよび KUPI 学生とともに授業をつくり上げていく。対話を重ねながら活動内容を決定し、実行していく点に特徴がある。例年、大学図書館を利用する取り組みを行っているが、今年度はそれに加え、大学生協食堂で夕食を共にする活動も実施した。また、外部講師を招いて体験型の新喜劇を行い、会場となった教室は大いに盛り上がった。

「のびやかスペースあーち」との関わり

KUPI の実践は、大学内外のさまざまな活動との相互関係の中で成り立っている。大学に KUPI を受け入れる土壌がなければ実現し得ない実践であり、同時に、KUPI で学ぼうとする知的障害者をエンパワーするコミュニティの存在がなければ、一定のコストを払って大学に通う KUPI 学生の姿も生まれない。

KUPI を支える多様な活動の中で、KUPI 学生にとって活動のオプションとなっているものに、「のびやかスペースあーち」（以下、「あーち」）での取り組みがある。

「あーち」は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設として、2005 年に設置された大学運営の社会教育施設である。神戸市との連携協定を背景に、大学のリソースを活用しながら地域課題の解決に取り組み、その過程を研究・教育へと還元することを目的としている。「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」をコンセプトに掲げ、2025 年度には開設 20 周年を迎えた。これを記念して、一般書『みんなのあーち』（デザインエッグ社、2026 年）を刊行予定である。

「あーち」では、毎週金曜日の夜に「よるあーち」というプログラムを実施している。遊び、学び、食事、交流を軸に、多様な市民が集い、他者と関わりながら思い思いの時間を過ごす場である。参加や活動の自由度が高い「よるあーち」は、KUPI とも深い関係をもつ。KUPI 学生の中には、幼少期から「よるあーち」に通いながら成長してきた青年もいる。また、KUPI の授業がない金曜日や、KUPI 修了後の活動の場として「よるあーち」を利用するケースも少なくない。神戸大学の学生の中にも、KUPI と「よるあーち」の双方に関与する人がいる。

「よるあーち」の参加者にとって KUPI は、より体系的かつ集中的に学びに向かう際の選択肢となる。一方、KUPI 学生にとって「よるあーち」は、学びのコミュニティへの参加を持続させるための拠点である。この意味で、KUPI と「よるあーち」は相補的な関係にある。また、神戸大学の学生にとっては、KUPI 学生としての姿と、「よるあーち」参加者としての姿の差異を通して他者理解を深めたり、二つの場におけるサポート原理の違いから人との関係形成について考察を深めたりする機会ともなっている。

KUPI が一定期間に集中して学ぶ場であるとすれば、「よるあーち」は、学びへの関与を持続させるための場である。両者は競合するのではなく、相補的に機能している。この重なりの中で、学びは個人の能力形成を超え、関係とコミュニティの問題として立ち現れてくる。

共に生きることを学ぶ、存在することを学ぶ

KUPI は、知的障害者にとって、青年期教育としての側面と生涯学習としての側面を併せ持つ取り組みである。特別支援学校高等部卒業後に継続して学ぶ機会という点では青年期教育であり、学校教育の中で十分に組み込まなかった学びを補完する役割や、青年期特

有の課題に応答する学びの場として位置づけることができる。他方で、KUPI は、必要なときに必要な学びにアクセスできる社会、すなわち生涯学習社会の構築に寄与する実践でもある。

ユネスコは、生涯学習の概念を提唱して以来、国際的なオピニオンリーダーとして発信を続けてきた。1996年に公刊された、いわゆる「ドロール報告」では、現代社会においてなぜ、どのような生涯にわたる学びが必要なのかが論じられている。同報告によれば、不公正や軋轢が顕在化する社会において、共生をめざし、すべての人が内在する創造性を発揮できるようにすることが教育の使命であるとされる。その使命を果たすため、学びには四つの柱があると示されている。すなわち、「知るために学ぶこと (learning to know)」「「することを学ぶこと (learning to do)」「共に生きることを学ぶこと (learning to live together)」「存在することを学ぶこと (learning to be)」である。最初の二つは、一定期間の学習によって知識や技能の獲得をめざす、到達点の比較的明確な学びである。

一方、後者の二つ、「共に生きることを学ぶこと」「存在することを学ぶこと」は、個人の知識や能力に還元することが難しく、明確な到達点を設定することもできない。他者との関係やコミュニティの存在を前提とし、人生のさまざまな局面で繰り返し立ち戻る必要のある学びである。

先日、旧友と再会し、過去の体験を語ってもらう機会があった。60代後半になる彼女は、子育て期に夫の転勤で東京へ移り住んだという。希望を抱いて始まった東京での生活は、しかし、彼女に孤立をもたらした。育児ノイローゼに苦しみ、精神的に追い詰められていた折、偶然手にした公民館報に掲載されていた「学習権宣言」(ユネスコ、1985年)を読み、涙が止まらなくなったという。学ぶことが自分を救う力になり得ると気づいた彼女は、公民館に通うようになった。そこでの学びは、知識を積み上げるというよりも、長年身にまとってきた固定観念を一枚一枚脱ぎ捨てていくような営みであったという。「脱いでいった末に残ったのが、人権という言葉だった」と彼女は語った。現在も折に触れて公民館に足を運び、自らの生き方を問い直し続けている。

生涯学習が想定している学びとは、まさにこのような学びを含むものである。いや、むしろ KUPI が最も大切にしようとしているのは、こうした学びなのかもしれない。他者から与えられるのではなく、他者と共に創り上げていく学びであり、生きる道を照らし、ときに自らを救う学びである。

KUPI 学生は、原則として4年間で修了する。制度上そうする必要があったわけではない。しかし、大学が受け入れ可能な人数に限りがあること、より多くの知的障害者に学びの機会を提供する必要があることから、学部学生と同じ在籍年限を設定した。とはいえ、学びとは何かを考えたとき、4年間という期限はあまりにも短い。

学びのコミュニティが持続することの意味

1949年制定の社会教育法には、「国及び地方公共団体は、……すべての国民が、あらゆる

る機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するよう努めなければならない」と記されている。この条文に描かれた青写真は、75年以上を経た現在、どこまで実現しているだろうか。財政難を理由に社会教育費は削減され、事業の民間委託が進んできた。決して豊かとは言えなかった社会教育の現場は、時代を経るにつれて、さらに痩せ細ってきたと言わざるを得ない。多様な人たちが集まり、語り合う場は、地域社会や職場のコミュニティの弱体化とともに、私たちの身の回りから消えていった。

そのような状況の中で始まったのが、障害者の生涯学習推進政策である。2014年に日本政府が批准した「障害者権利条約」第24条に示された「障害者を包容する生涯学習」を具体化するため、2017年には文部科学省に障害者学習支援推進室が設置された。KUPIもまた、この政策的潮流の中で位置づけられ、同推進室からの受託研究として実施されている。

こうしてみると、在籍期間が限られた単体の実践としての KUPI には、明確な限界があることがわかる。前述の「あーち」に加え、KUPI の課外活動として参加している「WILL」(ESD プラットフォーム)は、KUPI と相互に影響し合いながら、持続する学びのコミュニティを育てている。神戸大学という枠組みを超え、こうした多様な学びの場を含めた視点から KUPI を捉え直してみたい。すなわち、「共に生きることを学ぶこと」「存在することを学ぶこと」が継続される場を社会の中に広げていく運動の一部として、KUPI を位置づけ直すことができるのではないか。

多くの仲間たちと

幸いなことに、KUPI を運営する事務局と、ひょうご障害者生涯学習連携コンソーシアムの事務局は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの同じ部屋で業務を行っている。事務局を担う人々は日常的に密なコミュニケーションを取り合い、実践を下支えしてくださっている。KUPI の実践を積み重ね、その成果を全国へと広げていくこと、そして同時に、障害者の生涯学習に関わる多様な取り組みを面的に拡張していくことは、いずれも大きなエネルギーを要する営みである。不安定な雇用条件の中にあっても、一步一步、道を整えながら前に進んでくださっている事務局のみなさんに、深い感謝を表したい。

また、この取り組みに主体的に関わってくださっている神戸大学大学院人間発達環境学研究科の教職員、ならびに学生・大学院生のみなさんの存在も大きい。さらに、兵庫県教育委員会、文部科学省に所属する志ある職員のみなさん、全国各地で実践を支える仲間たちも、心強い同志である。

そして何よりも、KUPI での学びを心から楽しみ、その喜びを率直に表現してくれる KUPI 学生のみなさん、ならびにそれを支えるご家族のみなさんの存在があつてこそ、KUPI は成り立っている。KUPI に通うことは、少なからず生活上の負担や犠牲を伴う。それでもなお学びの場に足を運んでくださっていること自体が、きわめて貴重である。

今年度は、NHKによる密着取材も行われた。取材にあたった方々は、KUPIの精神を社会に伝えるため、強い熱意と高い専門性をもって臨んでくださった。今後、さらに多くの仲間が加わり、この輪が広がっていくことを予感させる一年であった。

2. プログラムの概要と経過

2019年度から開始したプログラムは7年目が終わり、本年度は4名の卒業生を送り出した。4回受講した者は卒業をするため、卒業生は12名になった。

プログラムの準備は例年通り7月から始めた。入学式までの3か月間で募集の準備とプログラム内容の計画、説明会や選考会の準備と実施、広報、大学事務との調整、オムニバス授業を担当する教員との打合せ等を一気に進めた。

月曜日は「よりよく生きるための科学と文化」で大学教員10名がKUPI学生のために特別授業を行った。毎年、神戸大学附属特別支援学校の教員が授業を担当してくれるが、今年は研究授業や発表で多忙と伺ったため依頼を控えた。教員は一回の授業のためにコーディネーターと打合せを行ってシラバスや配布資料を作成するなど、時間をかけて授業の準備を行った。

火曜日は津田教授が「障害共生教育論」の講義を担当した。一般学生の履修科目になっている授業にKUPI学生が入って一緒に受講する。今年のテーマは「共生とは何か」で、まずは「共生できていない私たち」についてグループごとに制作発表を行い、その後「共生」について写真絵本の制作を行った。グループはKUPI学生と一般学生とメンター学生で構成されている。

木曜日は「話し合う！やってみる！」でKUPI学生とメンター学生が話し合って活動内容を決めるが、「体験新喜劇」は赤木教授と外部講師による指導のもと、3回にわたって活動することが決まっていた。今年は体育館の使用ができないため運動をする機会は得られなかったが、公園で出会った小学生と対話をしたり、他キャンパスの図書館や食堂を利用したりするなど、学外での活動も行った。

計画した授業や活動は、全て予定通り実施された。木曜日の活動でやり残したことがあったため予備日に活動を行ったが、その際はKUPI学生からやったー！と喜びの声が聞かれた。

今年もボランティアが授業や活動を支えてくれた。社会人学生は毎週参加してKUPI学生との学びを楽しみ、メンター学生と共にKUPIを支えてくれた。留学生も時間が許す限り各曜日に参加してくれた。本書でメンター学生と出てくる中にボランティアが含まれていることを始めに伝えたい。

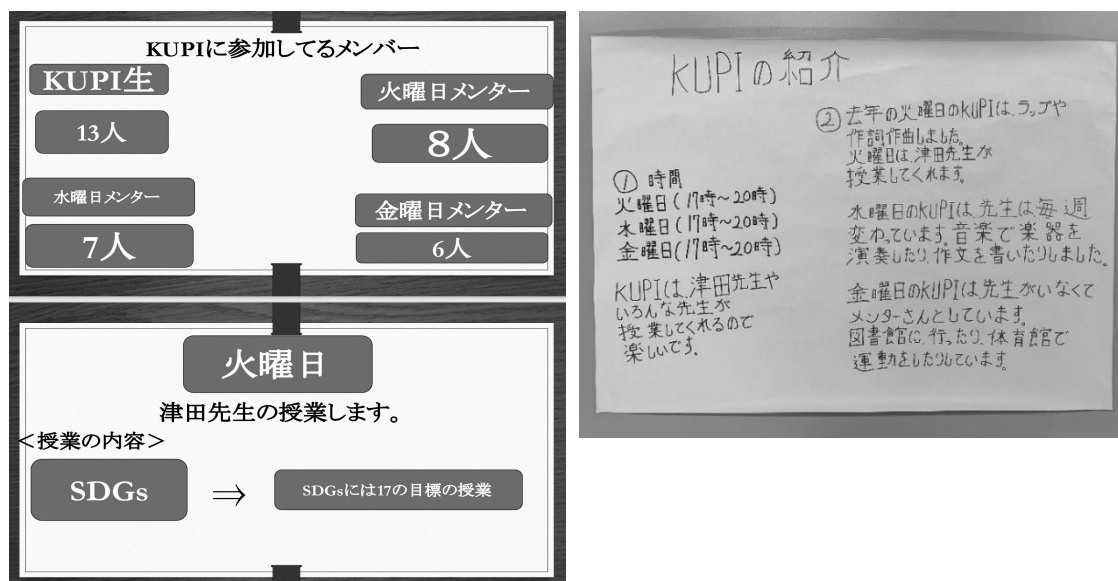
1) 募集要項とチラシ

前年度の内容を元に修正を行い、募集要項、チラシ、説明会案内、願書、前年度のプログラム内容など一式をセットにして募集に備えた。7月下旬に津田教授がホームページに募集要項の情報を公開して学生募集がスタートした。コーディネーターは前年度の受講生にメールで知らせる他、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会、神戸大学業務支援室、就労移行支援事業所（神戸市内）、手をつなぐ育成会などにメールで募集の案内を送った。

（資料）募集要項全文、募集チラシ

2) 説明会開催

8月19日に説明会を実施した。参加者は6組。一人で参加する学生もいた。「特別の課程」履修証明制度やプログラム内容の説明を行い、受講の様子は写真やエピソードを交えて伝えた。説明資料の中に2023年度の活動でKUPI学生が作成した「KUPIの紹介」も加えた。



(パワーポイントから一部抜粋)

自己紹介をしてもらおうと授業内容に興味を持つ人や友だちを作っておしゃべりを楽しみたい人が多かった。再受講生は、かつて受講した授業や活動をもう一度受けたいと話し、「今年は〇〇先生の授業はあるの？」と積極的に質問した。初参加の人は20時に終了して帰宅することへの不安を話したので、ご家族が車で迎えに来ることが可能な場合は構内で待機してもらえたり、帰りのバスの時間を決めて先に帰宅できることを伝え、不安なことについて答えた。説明会終了後に出願を受け付けた。

(資料) 説明会の案内

2025(令和7)年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

入学者募集要項

【プログラムの趣旨】

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラムは、大学の資源を無理なく効果的に活用することで、言語によるコミュニケーションが可能な知的障害のある青年に対して、学ぶことの楽しさを感じ、自己理解や他者理解、社会認識を深め、人格を陶冶する機会を提供するプログラムです。大学の知へのアクセスから最も遠ざけられてきた知的障害者の学びに貢献する方策を求める事業として、2019年度から開始しました。7年目の今回も、兵庫県教育委員会と協働ですすめる「学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業」（文部科学省受託研究）の一環として実施します。

このプログラムに参加する知的障害学生は、対話的環境の中で大学の知の世界に親しみ、仲間や一般学生と共に学ぶ機会を得ます。困った時には相談役の学生の支援を受けることができます。十分にこのプログラムの学びに参加した学生には、履修証明書が交付されます。

実施期間	2025年10月～2026年2月
場所とアクセス	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲3-11） 神戸市バス36番系統 鶴甲団地行 「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ (36番系統のバスは、阪神御影、JR六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【プログラムの内容】

月曜日	「よりよく生きるための科学と文化」 教育学、哲学、音楽学、自然科学、美術、ダンスなどを専門とする大学教員が、本プログラムのための特別授業を行います。
火曜日	「障害共生教育論」 神戸大学国際人間科学部の授業に参加をして、本プログラムに参加するみなさんと一般学生が話し合いながら共に学び、あるいはお互いに学び合う授業を創っていきます。
木曜日	「話し合う！やってみる！」 やってみたいことを話し合って計画を立てます。外に出かける活動も計画したいですね。神戸大学の学生も一緒に研究や創作活動をします。
課外活動	神戸大学が主宰するいくつかのプログラムに参加することができます（任意） それぞれのプログラムについては随時お知らせします。

一日の流れ（一例）

	月曜日	火曜日	木曜日
集合場所	神戸大学	神戸大学	神戸大学
～17:00	夕食を食べる、自由に過ごす	夕食を食べる、自由に過ごす	夕食を食べる、自由に過ごす
17:00～	授業（90分間） 「よりよく生きるための 科学と文化」	授業（90分間） 「障害共生教育論」	プログラム（90分間） 「話し合う！やってみる！」
18:00～	きゅうけい	きゅうけい	きゅうけい
19:00～	ふりかえり	ふりかえり	ふりかえり
20:00	終了	終了	終了

入学から修了までの流れ

2025年10月2日（木） 入学式、オリエンテーション

2025年10月6日（月） 授業開始日

2026年2月17日（火） 修了式（予定）

【募集について】

募集人数 10人程度

入学条件 ・高等学校あるいは特別支援学校高等部を卒業していること。
→出身校についてご不明な場合は、早めにお問い合わせください。

- ・療育手帳をもっていること。
- ・プログラムの方針を理解し、学ぶ意欲があること。
- ・言語によるコミュニケーションをとる手段があること。
- ・実際の読み書きの力があること。
- ・プログラムに対する家族の理解があること。
- ・期間中、月・火・木曜日の17時までに来られること。
- ・自力通学が可能なこと。

必要経費 ・受講料（50,000円） 修了までの全額です。
・授業により教材費、活動費を徴収することがあります。
・食費（17時から始まる授業の前に学内施設で夕食を食べる場合）
・参加任意の課外活動費（実費）

説明会 日時 2025年8月19日（火）17:00～18:00

場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲3-11）
神戸市バス36番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
教室は当日案内します。A棟1階の案内板をご覧ください。

- ・電話またはメールでお申込みください。
（中止の場合は連絡をいたしますので、参加希望の方は申込みをお願いします）
- ・予定が合わない方はご相談ください。個別に案内をします。
- ・当日は体調をご確認のうえ、ご参加ください。

【入学選考について】

- 選考方法 ・書類選考
・面接（本人）
・簡単な作文
- 出願書類 ・特別の課程履修願書Ⅰ通 記入例はホームページ参照
・学ぶ楽しみ発見プログラム入学申請書Ⅰ通 記入例はホームページ参照
・受験同意書
・出身学校の卒業（修了）証明書 注）卒業証書のコピーではありません
＊最終学歴が専門学校の方は高等学校（特別支援学校）の証明書を提出してください。
＊願書を送付する際に証明書が間に合わない場合は選考日に提出をしてください。
＊当プログラム再受講の方は提出不要です。「〇年度に受講しました」のメモを願書に付けてください。
・書類選考結果の通知について（下半分を切り取って提出）
- 出願先 〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科 ヒューマン・コミュニティー創成研究センター
津田・黒崎宛て **願書在中**
＊出願書類は折らずに送付をお願いします。
- 出願締切 **2025年8月28日（木）必着**
注）神戸市内で投函しても、到着までに2日以上かかることがありますのでご注意ください。
大学に直接、持参される場合はメールでお知らせください。
応募者多数の場合、選考の前に書類選考を行うことがあります。
- 選考日時 2025年9月1日（月）夕方～ グループ面接と作文があります。
- 選考会場 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（神戸市灘区鶴甲3-11）
- 合否発表 2025年9月2日（火）普通郵便で発送予定
- 入学説明会（合格者のみ） 2025年9月24日（水）夕方～

【問合せ先】

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11
神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティー創成研究センター黒崎・橋澤まで
電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971
火曜日 13:00～19:00
Mail : krsksck@people.kobe-u.ac.jp



以下のホームページから2025年度募集要項、出願書類をダウンロードできます

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」で検索（7月下旬ホームページ更新予定）

<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>

※本事業は、実践的研究として実施するものですので、個人情報等の点で細心の注意を払った上で、プログラムの様子などについて学会等で発表する場合があります

Q&A

1. 入学したいけれど、私にはむずかしいのでは？
大丈夫です。大事なのは学びたいという意欲です。たしかに大学の先生の授業ですのでレベルは高いですが、ゆっくりとわかりやすく進めてもらいます。また、神戸大学の学生さんに協力してもらい手伝ってもらいます。
2. 授業でわからないことがあると、どうしたらいいのでしょうか？
このプログラムは、初めての試みですので一緒に取り組んでいきます。なんでも質問してください。また、付いてくれる神戸大学の学生さんにも気軽に相談してください。
3. 曜日によっては、17時に間に合わないことがあります。大丈夫ですか？
大丈夫です。仕事や用事で遅れる場合など事前にわかれば、授業内容の説明や途中からの出席に合わせてサポートします。
4. 修了したら、何か資格がとれますか？
このプログラムは、神戸大学の履修証明制度を利用します。修了しても資格や卒業認定にはなりません。KUPIとしての履修証明書は修了式でお渡します。
5. 入学選考は、面接や作文もあってむずかしそうですが？
入学者の選考にあたっては、まず大学で学びたいという意欲を知りたいと思います。自分のできる範囲で気持ちを伝えてください。簡単な作文ですので、書ける範囲でけっこうです。また、パソコンで書きたいという場合は申し出てください。
6. お金がかかりそうで心配です。
受講料は総額で 50,000 円がかかります。それ以外には活動費の実費(たとえば、金曜日の活動で出かけた場合の交通費や食事に行った際の食事代など)が必要です。それ以外には基本的にはかかりません。
7. 感染症が拡大したらプログラムはどうなりますか？
神戸大学全体の対応に従います。もちろん授業は感染防止対策をとって実施します。対面での授業がむずかしい場合は、オンラインなど遠隔授業も考えます。
8. わからないこと、不安なことはどこに相談したらいいですか？
新しい事業ですので、不安があると思います。何でも遠慮なく問い合わせ先(募集要項に記載されている)に電話をして聞いてください。

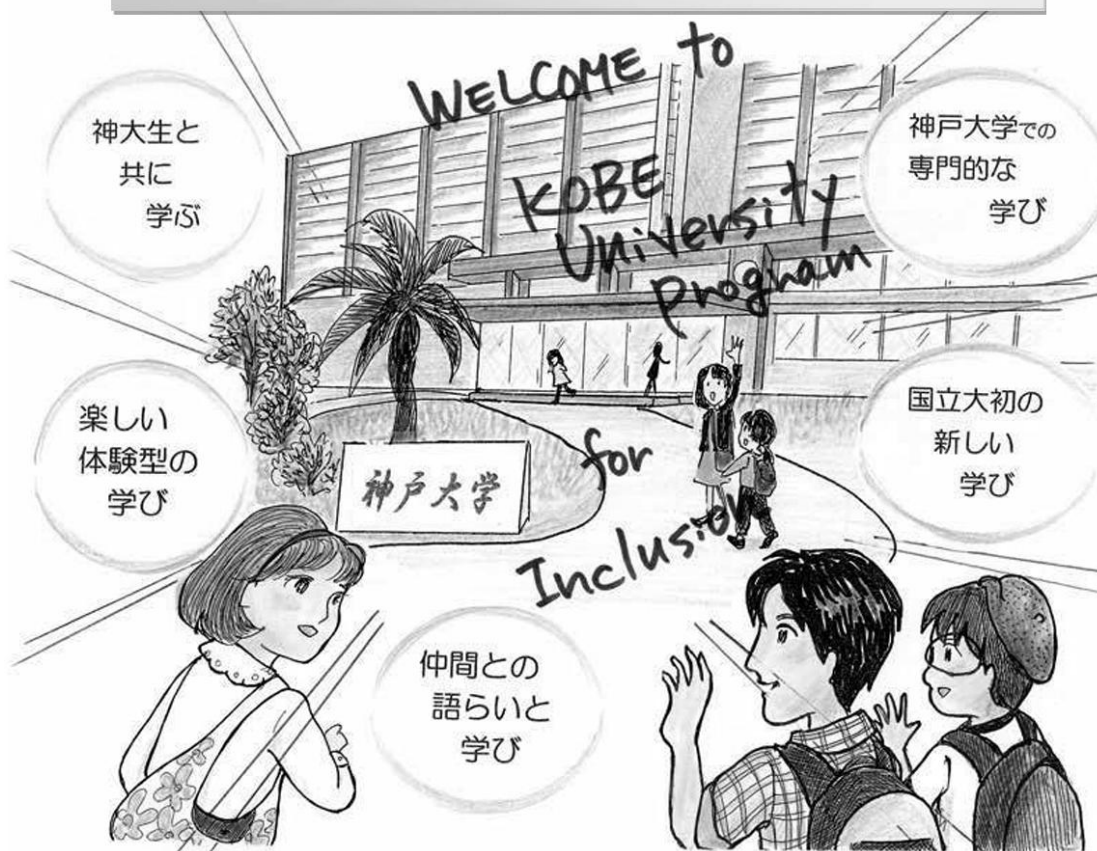
2025年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム

～知的障害青年のための大学教育の創造～

Kobe University Program for Inclusion (KUPI)

学校卒業後の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業の一環



『学校卒業後の障害者の学びを支援するための地域連携コンソーシアム構築事業』

(文部科学省委託研究)

■主な事業内容■

1. 地域連携コンソーシアムの形成
2. 障害者の学びのニーズを踏まえた学習プログラムの開発・実践
3. 神戸大学における学習プログラムの開発

■地域連携コンソーシアム連携協議会■

県教委を中心に、神戸市教委、神戸大学、地元企業、団体、当事者団体などで構成

『コンソーシアム構築事業』の一環で実施

■学ぶ楽しみ発見プログラムの目的■

知的障害や発達障害のある人たちに高等教育の学習機会をつくる委託研究の事業です

■プログラムの特色■

- 神戸大学の資源（設備・人）を活用
- 大学教員の専門性を活かした体験的な学びを提供

学習プログラム

週3(月・火・木 16:30~20:00)



<火曜日> 神戸大学
16:30 HR (夕食を兼ねて)
17:00 「障害共生教育論」: 津田英二先生の講義
*神戸大学生と一緒に受講
18:40 授業のふりかえり
20:00 プログラム終了



<月曜日> 神戸大学
16:30 HR (夕食を兼ねて)
17:00 「よりよく生きるための科学と文化」
*神戸大学の先生等による体験型講義
18:40 授業のふりかえり
20:00 プログラム終了



<木曜日> 神戸大学
16:30 HR (夕食を兼ねて)
17:00 「話し合う! やってみる!」
*やってみたいことを話し合っ
て計画を立てます。外にも出かけます。神戸大学生と一緒に研究や創作活動
をします
18:40 授業のふりかえり
20:00 プログラム終了

- ◆ESD学び隊「ワークキャンプ」
- ◆ボランティア体験
- ◆神戸大学でのイベント参加など



神戸大学大学院人間発達環境学研究科
神戸市バス 36 番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究科前」下車すぐ
(36 番系統のバスは、阪神御影、JR 六甲道、阪急六甲の各駅を通ります)

【問い合わせ】

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲 3-11 神戸大学大学院人間発達環境学研究科
ヒューマンコミュニティ創成研究センター 黒崎・橋澤まで
電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971 (火 13:00~19:00)
メール krsksck@people.kobe-u.ac.jp

ホームページ <http://www2/kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>
*ホームページから本要項、願書、同意書がダウンロードできます



2025 年度

神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム (KUPI)

説明会 (ご案内)

1. 日時 2025年8月19日(火) 時間 17:00 ~ 18:00
受付 16:40 ~
2. 場所 神戸大学大学院人間発達環境学研究所(神戸市灘区鶴甲3-11)
神戸市バス36番系統 鶴甲団地行「神大人間発達環境学研究所前」下車すぐ
会場は当日お知らせします。正面A棟1階の案内板をごらんください。
3. 内容
 - ① プログラムの趣旨、募集要項の説明
 - ② プログラムの内容紹介
授業内容の紹介、スケジュール、時間割の説明
 - ③ 授業を担当する神戸大学の先生と関係者の紹介
 - ④ 入学選考について
スケジュール、選考方法、合否発表と合格後の提出書類について
 - ⑤ 質問コーナー
4. その他
 - *健康をご確認の上、ご参加ください。
 - *説明会の参加がむずかしい場合は、個別に案内をいたします。
 - *個別相談にも応じます。
 - *願書の提出を受け付けます(卒業証明書は後日提出をしてもかまいません)。

【問合せ先】

〒657-8501

神戸市灘区鶴甲3-11

神戸大学大学院人間発達環境学研究所

ヒューマン・コミュニティー創成研究センター 黒崎・橋澤まで

電話 078-803-7970 FAX 078-803-7971

火曜日 13:00~19:00

Mail krsksck@people.kobe-u.ac.jp

*以下のホームページから、本要項、出願書類をダウンロードできます。

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」で検索、又は <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/KUPI.html>



3) プログラムの内容作り

①月曜日「よりよく生きるための科学と文化」

月曜日プログラムは「よりよく生きるための科学と文化」というテーマを掲げ、オムニバス授業として、主に神戸大学人間発達環境学研究科の中で本事業を理解して協力していただける教員と相談しながら授業づくりを進めている。本年度は、神戸大学人間発達環境学研究科の教員9名（うち2名が初登壇）、および元メンター学生の加戸友佳子先生（摂南大学現代社会学部特任助教）にお世話になった。

協力依頼は全てコーディネーターが行い、大学が夏休み期間となる8月から9月にかけて各教員と授業日程や授業内容、授業の進め方などについて打合せを行った。授業の回数は教員1人あたり1~2回とし、月曜日に都合がつかない場合は木曜日に実施するなど、多忙なスケジュールの合間を縫って KUPI にご登壇くださる先生方の負担が少しでも減るよう、柔軟に対応した。

打合せでは、KUPI 学生の特徴や配慮事項、再受講生の割合、メンター学生の役割等を知らせた上で、各教員が持つ専門性を活かした授業をお願いした。また、シラバスやできるだけ視覚的にわかりやすい資料の作成、ワークやグループディスカッションを取り入れた授業の工夫などもお願いした。さらに、専門性のある内容を KUPI 学生のペースに合わせてゆっくりと精選して授業を進めていただけるよう、無理なお願いもさせていただいた。

授業後は KUPI 学生、メンター学生、コーディネーターが約45分間のふり返しを行い、KUPI 学生が帰った後は、更にメンター学生とコーディネーターがふり返しを実施することで、可能な限り教員にフィードバックをした。

教室は通常の講義室のほか、授業の内容に応じて必要な教室（ダンススタジオ、音楽室）の確保をした。

②火曜日「障害共生教育論」

火曜日プログラムは、神戸大学国際人間科学部の授業「社会教育課題研究（障害共生教育論）」として実施している。この授業は、発達コミュニティ学科の専門科目であるとともに、社会教育主事の資格に関連する科目でもある。一般学生と KUPI 学生が共に学びあうことを追求するねらいで、プログラムの内容も検討している。

今年度は、「共生とはなにか？」をテーマにして、「共生」できていない私たちの日常に焦点を当てながら、各人が大切にしていることをきっかけに共生イメージを深める展開とした。前半は、KUPI 学生個々人が「共生できていない私たち」についてパワーポイントを用いて表現するプレゼンテーションを行い、後半は各人にとっての共生を表現する「写真絵本づくり」に挑戦した。特に後半は、昨年度までの取り組みを踏襲して KUPI 学生と一般学生が協働で作品を創作することをめざしたが、テーマの性格上、結果的に KUPI 学生の表現を一般学生やメンター学生がサポートするという形となった。また、授業の途中では、写真撮影が得意な KUPI 学生（本年度は受講せず）の協力を得て、写真撮影の魅力

や撮影術について学んだ。

授業担当者は、こうした授業展開によって、次のような効果を狙った。

- KUPI 学生が、日々の生活や関心事と、世界で起こっていることとを自然な形で関係づけ、自分自身を社会の中に位置づける思考に焦点を当てる機会とする。
- KUPI 学生、一般学生両者にとって、異質性の高い他者と協働して作品を制作する体験となり、挑戦する気持ちを共有できる機会とする。
- 一般学生が、知的障害者の歴史的・社会的な立場性を意識しながら、KUPI 学生と共に学ぶ他者として関わる機会とする。

授業最終日に設定した最終発表会は公開授業とし、保護者をはじめとする多くの関係者が集まり、7本の力作をみんなで鑑賞した。

③木曜日「話し合う！やってみる！」

教員の参加はなく KUPI 学生とメンター学生が主体となって活動している。17:00～19:45 が活動時間となるため2回ほど休憩を入れて、様々な活動や計画を同時進行させることが多かった。煮詰まった時には「休みの日に何をしていた？」というアイスブレイク的な対話を入れるなど、その日のファシリテーター（メンター学生）が KUPI 学生の様子を見ながら活動を進めた。

活動内容は KUPI 学生から出た意見を元にメンター学生が内容を提示するが、今年もみんなでボーリングやカラオケに行きたいという声が多かった。そういった活動も魅力的だが、せっかくなので大学でしか体験できない活動は何かと考え、将来のことを話したり、10年後の生活を想像したり、イライラした時はどうしてる？と言った対話をして、自分のことを話すだけでなく、他者の意見を聞いて考えるきっかけになることを多く取り入れた。こうした対話は博士後期課程のメンター学生がコミュニティボールを使用する方法（p4c）を取り入れてくれた。ルールはとてもシンプルで、ボールを持っている人が話す、話したくない時はパスができる、他の人が傷付く言い方はやめよう、などわかりやすいものだった。コミュニティボールがあることで、今、誰が話しているかが一目でわかり、話したくてウズウズする人も待つことができた。今年は受講生が少なくて寂しいという声が多かったが、対話に関しては話せる時間がたっぷりあったおかげで、一人一人の話にじっくり耳を傾けることができた。

4) 入学者募集の状況と応募、選考

7月末から学生募集を開始。前年度の受講生に案内メールを送った。再受講を推奨しているわけではないが、毎年楽しみにしている受講生が多いため連絡を行ったところ、約半数から出願があった。出願者は全員で7名。選考会は9月1日に面接（本人）と作文選考を実施した。グループ面接は赤木教授と川地教授が担当、作文選考はコーディネーター2名が担当した。作文は KUPI が準備した原稿用紙に記入するかパソコン入力かを選んで

らい、絵を描いてもよい。作文選考の間は静かな教室で鉛筆の音だけが響いた。2枚目を書く人やじっくり考えて書く人、とそれぞれだが真剣に向き合う姿にこちらの背筋も伸びた。

運営委員で協議の結果、7名が合格し、合格内定通知書を発送した。正式な合格通知書は入学式に手渡した。



5) 神戸大学学生のメンター募集

今年度は、神戸大学国際人間科学部、人間発達環境学研究科の学部生、大学院生延べ12名がメンター学生として活躍した。内訳は、月曜日3名、火曜日5名、木曜日4名であった。昨年度は19名のメンター学生を雇用したが、今年度はKUPI学生の人数が少なかったことに加え、昨年度までメンターを経験した学生のうち7名が卒業または修了し、また新規のメンター学生の募集に手間取ったため、少ない人数でのスタートとなった。

新規のメンター学生は6名であった。これらの学生は、以前からKUPIの取り組みに関心を持っていた学生および、関係する教員やゼミ、授業での呼びかけに応じた学生たちである。また、今年度も昨年度に続き1名の学生がボランティアとして継続的にプログラムを支えた。

6) 大学教務の協力で「特別の課程」制度の発展を

募集は昨年度と同様、学校教育法に規定される大学等における「特別の課程」履修証明制度を活用した。詳細の資料については2020年度の報告書を参照いただきたい(<https://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/resources/KUPI2020Report.pdf>)。

履修証明制度に関わる事務は国際人間科学部教務学生係とKUPIコーディネーターで分担して行い、合格通知書や履修証明書の発行については教務学生係が担当した。履修証明書は授業の出席回数や出席態度に基づき、評価委員会と教務委員会で修了の承認を得て学長名で発行した。学生証はオリジナルのフォームで、図書館利用証も発行された。

7) 保険の加入について

保険は、「学生教育研究災害傷害保険」(任意)の案内を行い、半数以上のKUPI学生が加入をした。

8) 入学式の様子

10月2日(木)17時になると、津田英二教授(アルトサクソ)とメンター学生(ピアノ)によるお祝いの即興演奏が始まった。演奏に合わせてメンター学生が打楽器で参加すると、一気に会場の緊張が和らいだ。続いてKUPIの卒業生がマリンバ演奏を披露して、

お祝いの言葉をかけてくれた。急な声かけにもかかわらず、快く演奏を引き受けてくれたメンター学生と卒業生に感謝したい。

会場の緊張がほぐれたところで、KUPI 学生は津田英二教授から合格通知書を受け取ると、気候変動について学びたい、英語で交流をしたい、今年が最後だからしっかり学びたい、などそれぞれの抱負を語った。

岸本吉弘教授からはマリimba演奏と KUPI 学生の抱負をお褒めいただき、「プログラムのタイトル通り、学ぶ楽しみをどんどん発見して楽しんでください。そうすると周りに楽しさや嬉しさが伝わります。私も日常的に楽しいことを探しているの、一緒に発見しましょう」とお祝いの言葉をいただき、KUPI でご登壇いただく授業についても語られた。岸本吉弘教授には前年度の活動で取り組んだ階段アートで、制作する際にアドバイスをいただき、制作中も様子を見に来てくださるご縁があった。



KUPI 運営委員の川地亜弥子教授からは、「KUPI は色々な楽しさがあり、仕事のあと大学に来て疲れていても、授業や活動は楽しいそうです。授業は難しいこともあるけど、わからないことを学ぶのは大学の醍醐味なので、KUPI 学生やメンター学生と一緒に、楽しさもぜひ楽しんでください」と、大学で学ぶ楽しさについて語られ、メンター学生と受け付けを手伝ってくれた2名の卒業生からもお祝いの言葉をかけてもらった。

入学式後は木曜日の活動としてコミュニティボールを作りながら自己紹介を行い、「好きな魚」を話すことで、楽しい対話になった。



9) 卒業研究発表会と修了式の様子

会場準備を進める横で研究発表のリハーサルが行われた。卒論指導を担当したコーディネーターの橋澤慧とメンター学生の荒木絃汰、井上太一は KUPI 学生と最終確認を行い発表に備えた。研究発表のあとにダンスや楽器演奏を披露したいと、思ったことを自ら伝えてくれたことに変化と嬉しさを感じた。発表までの経緯になるが、ここにたどり着くまでの道のりは様々で、テーマ決めに悩んで学外に出かけて答えを求めた人、やりたいことが明確でメンター学生と突き進んだ人、研究を進めかけたが一番やりたかった想いを手紙で

伝えてくれた人、体調不良で大学に行けない時は自宅やオンラインで進めた人、とそれぞれが熱心に取り組んだ発表であった。時間の確保が難しいため、自宅でスライド作りを行ったり、KUPI がない日も大学に来て取り組むなど努力も称えたい。詳しい内容については「5.4 回目受講生による卒業研究」で述べる。



修了式が行われる前に、卒業生が歌とダンスを披露した。1月に「修了式でみんなのお祝いをしたい」と連絡があり、この日は仕事を休んで来てくれた。卒業しても後輩のことを気にかけてお祝いしてくれる気持ちが嬉しかった。

津田英二教授から履修証明書を受け取ると感想を話した。授業を担当した加戸友佳子特任助教（摂南大学現代社会学部）、兵庫県の「まなプリ」動画作りや対話でお世話になった橋田慈子助教（千葉大学教育学部教育学教室）からお祝いのメッセージをいただき、KUPI 学生のことを一番よく知るメンター学生やボランティアからは、一緒に学んだけど実は学ばせてもらった、毎週楽しみだった、じぶんにとっても居場所だったという温かいメッセージをたくさんいただいた。

津田英二教授は、「みなさんは余人をもって代えがたい人たちです」と話した。わかりやすく説明し、どこの世界でも大事にしてもらえるところに行くと、余人をもって代えがたい人になれるよと話した。また、卒業研究発表で「KUPI をする」と表現した言葉を発



展させて、「KUPI する（クピる）」という動詞を流行らせようと投げかけ、KUPI 学生が意味を答える場面もあった。卒業生には KUPI はいつ来ても良い場所だと伝え、次年度も受講予定の KUPI 学生には学ぶことを楽しんで KUPI を広めようと話した。修了式のあとは集合写真を撮って終わった。歓談時間は卒業発表の掲示物を見たり、会話や写真撮影を楽しむなど温かい空気に包まれる時間が続いた。

10) 4 回目受講生の扱いについて

4 回目の受講生には本年度で卒業をすることについて説明を行い、卒業研究の取り組みについて説明を行った。取り組みについては自由としたが、全員が研究に意欲的だった。卒業研究についてはコーディネーターの橋澤さんが 2 名を担当し、メンター学生の荒木さんと井上さんが 1 名ずつ担当した。

次年度以降も 4 回目の受講生には同様の対応を行う予定である。卒業という形を取ることになった経緯については 2022 年度の報告書を参照いただきたい (<https://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/resources/KUPI2022Report.pdf>)。

11) 卒業生の参加について

卒業生から「また授業を受けたい」と強い希望があるため、運営委員で話し合った結果、佐賀達矢助教の授業と木曜日に行われる「体験新喜劇」、そして津田英二教授の授業で取り組んだ「共生」についての最終発表会に参加してもらうことになった。予定ではこれだけだったが、KUPI 学生から大田美佐子教授の授業と木曜日の学外活動も一緒に受けたいと意見が出たため、急遽声をかけて一緒に楽しんだ。先生方と外部講師の皆さまにご理解をいただいたことに感謝を伝えたい。

8 名の卒業生は興味ある分野に参加した。最終発表会は 2 時間に及んだが、最後まで熱心に観て感想を述べる他、それぞれの発表について感想を書いた。次年度も卒業生が参加できる方法を考えていきたい。

3. プログラムの内容

1) 「よりよく生きるための科学と文化」

【プログラムの趣旨】

「よりよく生きるための科学と文化」を柱に、人間と生活、社会、自然、文化といった視点で授業を構成した。神戸大学を中心とした、教育学、社会学、哲学、芸術、自然科学等を専門にする教員による特別授業を実施した（教員/授業内容については次ページ記載）。

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」と名付けているように、KUPI での学びは“学生が楽しく学べること”を重視している。そのため、教員、コーディネーター、メンター学生が連携しながら、大学の学びとしての質を落とすことなく、楽しみながら学べるよう工夫を施した。

【担当講師に伝えた留意事項】

- KUPI 学生が知的障害青年ということを配慮し、授業の進行はゆるやかなテンポを心がけること。
- 事前に授業の概要や流れを知り、見通しを持たせるため、シラバスの作成をすること。
なお、シラバスは授業実施日の前週を目処に KUPI 学生とメンター学生に配布した。
- KUPI 学生にわかりやすくするために、スライドの投影や資料の配布などで、なるべく視覚的補助をすること。
- 専門用語や聞き慣れない言葉を使用する場合、できるだけわかりやすく解説すること。
- 授業には基本、KUPI 学生 2～3 人に対して 1 人のメンター学生がつくこと。また、メンター学生は授業が理解しやすいよう KUPI 学生をサポートするので、必要に応じて協力要請が可能であること。

【KUPI 学生へのサポート】

KUPI 学生がすぐにサポートを求められる環境づくりを重視し、KUPI 学生 2～3 人に対してメンター学生を 1 人配置した。KUPI 学生同士およびメンター学生との関わりに偏りが出ないよう、都度コーディネーターが調整を行った。

また、授業で学んだことの理解を深めるため、授業後にふり返りの時間を設けた。コーディネーターが授業内容を振りかえるとともに、3 つ程度の問いを提示し、2～3 グループに分かれて話し合いを行ってもらった。話し合いでの内容は模造紙などに記入するとともに、最後に各グループが話し合いで出た内容を発表しあって、全体で共有した。本年度は受講生が 7 名と例年に比べて少数であったことから、最後の発表は毎回全体で実施した。

【月曜日プログラムの授業内容】

日 程	テーマ	講 師
10月6日	自己紹介しない自己紹介	赤木 和重 教授
10月20日	コンテンポラリーダンス体験 ～彫刻みたいに、創ろう、踊ろう～	關 典子 准教授
10月27日	身近な昆虫“スズメバチ”の生態と 蜂の子を食べる文化	佐賀 達矢 助教
10月30日	本能（心）で絵を描こう！	岸本 吉弘 教授
11月10日	燃える氷！？メタンハイドレート	谷 篤史 教授
11月17日	氷の中に雪が見える？	
11月27日	「歌」が表現しているもの、「歌」で表現できるものを 「想像」する——音楽文化史の世界①	大田 美佐子 教授
12月1日	わたしのひみつ道具～じぶんに贈る道具～	稲原 美苗 准教授
12月8日		
12月15日	新聞を「掘って」みよう①	加戸 友佳子 特任助教 (摂南大学)
12月22日	図書館探検！古い新聞を見つけよう (新聞を「掘って」みよう②)	
12月25日	「歌」が表現しているもの、「歌」で表現できるものを 「想像」する——音楽文化史の世界②	大田 美佐子 教授
1月19日	視覚を使わずに立体作品を鑑賞し パステルで感じたことをあらわそう	勅使河原 君江 准教授
1月26日	人はなぜ書くのか	川地 亜弥子 教授
2月2日		

自己紹介しない自己紹介

講師：赤木 和重 教授

<概要>

2025年度 KUPI の最初の授業は漢字を用いた「自己紹介しない自己紹介」を行った。まず、漢感伝（かんかんでん）を行った。3つの漢字によって自分の好きな食べ物を表現し、グループで3つの漢字が何の食べ物を表現しているのか問題を出し合った。そして、その後漢字2文字を組み合わせて創作熟語を作り、KUPI 学生全員で創作熟語の読み方と意味を考えた。自己紹介をしなくても、自分の伝えたいことを伝えると自分のことを分かってもらえるし、相手のことも分かるというねらいの授業であった。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：漢感伝（スリーヒントクイズ）で好きな食べ物を伝え合おう！

KUPI 学生たちは好きな食べ物を3つの漢字を使って表現し、それらの情報から好きな食べ物を当てるクイズをグループ内で出し合った。漢字は1つずつ他の KUPI 学生たちに見せられていき、それを見た KUPI 学生たちは問題の出題者に自分の思う答えを言っていた。すぐに答えにたどり着けるときもあれば、時間がかかるときもあり、正解が出ると「おおー！」といった声があがり、盛り上がりを見せた。片方のグループからはステーキ、カツ丼、きゅうり、ラーメンが挙げられ、もう片方のグループからはハンバーグ（3人）、ゴーヤ、卵が挙げられた。

・エピソード②：熟語を創作してクイズにしてみよう！

KUPI 学生たちは黒板に貼られた漢字から2つを選び、熟語をつくった。熟語をつくった学生は指し棒を持って黒板の前に立ち、その学生がつくった創作熟語の読み方と意味をフロアのみんで考え意見を出し合った。予想が出るたびに黒板の前に立っている学生は「せいかい」「おもしろい」「おいしい」「まあまあ」のうちのどれかを指し棒で指していた。知っている単語をつくる学生もいれば、Kくんのように好きなものを熟語にする学生もいた。うんちの指し棒を使った際には笑いが溢れたり、フロアからもいくつも意見が出たりと、終始和やかな雰囲気だった。



<授業を振り返って>

2025年度月曜日の授業としては1回目であり、かつテレビの取材も来ていたので、緊張している KUPI 学生もいたかもしれないが、グループごとに漢感伝を行った際に和気あいあいとした雰囲気になり、初対面の緊張も多少ほぐれたのではないかと思う。それに加え

お互いのことを知る時間になったのではないかと思う。また、漢字を 2 つ組み合わせることで新たな意味を持つ言葉をつくりあげることができることは KUPI 学生にとっては初めての試みだったのではないかと考えられる。明確に自分のことを紹介しなくても、分かり合える部分もあるし自分の考えや好きなこと、思っていることを表現できるという気づきになったのではないかと思う。

コンテンポラリーダンス体験 ～彫刻みたいに、創ろう、踊ろう～

講師：關 典子 准教授

<概要>

ダンススタジオのような教室で、「彫刻になる」を体験した授業である。はじめに、マッサージとストレッチを行った。体が十分にほぐれたら、4 人グループの中でダンス体験を行った。最後に、ペアでのダンス体験を行い、1 組が発表をして終了した。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：みんなで体をほぐそう

マッサージやストレッチは、全員で円になったり、2 人組を組んだりして行った。接触を苦手そうにする KUPI 学生や、体を過度に動かすことに不安を感じる KUPI 学生などもいたが、コーディネーターが間に入ったり、メンター学生と 3 人 1 組で行ったりして、授業に参加することができた。J さんが、ペアでマッサージやストレッチをする際に、相手のことを気遣いながら動かそうとする姿勢が印象的だった。寝転んでいる相手の足をブラブラ揺らすなど、普段はあまりしない動きに、楽しそうにしている様子が見られた。

・エピソード②：グループで彫刻を作ろう

グループの中で彫刻になる人を 1 人決め、その人を動かすのは 1 つの部位だけ、という制限があった中で、手や足を思い切り動かしたり、膝を立てるなど姿勢を変えたり、それぞれがいろいろな動かし方をしていた。中でも、L さんが、指先だけ動かすという独創性を見せていた。それを見て、別のグループでも指先を動かしてピースサインを作るなど、新たな動きが生まれていた。彫刻になる KUPI 学生も、立った状態から始めたり、寝転んだ状態や座った状態から始めたりと、各々のポーズに個性が存分にあらわれていた。また、自分や自分が作ったポーズを鏡を見て、調整しているグループもあった。講師を彫刻として行った際には、講師の体の可動域が広いいため柔軟なポーズになったのを感嘆して見ていた。



・エピソード③：2人組でダンスをしよう

最初は、複雑な動きに戸惑う様子も見られたが、講師によるサポートなどもあり、徐々に慣れて、体を次々と動かしている様子が見られた。最後の発表には、JさんとKさんのペアが挑戦。2人ともダイナミックな動きで、次々と素早くポーズを展開していた。見ている人も、歓声を上げたり、コメントをしたりと2人の動きを楽しんでいるようであった。

＜授業を振り返って＞

体を動かすことに積極的でない KUPI 学生も、体が温まるにつれて授業に入り込んでいく様子が見られたのが印象的だった。最初から楽しそうな KUPI 学生も、新たな動きをするうちに、さらにわくわくしているように見えた。休憩時間には、KUPI 学生の何人かが一緒にダンスをする様子も見られ、授業外でも楽しんでいる様子が印象的であった。コンテンプラリーダンスを通して、自分の身体のことと相手の身体のことを知ることができた授業であった。また、各々の動かし方の癖に気が付いている KUPI 学生もいて、ポーズを作る中で、各々の独創性が発揮されていたといえるだろう。

身近な昆虫“スズメバチ”の生態と蜂の子を食べる文化

講師：佐賀 達矢 助教

＜概要＞

はじめに蜂の生態についての説明が行われた後、講師が持参した本物のオオスズメバチやその幼虫、大きな巣を観察した。その後、講師自身の研究成果を交えながら日本や世界の昆虫食文化について講義がなされ、我々の食文化が環境や生活の豊かさやどう結びついているかについて考えた。

なお、この日はKUPIの卒業生も参加し、にぎやかな授業となった。

＜授業の様子＞

▶KUPI 学生の様子

エピソード④：虫、蜂に対しての印象を話してみよう

授業の最初に、講師から虫が好きかどうかという質問がなされた。それに対して、KUPI 学生の多くは、「好き」だと答えていた。虫のどんなところが好きかという問いに対して、Jさんは「動きが面白い」と答えており、普段の経験が授業の内容と上手く結びついている様子を窺わせた。次いで、蜂について知っていることを周囲の人と話し合った後、発表が行われた。Pさんは、アシナガバチが家の近くにいるということから、なぜアシナガバチは家に巣を作るのかという問いを立てて、質問していた。ここでも、授業の内容を自身の経験と結びつけて考えられている様子が見られた。

エピソード②：本物のオオスズメバチと蜂の巣を観察してみよう

オオスズメバチや蜂の巣を間近で見ることができたため、興味津々で覗き込んでいる KUPI 学生が多かった。J さんや L さんは、講師に教わりながらオオスズメバチを自分の手でつかむという体験をしており、好奇心の強さを窺わせた。また、M さんは、蜂の巣の中にいた幼虫を触り、「ぬるぬるしている」という感想を述べていた。一方で、昆虫を苦手としている KUPI 学生もあり、遠巻きに見つめるなどと個々人の距離で向き合っている様子が見られた。



エピソード③：食文化や持続可能性について考えよう

授業の後半では、昆虫食をはじめとする現代の人間の食文化における、日本および世界の現状や課題についても紹介された。エビや白身魚、神戸市近辺では「くぎ煮」として有名なイカナゴをはじめとする身近な食材を挙げながら、「養殖は持続可能か?」「食い尽くすのは悪いこと?」「どのような生き方、食生活をしたいか?」などの問いを提示されると、現代の食文化や持続可能性について真剣な表情で考える KUPI 学生の姿が見られた。

<授業を振り返って>

蜂、ひいては昆虫という好き嫌いが分かれそうなテーマであり、実際に忌避感を示している KUPI 学生も強い興味を示している KUPI 学生も存在した。ただ、昆虫についての専門性が高い内容が多岐にわたって示されており、昆虫が苦手な KUPI 学生も、少しだけでもその面白さに触れることができたのではないだろうか。オオスズメバチや蜂の巣といった、普段はあまり近づいたり触ったりできないようなものに触れられる、という経験は皆にとって貴重なものであったように思われる。

また、ふり返しシートでは「普段食べている食べ物の裏側についても考えていきたい」火曜日プログラムのテーマ「共生」を想起して「それこそ共存できていない」といった記述があり、「よりよく生きる」ことの良さや難しさについて再考するきっかけになったのではないだろうか。

本能（心）で絵を描こう！

講師：岸本 吉弘 教授

<概要>

この日は、普段月曜 KUPI で行われているオムニバス授業があった。テーマは「本能（心）で書こう」。講師は「Don't think! Feel!」と、視覚を目隠しによってなくすことで、手で半紙や絵の具を触る感覚を感じて、まさに手探りで絵を描いていくことの面白さをお

話してくださった。KUPI 学生には、1人あたり半切サイズ3枚、全紙サイズ1枚の合計4枚の画用紙と、黒や白の絵の具が用意され、ラジカセから流れる音楽や、自身の「心」をそれぞれの描き方で表現した。

なお、本授業は講師の都合により木曜日に実施されたため、木曜プログラムのメンター学生がサポートを担当した。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：目隠しをして素手で絵を描くことへの葛藤と克服

実際に目隠しをして手で書いてみる活動を行った。1枚目、目が見えないという恐怖が勝つのか、絵の具を素手で取り紙に描くということへの戸惑いからか、みんなそーっと手を絵の具につけて、控えめな様子で紙に手を滑らせていた。2枚目、3枚目、何人かは感覚がつかめたのか、だんだん躊躇なく手を絵の具に突っ込み、大胆に紙に滑らせていくようになってくるのが、印象的だった。

・エピソード②：思った通りの絵が描けたかな？

最初は「音を描く」ということで、1回目は、昨年度オムニバス授業も担当して下さった、作曲家の余田有希子先生の曲を聞いて描いた。Pさんは目隠しを外したタイミングで自分の書いた絵に驚き「うわあ何これ！」とひとこと。自分が思っていた絵とは違ったようであるが、とても満足気であった。

はじめて大きな画用紙に書いた作品に、講師も「これが皆さんの最高傑作かもしれませんね」とひとこと。はじめて目を使わずに描いた絵にみんな驚きとワクワクを感じていたように思う。



・エピソード③：描き方にも KUPI 学生一人ひとりの個性が現れる

2回目は、黒の絵の具に加えて、白の絵の具を用いて絵を描いた。しかし、目隠しをしているので、今、黒を塗っているのか、白を塗っているのか分からない。メンター学生に色を伝えて、黒か白かを分かっている状態で描いていく KUPI 学生もいれば、何も聞かずに黒か白か分からない状態のまま描き進める KUPI 学生がいた。書き方だけではなく、違いは作品にもみられた。画用紙いっぱい描く KUPI 学生もいれば、一部に集中して描く KUPI 学生もいるなど、みんなの個性が出るのも印象的であった。

最後は全紙サイズの画用紙にそれぞれ自身の心を描いた。みんな慣れたもので迷いなく描き進める姿が見られ、唯一無二の作品が完成した。

授業後の振り返りとして、それぞれ描いたものについての思いや授業の感想、どんな題名をつけるのかを対話した。題名は友達のお気に入りの作品を選んでつけ、自分で決めた題

名と友達がつけてくれた題名の違いに面白さを感じていた。

<授業を振り返って>

絵を描く時、人は誰しも目で見て色を選び、大胆に、あるいは繊細に描き、時々離れた場所から眺めてみたりして、完成させる。できあがった絵を、人々は目で見て鑑賞する。このように、絵画の文脈において視覚はとても大きな役割を果たす。また、多くの場合、絵を描く時は筆などの道具を使う。指で描く技法も存在するが、決して主流ではないだろう。本授業は、これらの「当たり前」を崩すことが目的であった。KUPI 学生は最初こそ戸惑いが見られたが、あっという間に慣れた。全身全霊で触覚や聴覚に意識を研ぎ澄ませて「描く」という行為そのものを楽しんでいる姿は、KUPI 学生が「当たり前」に対していかに柔軟であるかを表していたように思う。

燃える氷！？メタンハイドレート

講師：谷 篤史 教授

<概要>

最初に、講義形式でメタンハイドレートについて学んだ。メタンハイドレートが実際に燃えている動画を見るなどして、メタンハイドレートへの造詣を深めた。説明を受けた後、プラスチックの部品を用いて、メタンハイドレートの分子模型を作成した。最後に、授業を通しての質問とそれに対するの応答が行われた。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：燃える氷のことを学ぼう

メタンハイドレートについて、講師から質問がなされた。メタンハイドレートが燃えている動画を見た際、M さんは、「冷たいんですか？」と驚いたように聞いており、興味を持っている様子を見せていた。

・エピソード②：分子模型を作ろう

分子模型は、青いテトラポット型の部品と透明のチューブのような部品をつなぎ合わせて作られた。メタンハイドレート分子は、五角形の面が 12 個からなる構造であるが、図形の理解が苦手な KUPI 学生もおり、模型の見本を置いておいたり適宜メンター学生がサポートしたりして作業が行われた。N さんや J さん、K さんは、細かい作業が得意なようで、集中して作っていた。M さんは、青い部品と透明の部品をつなぎ合わせて作るかたまり



を最後に全てつなぐ方法で作っており、楽しみながら作ることができていた。模型が完成した後も、嬉しそうに持って帰っていた。

・エピソード③：授業の内容について講師に質問してみよう

授業の最後には、KUPI 学生からの質問に答える時間が設けられた。人により着目するところが異なり、講師も唸るような多様な質問がなされていた。例えば、Lさんは、「メタン」という名前に着目し、メタンとチタンとの違いについて質問していた。また、Jさんは、メタンハイドレートについてとても興味を示しており、多くの質問を投げかけていた。Pさんは、講師が船で行ったという研究に興味を示しており、船での生活についての質問をしていた。それを受けて、Jさんも船での生活に関する質問をしており、KUPI 学生同士で影響を与えあっている様子が見られた。

＜授業を振り返って＞

メタンハイドレートについて、「氷が燃える」ということに驚いている様子が見られ、KUPI 学生にとっても印象深い授業になったのではないかと考えられる。自分で手を動かして作った模型にそれぞれの愛着を持っていた様子が印象的であった。講義を聞いた話し合ったりするだけではなく、模型を作るという時間があったことで、授業のメリハリを作ることができ、また KUPI 学生それぞれが達成感を持つことができていたのではないだろうか。

氷の中に雪が見える？

講師：谷 篤史 教授

＜概要＞

氷の中の結晶（チンダル像）を見ることに挑戦した授業である。はじめに、結晶についての簡単な説明が行われた。次に、ブロック状の氷を実際に提示しながら、実験の方法について説明された。その後、KUPI 学生それぞれに発砲スチロールに入った氷が配られて、実験が開始された。KUPI 学生それぞれが、氷の中の結晶を観察した後、観察に基づいた質問が投げかけられて、グループになりその答えについて考えた。グループごとの回答を共有し、最後に講師から解説がなされた。

＜授業の様子＞

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：氷の中の結晶を観察しよう

実験は、水道で氷の膨らんでいるところをある程度溶かした後に、バットの中で滑らせて、まっすぐにするという作業から始められた。Jさんは、水道での作業の後、廊下で寒

さも気にならないくらい集中して氷を溶かしている様子が見られた。また、実験が進むにつれて、氷の中の結晶が見えたことに喜んでいる KUPI 学生の様子が見られるようになった。N さんは、自分の氷では結晶を見ることができなかったが、講師の氷で結晶を見ることができ、嬉しそうであった。

一方で、小さい結晶を見ることが難しく、自分で見えた時の喜びを感じることができなかった KUPI 学生も存在した。そうした KUPI 学生に対して、氷を貸してあげたり、見えやすいように位置を教えてあげたりと周囲が手助けしようとする姿勢が見られた。



・エピソード②：グループで質問の答えを考えよう

観察が終わると、講師から「(氷の) 真ん中の“あわ”は何でしょう?」「(結晶は) 時間がたつと形はどう変わる?」「もう一度凍らせるとどうなる?」という3つの質問がなされた。それぞれが、思い思いの回答をしていたが、K さんは、「もう一度凍らせたらどうなる?」という質問に対して「無意味」という K さんらしさがあふれ出る面白い回答をしていた。

<授業を振り返って>

前の回と同様に、自分で手を動かして結果を得ることの喜びを感じさせる授業であった。

実験の際には、KUPI 学生同士で協力する様子も見られ、「みんなで行う」ことの重要性や意義などを感じた人もいたのではないかと考えられる。一方で、授業の方法やサポートの仕方に向上の余地があることを示した授業でもあった。また、2週に渡って授業を行ったこともあり、講師と KUPI 学生が積極的に交流している様子が見られたのも印象的であった。

「歌」が表現しているもの、「歌」で表現できるものを「想像」する

—音楽文化史の世界

講師：大田 美佐子 教授

<概要>

1 回目の 11/27 は《花は咲く》、2 回目の 12/25 は KUPI 学生らがリクエストしたクリスマスソングを題材とし、担当講師のピアノ伴奏に合わせて歌唱することで音と言葉の結びつきを体験した。また、歌詞の意味や楽曲が制作された当時の時代背景を学びながら、音楽と歴史や文化との繋がりについて考えた。

なお、本授業は担当講師の都合により木曜日に実施されたため、木曜プログラムのメンター学生がサポートを担当した。

①自己紹介・《花は咲く》を歌おう

＜授業の様子＞

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：みなさんの好きな音楽はなんですか？

授業の前半では、講師がまず音楽授業に対する考え方について簡単に説明した後、学生一人ひとりが順番に自己紹介を行った。その際、自分の好きな曲についても併せて紹介するよう求められた。

KUPI で開講される音楽の授業では、担当の講師が違ったとしても、ほぼ必ずといっていいほど最初に自己紹介で好きな楽曲やアーティストについて尋ねられる。しかし、不思議なほどに「好きな音楽は特にない」という KUPI 学生には出会わない。彼らはむしろ嬉々として、目を輝かせて自分の好きな音楽について語ってくれる。

自身の好きなアニメの主題歌を挙げた KUPI 学生が複数いた一方で、普段仕事でよく歌うらしい昭和歌謡をたくさん挙げた KUPI 学生もあり、彼らの普段の様子が垣間見えるようであった。また、過去の災害を契機として制作された《花は咲く》《しあわせ運べるように》を挙げる KUPI 学生もいた。さらに、ある KUPI 学生はビートルズ、ビリー・ジョエル、ブラームスと並べたところで、講師が「B にこだわりがあるわけではない・・・？」と尋ねる場面もあった。

・エピソード②：みんなで《花は咲く》を歌ってみましょう

全員の自己紹介が終わると、授業の題材である《花は咲く》など数曲の歌詞と楽譜が配られ、曲について講師が作曲背景や歌詞に込められた感情などが丁寧に説明された。配布された曲の中には、学生にとって馴染みのあるものも多く、全員で講師の伴奏に沿って合唱を行った。歌詞を追いきれない KUPI 学生にはメンター学生が近くに寄り添い、歌詞の1行1行を指しながら小聲で一緒に歌うよう促すことで、学生のテンションがどんどん高くなった。また、サビの部分で、感情が高まって、声が大きくなる学生の影響で周囲の学生も自然と声量が上がっていく様子が見られた。特に《花は咲く》を合唱した際には、全体の一体感が強く感じられた。



授業後の振り返りでも、《花は咲く》という曲が過去の記憶を思い出させたという感想が多く挙がった。例えば、「小学生の頃、クリスマスの行事でこの曲を歌ったことがあり、とても良い曲だと感じた」「数年前の東日本大震災を思い出したが、皆で一緒に合唱できて嬉しかった」といった発言があった。

<授業を振り返って>

授業前半で、講師が「音楽と記憶は結びついており、歳をとって言葉がでなくなった人が歌を歌うと言言葉が出てくることがある。学校では『脇役』だった科目が、実は人生の中で大切な要素なのだ」ということを KUPI 学生に語りかける場面があった。東日本大震災の復興応援ソングとして制作された《花は咲く》は、当時テレビなどで連日耳にしていたり、過去に学校で歌った経験があったりと、東日本大震災を直接は経験していない KUPI 学生らにとってもかなり印象深い楽曲のようであり、「音楽と記憶の結びつき」を実感したのではないかと思う。

中には 2018 年に起きた大阪府北部地震を思い出すなど KUPI 学生の精神面への負担が心配される場面もあったが、近くに配置されたメンター学生の適切なサポートにより、KUPI 学生それぞれに合ったやり方で授業に参加できている様子であった。

<番外編>

授業が終わってから、翌週に控えた体験新喜劇の最終発表に向けて小道具制作を行った。ポスターの文字やデザインに取り組んでいる学生や、テレビ局の取材用カメラの模型を制作している学生、色紙を用いて携帯電話を作っている学生などがおり、それぞれが自分の作業に集中している様子が見られた。これも来週の発表を楽しみにしている様子が伝わってきた。



②クリスマスソングを歌おう

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：クリスマス楽しみだね！

1回目の授業から1ヶ月、2回目の音楽文化史の授業日はちょうどクリスマス当日であったため、クリスマスにちなんだカチューシャや小物を身につけて授業に参加する KUPI 学生が見られた。この日は授業後にクリスマス会も予定されており、KUPI 学生は授業前からクリスマス会のことをとても楽しみにしている様子であった。KUPI 学生の希望により卒業生数名も参加して賑やかな授業となった。

・エピソード②：クリスマスソングを歌おう

講師は前回の授業後に KUPI 学生から挙げられたリクエストをもとに、クリスマスソングの歌詞を配布した。学生は講師の伴奏に合わせて、配布されたクリスマスソングを順番に合唱した。日本語の曲は多くの学生がよく知っていて、とてもスムーズに歌えていた。また前回と同様に、サビなど盛り上がる部分になると自然と声量が上がり、教室全体に一

体感が生まれていた。特に M さんは最後までテンションが高く、周囲のメンター学生や KUPI 学生に対して「どうだった?」「俺うまい?」などと声をかけて、自信満々な様子が印象的だった。



リクエスト曲の中には英語の歌もあり、英語が得意ではない KUPI 学生はやや苦戦しているようだった。英語の歌詞が読めず、うまく歌についていけない学生もあり、気持ちが落ち込んでしまう様子であった。しかしその際には、メンター学生が近くで小声で励ましながら歌詞を示し、学生が歌いやすいよう丁寧にサポートしていた。

・エピソード番外編：クリスマス会を楽しもう

クリスマス会では、コーディネーターがお菓子を準備したほか、中国人留学生のメンター学生が中国のお菓子を、ある KUPI 学生はケーキを持ち寄り、参加者全員で分け合いながら会話を楽しんだ。最後には、O さんがカリンバ演奏を披露してくれた。指で奏でられる美しい音色に、学生とメンターは静かに耳を傾け、心地よい時間を過ごしていた。また、M さんも即興のダンスを披露し、BGM に合わせた動きが非常に自然で、場をさらに盛り上げていた。毎年必ずクリスマス行事が木曜日に行われるわけではないが、このような限られた機会の中で共有した楽しい思い出は、参加者一人ひとりの心に残り続けるものだろうと感じた。



<授業を振り返って>

実施日がクリスマス当日かつ授業後にクリスマス会を控えていたということもあり、やや浮き足だった様子の KUPI 学生が何名もいた。しかし授業が始まると、時には真剣な面持ちで歌詞を追い、時には楽しそうに歌うなど、クリスマスの雰囲気であっても KUPI 学生の学びへの意欲が減ることはなかった。授業では、事前に KUPI 学生がリクエストしたクリスマスソングが全て取り上げられたため、他の KUPI 学生があまり知らない曲であってもリクエストした本人が歌でリードしてくれる場面もあり、KUPI 学生の新たな一面を見ることができた。

オムニバス授業ではその性質上どうしても「講師が KUPI 学生に教える」という構図になりやすい。しかしながら、音楽は立場に関係なく「みんな同時に奏でることができる」という特性を持つ。2 回の授業を通じて、このことを KUPI 学生は肌で体験したのではないだろうか。

わたしのひみつ道具～自分に贈る道具～

講師：稲原 美苗 准教授

①

<概要>

全 2 回の授業のうち、前半の授業である。前半の授業では、自分の日常での困りごとや、あったらよりよく生活できる物は何か考えた。そのうえで、漫画やアニメで広く親しまれている「ドラえもん」のひみつ道具になぞらえて、「こんなひみつ道具があればいいな」という自分なりの道具を考えた。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：日常での困りごと、あればもっと便利になるものを考えよう！

日常で困っている些細なこと（ガチャガチャで欲しいものだけが当たってほしい、人とぶつかりそうになる前に相手がどちらへよけるのかわかるようになりたい）や、日常での希望（大好きなテニスをもっと上手になりたい）を各々で考えた。日常での「あったらいいな」が思い浮かびワークシートに自分の思いをすらすらと書く KUPI 学生、ドラえもんの既存のひみつ道具を思い浮かべる KUPI 学生、自分の困っていることを想像するのに苦戦している KUPI 学生など、様々であった。



・エピソード②：考えたことをみんなで円になって共有しよう！

円になり、ボールを持っている人が話をして、ボールを持っていない人は相手の話を聞いていた。困っている事が思い浮かばない KUPI 学生とは、自分の「好き」を伸ばせるようなひみつ道具を考えた。J さんが「思っていることはたくさんあるのにそれを文字に書くのが追い付かない」という日常の困りごとを話しており、KUPI 学生だけでなく講師も、メンター学生も深く共感する場面も多くあった。

・エピソード③：ひみつ道具を実際に描いてみよう！

次回、自分の考えたひみつ道具を制作するために、ひみつ道具の形や色を考えてイラストに描いた。それを元に「ひみつ道具のこの部分は段ボールを用いよう」「ここは黒色にしたいので黒野が容姿を巻き付けよう」などの話し合いを行った。

<授業を振り返って>

自分の日常を振り返ると様々な小さな悩みがあり、それを話すと「自分も困っている！」

となる KUPI 学生も多く、たくさん共感がみられた。独自の発想を持っている KUPI 学生も多く、自分の趣味や興味によって作りたいひみつ道具に個性がみられた。

②

<概要>

全 2 回の授業のうち、後半の授業である。後半の授業では、前半で考えた各々のひみつ道具を工作する回であった。そしてその後、自分の作ったひみつ道具をみんなの前で発表し、どのような道具なのかもあわせて説明した。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：ひみつ道具を製作しよう！

前半の講義の最後に、自分の秘密道具を作るにあたってどのような材料が必要か考えていた。それに沿ってコーディネーター達が準備をした材料と、その他のものを用いて工作をしていた。自分が身につけるのを想定して、そのサイズに合わせて製作する KUPI 学生、逆に作ったものをメンターにプレゼントするためにメンターの体のサイズに合わせて作った KUPI 学生と様々であった。自分の制作が終わると、他の KUPI 学生の製作の手伝いや、作業の分担をしていた。P さんが制作していた作品が上半身全体を覆う大がかりなものであったため、先に作業の終わった O さんが手伝ってくれていた。P さんのこだわりたい点は自身で担当し、ほかの作業を O さんに頼っており、上手に役割分担をしていたのが印象的であった。



・エピソード②：作ったひみつ道具を発表しあおう！

振り返りの際に、みんなで円になりそれぞれが制作したひみつ道具を見せ合い、どのようなひみつ道具なのかの説明をした。1 つのひみつ道具を集中して作る KUPI 学生もいれば、時間内にたくさん制作した KUPI 学生もいたため、すべて発表し合った。その後、そのひみつ道具に対しての質問の時間も設けた。KUPI 学生同士での質問もあり、自分の作ったものを嬉しそうに説明してくれた。K さんはメンター学生のためにひみつ道具を作ってくれており、メンター学生 2 人で実際にひみつ道具の実演も行った。

<授業を振り返って>

限られた時間内に、いかに KUPI 学生のこだわりたいところを手伝いながら完成させるかに苦戦した。それぞれのひみつ道具に強い思いがあり、思っていた色の画用紙ではない、想像していた厚みの画用紙ではないといった場面も見られた。最終的には皆が自分の作っ

たひみつ道具を嬉しそうに持っていたのが印象的で、嬉しかった。

新聞を「掘って」みよう

講師：加戸 友佳子 特任助教（摂南大学）

①新聞を「掘って」みよう

<概要>

全2回の授業のうち、1回目の授業である。1回目の授業では、新聞の歴史を講義形式で学習した。その後、講師が持ってきてくださった朝日新聞の創刊号（明治12年）や現在の新聞を読み、気づいたことや感じたことを共有した。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：新聞の歴史を知ろう！

自分たちが知っている新聞には何があるだろう、という問いかけに対し、お家の人が読んでいる新聞などを挙げていた。新聞の種類だけではなく、新聞とテレビの繋がりといった新聞についても挙げながら、新聞に対する考えや知見を深めていた。「新聞ってなんだろう？」という問いかけを受けて、改めて新聞の役割について KUPI 学生たちは考えていた。新聞のようなものは紀元前からあったといったことを KUPI 学生たちは知り、新聞の歴史に思いを馳せていた。



・エピソード②：昔の新聞を見てみよう！

スライドに表示された江戸時代のかわら版を見て、KUPI 学生たちは「絵が多い」「知っている地名がある」と発言していた。先生は、かわら版は何か事件があると版面が掘られて印刷されたこと、絵があるため文字が読めない人も分かるということ述べていた。現代の印刷術との違いや新聞の歴史を KUPI 学生たちは学んだ。

KUPI 学生たちはその後、1人1枚配布された明治12年に発行された朝日新聞の創刊号を見て、今の漢字との違いに驚きつつも、自分たちが知っている地名や広告が載っていることを見つけていた。

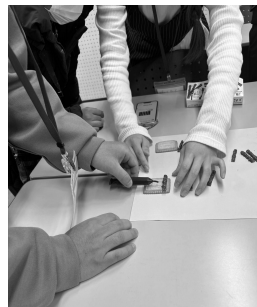
・エピソード③：今と昔の新聞を見比べてみよう！

朝日新聞の創刊号と現在の新聞を KUPI 学生たちは見比べた。興味を持って1人で様々なページを見ている KUPI 学生もいれば、積極的に話をしながら新聞を見ている KUPI 学生もいた。昔の新聞と今の新聞を比較し、それらの共通点も見出していた。現在の新聞と

して、一般的な新聞だけではなく、スポーツ新聞や英字新聞も KUPI 学生たちは見ていた。自分が見た新聞にはどんな記事が載っているのかや、普段の生活の中で、新聞を読む以外にどのように活用しているのかについてそれぞれの意見を出していた。KUPI 学生たちは新聞に興味を持ち、新聞を見ることを楽しんでいた。

・エピソード番外編：お菓子の家を作ろう！

休み時間に講師が持ってきてくださったお菓子の家を作るキットを用いて、KUPI 学生たちはお菓子の家を作った。家の中身、外壁とドア、屋根と分担して最後に全てのパーツを組み合わせた。チョコペンがすぐに固まってしまうといった困難にも直面したが、なんとか溶かしたりチョコを押し出したりと工夫を重ね、なんとかお菓子の家づくりを進めることができた。お菓子の家が完成すると KUPI 学生たちは喜びの声をあげ、笑顔でお菓子を食べた。



<授業を振り返って>

一部の人の生活にとっては身近な新聞について知ったり改めて考えたりする機会になり、KUPI 学生たちは新聞という身近なものの面白さを感じ取れたのではないかと考える。昔の新聞を見ることは特に KUPI 学生たちにとっては新鮮な体験となったのではないかと考えられる。物には歴史があるということや、新聞や情報の意義について考えるきっかけになったのではないかと思う。

②図書館探検！古い新聞を見つけよう

<概要>

全 2 回の授業のうちの後半の授業である。今回は社会科学系図書館のグループ学習室でまずは神戸大学の社会科学系図書館の概要を学んだ。そして、社会科学系図書館の書庫に入り、書庫の棚を動かして、目的の新聞記事の縮刷版を探して見つけ出した。縮刷版がまとまった本をグループ学習室に持っていき、昔の新聞記事を読んだ。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：社会科学系図書館って？

初めに今日の授業会場である社会科学系図書館について講師から紹介があった。142 万冊もの本が所蔵されていることを知り、KUPI 学生たちは「すご！」と驚きの声をあげていた。その後、社会科学系図書館の 2 階にある大壁画『青春』を見て KUPI 学生たちは写真を撮ったり、大閲覧室に入ったりして、社会科学系図書館の美しさを感じていた。

・エピソード②：目的の新聞記事の縮刷版を見つけ出そう！

いよいよ社会科学系図書館の書庫に入り、新聞の縮刷版がある場所に向かった。縮刷版のある場所に着き、KUPI 学生たちは書庫のレバーをまわして本棚を動かし、自分が探そうと決めていた新聞を新聞名と発行年を参考に探していた。KUPI 学生たちは自分の誕生日の記事や家族の誕生日の記事など、それぞれの意図を持って新聞を探していた。K くんは英字新聞に興味を持っていたため、K くんはコーディネーターとともに英字新聞を探していた。KUPI 学生たちは縮刷版をその場で開いて自分の興味ある記事や写真を見つけたり、縮刷版だけではなくその付近にある別の本にも興味を示したりしていた。



・エピソード③：昔の新聞記事を見てみよう！

書庫で探した縮刷版をグループ学習室に持っていき、じっくり記事を見ていた。人や車に興味を持ってスマホで写真を撮っていたり、今もある製品の広告を見て今と何が同じで何が違うかといったことに着目していたり、自分の家族が興味を持っている物を見ていたり、自分なりの意図や思いを持って新聞記事を読んでいた。それぞれの興味が如実に反映され、興味を深める時間となっていた。

<授業を振り返って>

社会科学系図書館の書庫に入ってたくさんの本を目にしたり、レバーを動かして本棚を動かしたりしたことは、KUPI 学生たちにとっては非常に貴重な経験になったのではないかと考えられる。また、縮刷版を見るという経験をすることが初めての学生も多かったのではないかと思うとともに、縮刷版を見て自分の知識や考えと結び付けたり比較したりする経験になったと感じている。今回の授業は新聞の面白さや図書館のすごさを実感できる活動になったと思う。

視覚を使わずに立体作品を鑑賞しパステルで感じたことをあらわそう

講師：勅使河原 君江 准教授

<概要>

KUPI 学生たちはいくつかのグループに分かれ、アイマスクを着用して、1 人ずつ立体作品を触ったり立体作品のにおいを嗅いだりしながら鑑賞を進めた。メンターや作品を鑑賞していない KUPI 学生が作品を鑑賞している KUPI 学生に質問を投げかけ、対話的に鑑賞を深めた。鑑賞中に質問に応じる形で述べた感じたこと、考えたことは全てメンターがポストイットに記載した。立体作品の鑑賞が終わると、KUPI 学生たちはアイマスクを外

し、感じたこと、考えたことが書かれているポストイットを分類した。その後、パステルを使って作品から感じたことを表現し、完成作品をお互い見せ合った。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：視覚を使わずに美術作品を鑑賞してみよう！

今回の授業はまず 3 グループに分かれ、視覚を使わずに立体作品を鑑賞した。メンターや鑑賞していない KUPI 学生が、鑑賞をしている KUPI 学生に「どんな触り心地？」「なんて言ってそう？」「例えるなら何？」といった質問をし、対話的に鑑賞をした。勅使河原先生が作品の向きを変えると「触り心地が変わった！」と J さんが述べていたことが印象的だった。体調等の関係であまり興味が持ちにくかった KUPI 学生には、無理をしないよう見守りをした。鑑賞後は感じたことが書いてあるポストイットを、「触り心地」「例えるなら」といったふうに模造紙の上で分類した。

・エピソード② パステルを使って感じたことを表現してみよう！

KUPI 学生たちはパステルを用いて視覚を使わない対話型美術鑑賞で感じたことを表現した。その際にはそれぞれの KUPI 学生の工夫や個性が見られた。例えば、J さんはパステルを削って粉状にして柔らかい色味で絵を描いたり、パステルを削って粉状にして着色する際に紙の上に物を置くことで、その物が置かれた部分は色がつかないようにしたりしていた。また、O さんはパステルを触りたくないため、ティッシュを巻いたパステルで描いていた。絵を描いた後は題名を自ら考えていた。N さんは題名をひらがなで表記するのか否かといった部分にもこだわりを見せ、KUPI 学生それぞれが自身の考えや感じ方を大切にしていることが感じられた。



・エピソード③ みんなの作品を見てみよう！

KUPI 学生全員が絵を仕上げた後、全員で輪になってお互いの作品の紹介をした。同じ作品を触っていても、例えば動物だと思ったという点では共通していたが、想起する動物や思い出が異なっており、違う絵になっていたことを KUPI 学生たちは感じ取っていたことと思う。また、テーマに関係なくてもその子らしさを表現してくれたり、立体作品から感じ取ったことを様々な角度から絵にしてくれたりしていた。N さんが 3 年前に同じ作品を触っていたのにかなり異なる絵を描いており、KUPI 学生たちは驚きの声をあげていた。

<授業を振り返って>

視覚を使わない対話型美術鑑賞は特に今年 KUPI に入学した学生にとっては斬新な体験

だったのではないかと思う。同じような体験をしているはずなのに感じ方が人それぞれであること、人それぞれであるその違いが面白いということを感じたのではないかと考えている。また、同じ人でも感じたことを表現する際には全然違う表現になるということも、**KUPI** 学生は実感しただろうし、それに魅力を感じただろうと思う。感じ方の多様さ、自己の多様さの奥深さを少しでも感じ取ってもらえたのではないかと考える。

人はなぜ書くのか

講師：川地亜弥子 教授

<概要>

全 2 回の授業である。各授業とも、自分のことや興味について、最近の思い出、**KUPI** の思い出などのお題が提示された。**KUPI** 学生はそれぞれ好きなお題を選んで作文を書き、その後グループに分かれて書いた作文を発表し合った。また、書くことやそれを人に話すことはなぜ楽しいのかについても考えた。

①

<授業の様子>

▶**KUPI** 学生の様子

・エピソード①：「生活つづり方」ってなに？

授業の冒頭では、講師の研究分野である「生活つづり方（ライフ・ライティング）」についての説明を受けた。その中で「生活つづり方」は、作文だけでなく曲や絵もかいたこと、またその長さやスタイルがいかにか自由であるかの話も聞いた。毎年開講されている人気授業のため、再受講生は昨年学んだことを思い出しながら、1 年目の受講生は興味津々な様子で、投影資料を見つめていた。

・エピソード②：作文を書こう！

題名、名前、本文を書く用の枠だけが用意されたシンプルな紙に、20 分ほど時間を使って自分のことについて書いた。縦書きか横書きかは、各 **KUPI** 学生に委ねられた。K さんは英語で書き、M さんは字だけではなく絵も用いて表現していた。J さんは時間内に 3 枚も書いていた。他にも早く書き終わった **KUPI** 学生は川地先生から紙をもらい、複数の話題について作文していた。最後に、用紙内にある正方形の枠内に「皆の前で発表してもいいよ」という人は丸をつけた。皆の前でぜひ読みたいと言う **KUPI** 学生は丸の数を増やし、特に P さんは五重丸をつけていた。



・エピソード③：作文を読み合おう！聞き合おう！

グループを3つに分け、それぞれで「皆の前で読んでも良い」と丸をつけた作文のみをみんなの前で順番に読み合った。その後、その作文の内容について質問を投げかけたり、感想を伝え合ったりした。

Lくんは自分の好きな自販機について書いており、その中でのおすすめについて質問されて嬉しそうに答えていた。また、この日は海外から見学の方が来られていたため、英語が得意なLくんやKくんは英語を交えて発表をしていた。



・エピソード④：書くこと、それを話すことはなぜ楽しいの？

今回の発表の機会を経て、話すことや作文をすることが楽しいと答えた KUPI 学生が多かった。その中で、「自分の好きなことをみんなに伝えられるから」「書くことで自分の好きなことをもう一度思い出せたり、思い出を振り返ることができるから」といった意見が出た。

<授業を振り返って>

どの KUPI 学生も、作文の時間は黙って黙々とかいていた姿が印象的だった。また、皆んなの前で発表していた時は質問も活発に飛び交っていた。私自身の発表にも、質問をしてくれて大変嬉しかった。普段何気なく行っている「かく」と言う動作の自由さや楽しさを感じられたのではないかと思う。

②

<概要>

川地先生の全2回の授業の後半である。後半の授業では、主に KUPI での思い出についての作文をかいた。その後前回と同じように3つにグループを分けて、互いの作文を読み合った。

<授業の様子>

▶KUPI 学生の様子

・エピソード①：KUPI の思い出を書こう！

この日は KUPI 月曜プログラムの最終日だったため、「KUPI の思い出」が作文のお題として提示された。前回と同様に、30分ほどの時間を用いて作文を書いた。今回もみんなが集中して作文に取り組んでいた。Mさんは、最初から最後まで鉛筆を握った手を止めることなく、一生懸命書き続けていた。

・エピソード②：かいた作文を発表しよう！



3つのグループに分かれて、それぞれの作文を読み合い、感想や質問を伝えた。Pさんは家族のことについて書いていた。自分がいかに家族が大好きで、愛されているのかがすごく伝わる作文であった。また、作文を話すPさんの表情やトーンからもそれがひしひしと伝わった。

Jさんはどの講義も楽しく、たくさんのことを専門的に学べて良かったと嬉しそうに話してくれた。さらに作文は3枚にも渡る超大作であ

った。Oさんは自身の仕事についての作文を書いていて、さらには好きなこと、家へ帰ってから行くことも書いていた。

この日も KUPI 学生たちは他の人が読んでもいい作文に丸をつけたのだが、三重丸以上をつけた KUPI 学生が多かった。

<授業を振り返って>

KUPIの思い出について書いた KUPI 学生は「楽しかった」という趣旨の内容が多く、大変嬉しかった。個別でMさんの書いた作品の話をしている際も、「KUPIが楽しかった」とにこにこした表情で言われ、不意に泣きそうにもなった。書くことで、書いた本人も、それを読んだり聞いたりする他の人もこんなにも楽しいのだと、再認識できたのではないだろうか。

KUPI 学生の作文

以下に、「KUPIの思い出」というテーマで KUPI 学生が書いた作文を掲載する。

作文用紙は、KUPI 学生向けに独自に作成した様式を使用した。授業では作文を書いた後に読み合う時間が設定されていたことから、自身の作文について KUPI 学生が「みんなの前で読んでもいい」と思った場合は一重丸、「どうしてもみんなの前で読みたい」と思った場合は二重丸を記入する枠を設けた。

なお、個人情報保護の観点から一部にボカシを入れている。

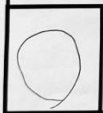
The image shows a student's handwritten essay on a form. The form has a title box at the top containing the text 'KUPIの思い出'. Below the title is a smaller, empty rectangular box. The main body of the form is a large rectangle containing the student's text. In the bottom right corner of this large rectangle is a small square box containing a circle. The text is written in Japanese and describes memories from KUPI, mentioning teachers and activities.

KUPIの思い出

KUPIは、月曜日(は)、
いろんな先生が
授業してくれます。
作文を書いたり、音楽をしたり
しました。
火曜日は、津田先生が
授業してくれます。
木曜日は、皆でしたいことを
決めて 公園に行ったり、
食堂に行ったりしました。
KUPIの思い出が
たくさん出来て
とても良かったです。

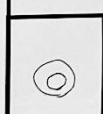
神戸大学のみなさん

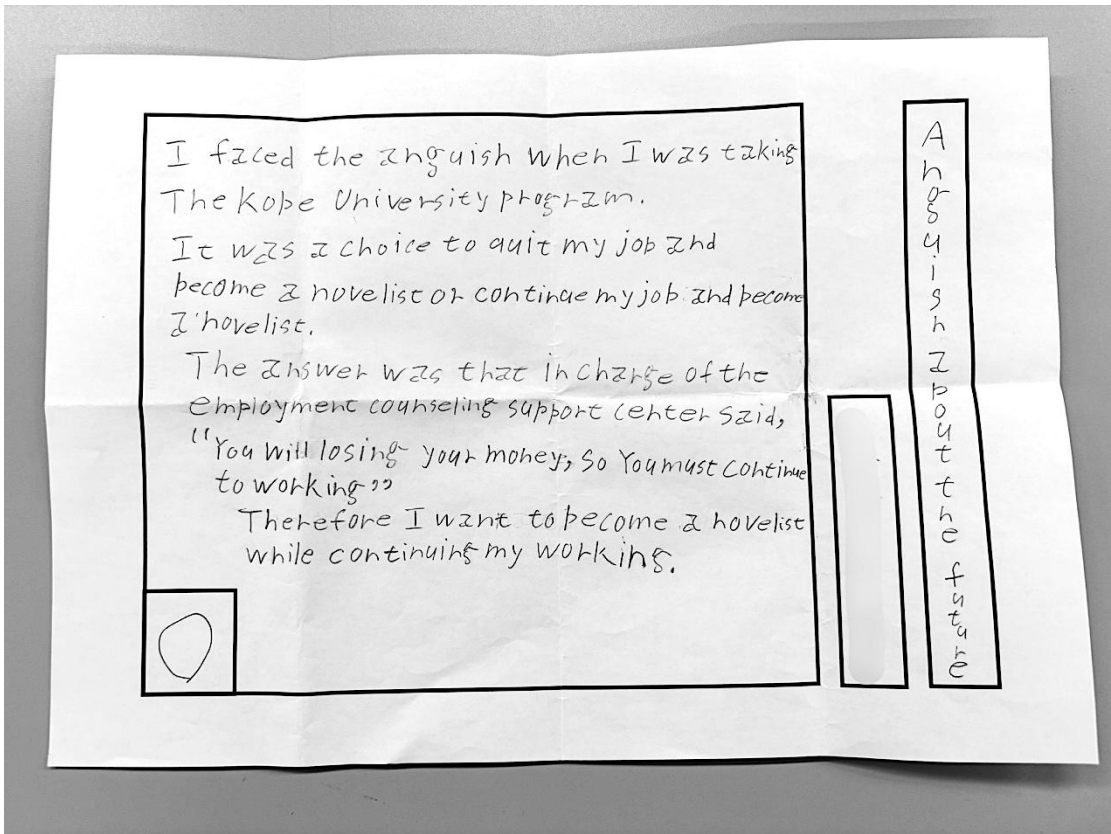
この神戸大学には、全部で4つのキャンパスがあり、どのキャンパスもとても素敵です。私が昨年初めて神大を訪れた時、私はその広さにおどろきました。北にも南にも広いキャンパスだったので、因心わす遊子になりそうでした。



私の仕事

・私の仕事
働いて一ヶ月ほど経過しています。みなは仲間をみておもしろいことになっています。
・私助かなことは遊び
16:00 - 18:30にバイトパートもしています。コーヒータイムで飲みながらゲームをしています。
私の家はです。
キャラクターに絵を描くことが大好きで、こが着たように絵を描くことが仕事しています。
18:30 - 19:00にテレビで見えています。ようこそ我が家へことです。いろいろ見えています。
ばんごうも食べるのが楽しくてなります。





I faced the anguish when I was taking
The Kobe University program.

It was a choice to quit my job and
become a novelist or continue my job and become
a novelist.

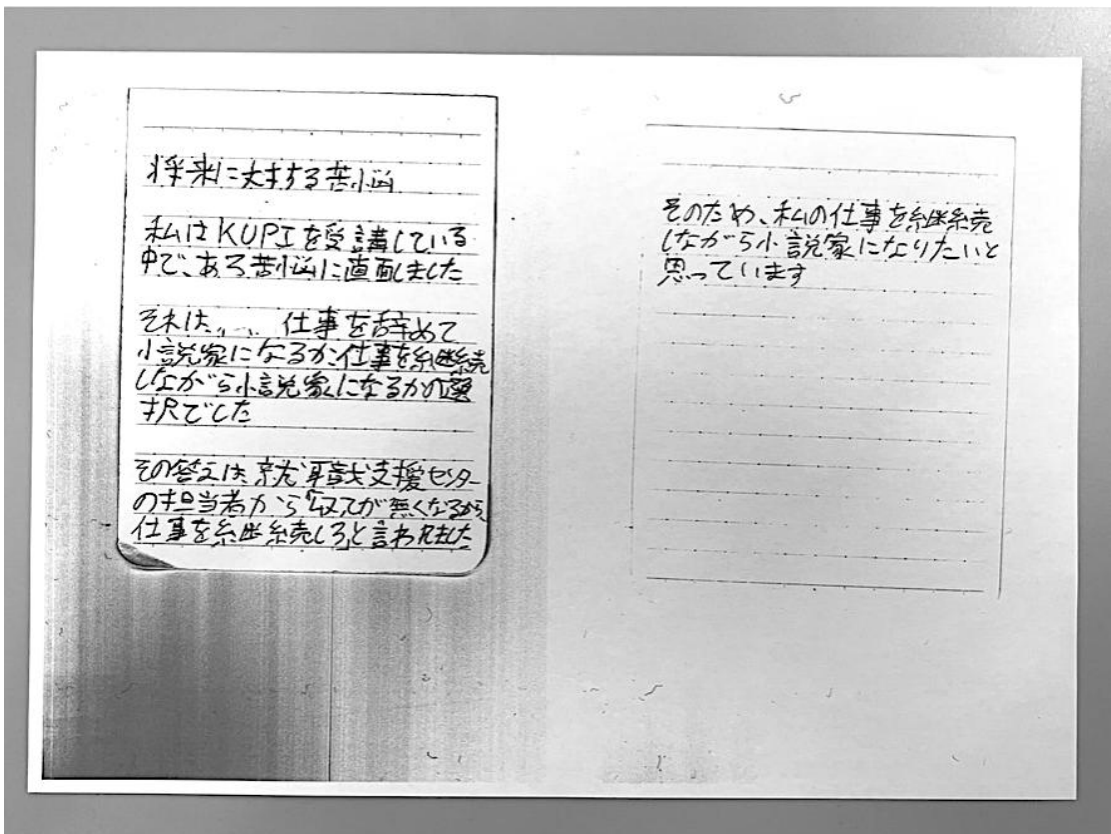
The answer was that in charge of the
employment counseling support center said,

"You will lose your money, so you must continue
to working"

Therefore I want to become a novelist
while continuing my working.

Anguish Report the future

(日本語訳)



将来=大抵苦小説

私はKUPIを受講している
中である苦小説に直面した

それは、...仕事を辞めて
小説家になるか仕事を継続
しながら小説家になるかの選
択だった

その答えは京大早稲田支援セン
ターの担当者から返事が無くなる
仕事を継続せよと言われた

そのため、私の仕事を継続
しながら小説家になりたいと
思っています

さびしいけれど、またらいねんみんたよと
あうのをたのしみにまっていたりと
おもしろいっも、ありがとう



2) 「障害共生教育論」

【概要】

火曜日プログラム「障害共生教育論」は、神戸大学国際人間科学部の授業「社会教育課題研究（障害共生教育論）」として実施している。この授業は、発達コミュニティ学科の専門科目であるとともに、社会教育主事の資格に関連する科目である。また、他の曜日のプログラムとは異なり、KUPI 学生と一般学生が共に学びあうことを追求する授業である。今年度のテーマは「共生とは何か？」であった。

○授業全体のスケジュール

日 程	授業内容
10月7日	ガイダンス
10月14日	アイスブレイク
10月21日～10月28日	グループワーク「共生できていない私たち」
11月4日	「共生できていない私たち」発表会
11月11日～11月18日	写真撮影ワークショップ（特別講師：元 KUPI 学生 I さん）
11月25日～1月27日	「共生」をテーマにした写真絵本づくり 写真絵本の構想を練る→写真を撮影する→撮影した写真を構成して言葉を添える
2月3日	最終発表会

○火曜プログラムの基本的な一日の流れ

- ～16:50 ヒューマンコミュニティ創成センターでの交流・夕食など
- 17:00～17:10 大学教員による導入
- 17:10～18:20 各グループでの活動（KUPI 学生・一般学生・メンター学生）
- 18:20～18:30 全体の諸連絡
(一般学生の参加はここまで)
- 18:30～18:45 休憩、一般学生の困り事相談会
- 18:45～19:40 授業のふりかえり（KUPI 学生・メンター学生）
- 19:40～20:00 ふりかえりシートの記入、解散
- 20:00～21:00 メンター学生とコーディネーター、大学教員のふりかえり

○それぞれの授業の内容と全体の様子

第1回：ガイダンス（10/7）

大学教員より、授業の説明があった。この授業での学びを「共に生きるための学び」として実現するために、①協力しながら学ぶこと、②それぞれの個性が輝く活動に取り組むこと、③大学だからこそ取り組めるテーマを掲げること、という 3 つの大切なことが示さ

れた。

大学教員による説明の後、これから共に学びあう仲間のことを知るために3つのグループに分かれて自己紹介を行った。一人一枚ずつ白い紙に名前や好きなものを描き、グループで輪になって紹介し合った。出来上がった自己紹介シートは、イラストがたくさん盛り込まれたものもあれば文章がびっしり書かれているものもあり、内容を読む前からそれぞれの個性が伝わってくるようなものとなっていた。



授業が始まる前は KUPI 学生と一般学生の間での交流はなく、教室はしんと静まり返っていた。しかし、いざ自己紹介が始まると、皆が相手のことを知りたい！という前のめりな姿勢でお互いの紹介に耳を傾けており、発表者が話し終わると、一般学生を中心に気になったことを深掘りする時間が生まれた。気づけば、教室全体が、話し声が飛び交う、和気あいあいとした雰囲気に包まれていった。

自己紹介が終わると、大学教員から次回の授業ではアイスブレイクとして「謎解き」づくりに取り組むことが発表された。内容は、3つのグループに分かれ、それぞれのグループで学内のどこかにお菓子を隠し、隠し場所に辿り着くための謎解きを考えようというものであった。そして、KUPI 学生、一般学生、メンター学生が均等に分かれたグループが作られた後、残りの時間を使ってさっそくお菓子の隠し場所を探す活動を行った。KUPI 学生はもちろん、一般学生も隠し場所を探すという視点で学内を散策した経験はなかったため、各々新しい気づきがあったのではないだろうか。あっという間に時間は過ぎ、お菓子の隠し場所の検討がついたところで、授業は終了となった。

この日の振り返りでは、「不安だったけれど、ちゃんと伝わった。」「仲良くなれた。」といったポジティブな意見が飛び交った。また、KUPI 学生たちから「そもそもガイダンスって何?」「アイスブレイクって何?」という質問があったことが印象的だった。

第2回：アイスブレイク (10/14)

前回の授業に引き続いて、アイスブレイクとして謎を解いてお菓子を見つけ出す活動を行った。授業の前半では、それぞれのグループでお菓子を隠す場所を決定し、そこにたどり着くための謎解きを考えた。お互いにアイデアを出し合う中で、自然と活発な対話が生まれていた。

その後、授業の後半では、他のグループが隠したお菓子を見つけるべく、実際に謎を解いていっ



た。各グループが用意した謎はどれも短時間で考えたとは思えないほどレベルが高く、少し苦戦するグループもあったが、それだけに謎が解けたときの達成感は大きく、お菓子を発見すると、グループみんな喜びを分かち合った。お菓子を獲得した後は、みんなでお菓子を囲んで時間いっぱい談笑した。

第3～5回：「共生できていない私たち」(10/21～11/4)

アイスブレイクで仲を深めたあと、今年度のゴールである「共生」をテーマにした写真絵本づくりに向けて、まずは「共生」という概念についての理解を深めるために、私たちの身の回りにある「共生できていないこと」を探し、そこで気になったことや見つけたことについて発表する活動に取り組んだ。

まずは、「共生」という言葉のイメージを掴むために、大学教員がスライドで説明を行った。ここでは、「人と自然」「日本人と外国人」「いじめ」「虐待」「差別」「不平等」といった、共生について考える上でヒントとなる具体的なキーワードが示された。加えて、私たちの社会で「共生」が重要なテーマだと考えられているということは、裏を返せば、今の社会に「共生できていないこと」が存在していることを意味しているのだという説明もなされた。

こうした説明を踏まえ、実際の活動では KUPI 学生 1 名と一般学生とメンター学生 2～3 名が 1 グループとなり、身の回りにある「共生できていないこと」について話し合った。話し合いは、大学教員が提示したキーワードに加え、KUPI 学生や一般学生のそれぞれの経験や、昨年度までの KUPI で学んだことなどをもとに進められていった。気になることが徐々に明確になってくると、話し合いに加え、インターネットや図書館も利用しながらさらに理解を深めていった。

2 週にわたる準備を経て、11 月 4 日の授業で発表会が行われた。準備期間が短く、クオリティよりも発表に至るまでの過程を重視した取り組みであったが、実際に発表されたものは予想外にクオリティの高いものであった。発表形態はパワーポイントを使ったプレゼンテーションをはじめ、紙芝居、寸劇と様々であった。また、取り上げられた内容もさまざま、「人とクマ」「幸せと共生」「日本人と外国人の共生」などがテーマになっていた。



第6～7回：写真撮影ワークショップ（特別講師：元 KUPI 学生 I さん）(11/11～11/18)

後半から取り組む「写真絵本づくり」の事前準備として、写真の撮り方を 2 回にわたって学んだ。ワークショップの初回では、昨年まで 3 年間 KUPI を受講し今年度はお休み中の I さんをゲストに迎えて、写真のことを学んだ。はじめに、I さんの撮影した写真をみん

なで鑑賞した。みんな真剣な目でスライドに映る I さんの写真を見ていた。その後、KUPI 学生一人ずつカメラが配られ、一般学生やメンター学生と共に教室内で写真を撮った。人物を撮る、教室の風景や細かいところに注目して撮る、エフェクトなどの機能を駆使して撮るなど、各々試行錯誤をしながら写真を撮っていた。I さんにアドバイスをもらう様子も見られた。



2 回目の授業では、「ジオラマ写真」の撮影に挑戦した。ここで言う「ジオラマ写真」とは、人形やぬいぐるみと共に、それらのスケールに合わせた小道具や背景となる写真を配置することで、人形やぬいぐるみとそれらを取り囲む環境を立体的に表現する方法のことを指す。実際の活動では、持参したお気に入りのぬいぐるみを被写体にして写真を撮る人や、折り紙で被写体を作ってみる人、中には図書館に理想の背景が描かれたイラスト集を探しに行く人までおり、それぞれが思い思いのジオラマ写真を撮影した。

現代では高性能なカメラが搭載されたスマートフォンが普及しているため、デジタルカメラに触り慣れていない人が大半であったが、みんなすぐに使い方をマスターし、夢中でシャッターを切っていた。

第 8～16 回：「共生」をテーマにした写真絵本づくり(11月 25 日～2月 3 日)

後半からは、この授業の集大成である「写真絵本」の制作に取り組んだ。大まかな活動の流れとして、まずはこれまでの活動を振り返りながら写真絵本の構想を練った後、プロットや絵コンテを作成してイメージを固めた。具体的なイメージが出来上がると、実際に写真を撮影する活動に移った。そして、撮影した写真に文字を入れたり、足りなかった分の写真を追加で撮影したりして、写真絵本を完成させた。実際の活動では、グループごとに取り組みやすい順番やペースで活動を進めたほか、出来上がった写真絵本を発表する方法もグループによって様々であった。それぞれのグループの活動や出来上がった絵本の内容については、後述のエピソードを読んで楽しんで頂きたい。

最終日に行われた最終発表会には、KUPI 学生の保護者の方をはじめ、他の曜日のメンター学生や KUPI の卒業生など、多くの方が駆けつけてくれた。それぞれの発表が終わった後には、観客からたくさんの感想や質問が飛び交い、発表者は自信に満ち溢れた表情をしていた。会が終わると、KUPI 学生のところに一般学生や観覧に来ていた人が感想を伝えに来ており、気がつくともちらこちらで KUPI 学生を中心とした会話の輪が出来上がっていた。それぞれのグループが頭を悩ませ



て考えた「共生」は、きっと観ていた人の心を動かしたのだろう。そして、火曜プログラム最後の授業の終わりが告げられると、一般学生は、KUPI 学生に感謝の言葉を伝え、お互いをたたえ合い、名残惜しそうに教室を後にした。

【7つのエピソード】

■4年間のすべてが繋がって描いた「共生」

過去3年にわたり、数々の名作を生み出してきたNさん。今年度でKUPIを卒業することになる彼女からは、例年以上に授業への熱意があふれていた。元々、授業で取り組んだ内容などをメモするためにノートを持参していた彼女だったが、今年度は授業で話された内容や他の人の発表内容などを逐一ノートに書き取っていた。大学生として過ごす最後の4ヶ月半に向けて気合は十分、といった雰囲気であった。

そんなNさんは、前半の「共生できていない私たち」について考えるグループワークに取り組む上で、2023年度の火曜日プログラムで考えたSDGsのテーマ「住み続けられるまちづくりを」についての内容を思い出していた。農村部と都心部の間で人口格差が広がっていること、2050年にはその格差がもっと広がっているであろうこと...ただそれらは、一見すると「共生」とは離れたところにあるものであり、はじめてNさんからその話を聞いた一般学生の二人は困惑した表情を浮かべていた。それでも、Nさんと一般学生の二人は話し合いを重ね、「共生できていないまち」とは「違いがあることで争いが起こる町」であるという出発点を見つけた。そこから、共生できていないことへのイメージを膨らませ、「違いが認められないこと」「『こうすべき』と決めつける・押し付けられること」などが例として上がった。そして、そうした共生できていない状況があるときに私たちはどうすれば良いのかについて考え、「違いがあってもいい！！みんなと一緒になくてもいい！！」という結論に辿り着いた。

「共生できていない私たち」の発表会では、前半の活動で話し合った内容を寸劇にして発表した。Nさんのグループは最初に発表することになったが、共生できていないという抽象的な状態を、みんなと同じメロンパンを買うか、自分だけ焼きそばパンを買うかという具体的な状況に落とし込んだ見ごたえのある寸劇が披露され、トップバッターを務めるにふさわしい内容であった。

発表会の翌週からの授業で取り組んだ写真撮影ワークショップでは、神戸大学にあるNさんが働いているカフェから撮影された六甲山の写真を背景に、山の動物たちがカフェの飲み物や食事を楽しんでいる様子を描いたジオラマ写真を撮影した。ゲスト講師のアドバイスのもと、背景の写真の上に折り紙で作った動物などを乗せて撮影することに挑戦したのだが、ここで作った動物たちは、後半の活動でも大活躍することになる。

後半の「写真絵本づくり」がはじまると、まずは「何と何の共生」をテーマにするのか

について、一般学生やメンター学生たちと一緒に話し合った。すると、Nさんはこれまでのみんなの発表やニュースを見聞きする中で「人とクマの共生」について興味を持ったことを話してくれた。また、なぜ多くのクマが人里に降りてきているのかについて調べたこともあったようで、その原因が森に食べ物がなくなっているからだということを知ってくれた。



そのような「人とクマの共生」をいかに絵本で表現するかを考える中で生まれたのが、「もしNさんの職場のカフェにクマがやって来たら」というアイデアだった。この案は、人里に降りてきたツキノワグマが大学構内に侵入して来た場合について考える...のではなく、絵本に登場するキャラクターのようなクマがお腹を空かせてやってくることから「共生」について考えることを目指した案だった。Nさんもこのアイデアが気に入ったようで、さっそくプロット作りに取り組むこととなった。



ある夜のこと。

おなかを空かせた1匹のクマが、わたしの働いている「アゴラ」にやってきました。

Nさんの絵本づくりには主に二人の一般学生が関わってくれた。プロット作りから小道具の作成、そして写真撮影までを共に行った一般学生は、Nさんの言葉を丁寧に聞き出しながら物語のたたき台を作ってくれた。また、Nさん自身を写真絵本の中に登場させることも提案してくれた。もう一人の一般学生とは、

撮影した写真をもとに実際に絵本を作る作業を共に進めた。はじめはNさんの意見を丁寧に聞き出そうとしてくれ、途中からは一般学生自身の意見も積極的に出してくれた。

言うまでもなく、共同制作の中心はNさんであった。文章作りから絵コンテの作成、写真の構図に至るまで、自分のこだわりたい部分についてたくさん意見を出した。特に、絵本に差し込む文章については、内容はもちろんのこと、文字の大きさや太さ、どこを平仮名にしてどこを漢字にするかについてなど、納得がいくまでとことん突き詰めた。そして、Nさんと一般学生の力が合わさり、卒業年度の作品としてふさわしい素敵な絵本が出来上がった。皆で案を出し合った結果、タイトルは『クマとわたし』に決まった。

完成した物語は、森に食べ物がなくてお腹を空かせたクマが、Nさんの職場を訪れることから始まる。Nさんがクマに食べたいものを聞いてみると、クマはきのみが食べたいという。それから二人はきのみを探しに森に出るのだが、きのみはなかなか見つからない。怒ったクマは「人が食べ物を取ってるからだ!」「ソーラーパネルをたくさん置いてすみかを奪ったじゃないか!」と人間への怒りをぶつけるが、Nさんは「人もクマも食べ物があればいいんだけどなあ」「ソーラーパネルは環境に優しいと思ったんだ」と正直な言葉

で返す。二人は仲直りして、Nさんの職場のカフェで一緒にご飯を食べることにした。カフェには二人が一緒に食べられるメニューは無かったが、クマの提案でシャケを使った新メニューを考えることになった。そのままのシャケを丸かじりしたいクマと、シャケは焼いて食べたいというNさん。二人は、食べ方は違っても同じシャケを食べられることに気づき、それぞれが食べられるメニューを考えた。そして二人は、一緒に仲良くシャケを食べたのであった。

絵本の内容は、2022年度の「曲づくり」の活動で取り組んだ時と同じ「私の職場」を舞台に、誰もが住みやすい森について考えさせられる「人とクマの共生」の要素に加え、食べるものや食べ方に違いがあっても一緒にご飯を食べられるという「人と人の共生」についてのメッセージも込められたものとなった。こんなにも豊かな内容の絵本を作り上げることができたのは、Nさんが4年間KUPIに参加し、「共生」のような難しいテーマについてみんなで考え、たくさんの人と共に作品を作ることに取り組み続けてきたからこそだと考えられる。『クマとわたし』は「共生」をテーマにした絵本であると同時に、Nさんの4年間の活動のエッセンスがふんだんに詰め込まれた絵本でもあるのだ。

実際の発表会では、Nさんが本人の役、一般学生がクマ役、メンター学生がナレーション役で音読して発表した。前半の発表会に続き、今回もトップバッターを務めることになったのだが、それは、4年間の活動を通じて形成された、Nさんなら安心してトップバッターを任せられるという共通認識が大学教員やコーディネーターらの中にあつたことだった。NさんがKUPIで過ごした4年間の集大成としてふさわしい、立派な作品・発表になったのではないだろうか。

■「共生」——たくさんの人や物が絡み合う世界の中で

前半の活動でペアになってすぐ、Mさんは豊かな感情が声色や表情に表れる人であると思った。素の感情を引き出せたら良いなという思いで授業に臨んだ。

Mさんは「共生できていないもの」は何かと問われてもピンと来ていなかった様子であったため、大学教員が具体例を紹介してくれたスライドを再度見ていった。見終わってから感想を聞いてみると、「日本人と外国人」というテーマが一番印象に残ったと教えてくれた。外国に興味があるのか尋ねると、テレビでしか観たことはないと言った。Mさんがどうしてこのテーマに興味をもったのか知りたいと思い、様々な質問をしていると、外国の人に会って話してみたいという気持ちが見えてきた。

そして、共生の話題に寄せていくと、具体的な事例を知っているわけではないようだったが、日本人と外国人は仲良くないイメージをもっていると教えてくれた。大きなテーマが決まったため、人種の問題でパッと思いつく白人黒人の差別についてイラストを用いて紹介したが、強い関心はない様子だった。誘導のようになってしまったため、一度雑談の

つもりで外国の食事の話題をすると、楽しそうに話を聞いてくれていた。そこに一般学生が注目し、飲食店に関する事例（外国人の入店拒否）というテーマを提案してくれた。一般学生が「自分がこのような対応をされたらどう思う？」と問いかけると、Mさんは「いや！おかしい。」とその日の授業中で一番力のこもった口調で言った。感情の動きが一番大きかったように思えたため、このテーマで進めることにした。店に入っ



て断られるというシチュエーションを一般学生とメンター学生とで演じて見せ、「私は悲しい気持ちになるな。Mさんはどう思う？」と聞いてみた。すると、Mさんは「悲しいな...」と暗めの口調で言った。誘導気味だったのではないかと思ったが、Mさんの言葉には気持ちがきちんとのっていたように見え、本心だと感じた。その後も、Mさんの感情の動きを意識しながら発表準備を進めていった。発表会当日も、ただスライドを読むだけでなく、気持ちがこもった口調と表情で発表していたのが印象的だった。

前半の活動を通して、Mさんの授業を通した感情の変化を見ていると、心から学びを楽しんでいる様子を感じられた。気持ちが乗ると、次第に言葉数が多くなったり、振り返りシートの文字量も増えたりと良い変化があった。また、毎日当たり前のように授業を受けている筆者にとって、学ぶことは楽しい、という大切なことに気づかせてくれた。

後半の活動でMさんは、「共生」を軸に、Mさんが住んでいる兵庫県〇〇町、そして神戸大学に通学するときに乗車する JR 加古川線の過疎化という二つの要素を重ね合わせた作品を制作した。今回の作品は、人と人、人と地域、そして地域と公共交通という複数の関係が交差する中で、どのように共に生きることができるのかを問い直す試みであった。

Mさんが舞台とした兵庫県〇〇町は、豊かな自然に囲まれ穏やかな時間が流れる一方で、少子高齢化と人口減少が進み、地域の持続可能性が問われている。その象徴として描いたのが、地域の足である JR 加古川線であった。利用者の減少、列車本数の縮小、将来的な存続への不安。その衰退は、Mさんが大好きなお祭りや電車がなくなるかもしれないという不安を感じているようにも見えた。今回の制作で主人公として設定したのは、〇〇町のゆるキャラと一緒に〇〇町や JR 加古川線の魅力を案内する本人が扮するキャラクター「Z」だった。誰に対しても分け隔てなく笑顔を向ける Mさんのイメージをもとに、一般学生やメンター学生と協力しながらモールや紙粘土で作成した。「Z」が駅に向かい、列車に乗車して、車窓から手を振る。その姿は地域の風景の一部であり、駅を利用する人々にとって小さな安心感を与えたいのだと思わせた。Mさんは地域の中で存在し、日常を重ねている一人の生活者である。制作を進める中で強く感じたのは、「共生」とは、日常の積み重ねであるということであった。KUPIに来ると Mさんと挨拶をし、笑顔を向ける。その何気ない行為の中にも、温かな循環を生み出している。共生とは、互いを「支える／支えられる」という関係ではなく、相互に影響を与え合う関係性の構築であることを、Mさんや彼

と関わる一般学生やメンター学生が表現していた。

筆者は、Mさんの作品を通じて、地域や公共交通が維持されるかどうかは、単なる経済合理性だけでなく、そこにどれだけの人の生活や思いが重なっているかと感じた。Mさんの大好きなお祭り、電車、公共施設は、制度的整備だけでなく、日常の中でどれだけ自然な関係性が築かれているかと教えてもらったように感じた。〇〇町の静かな風景と、加古川線を走る電車の音、そして駅に立つMさんの笑顔の写真。それらを一つの物語に編み込むことで、「共生」を具体的な風景へと表現しなかったのだと感じている。



■表現することの喜びと怖さのはざままで

満面の笑みが印象的なPさんは、今年でKUPI4年目。お話し好きということもあり、周囲の人をぱっと明るくする存在だ。Pさんの周囲にいる人は、自然と笑顔になっていた。

前半の授業では「共生」できていないものについて、人間と自然との関係に着目し、「共生できていない」事例として、昨今問題視された熊による人身被害の問題について取り上げた。Pさんは単にニュースなどで報道される被害事例を取り上げるだけでなく、なぜ人と熊の衝突が生じているのかという背景に焦点を当てることで、熊の絶滅が森D環境の変化、人間の生活圏の拡大などの人や社会を含めた生態系全体に与える影響や環境についても触れることで、人と自然の両方の保護という観点から「共生の在り方」について自分なりに考察を行っていた。

創作活動の場面では、Pさんの得意分野である落語の語りの要素や描画表現の力が十分に発揮されていた。また、Pさんが落語や絵を描くのが得意なことから、自分で描いた熊のイラストをかたどった画用紙を用いて、物語性のある紙芝居形式の発表資料を作成した。紙芝居という方法で表現することで、自分自身の発表や伝えたい内容が聞き手に伝わるように試行錯誤する様子が授業では見られた。また、Pさんは紙芝居の作成過程において、メンター学生や一般学生との対話を通して、熊に遭遇した際の対処法を知ってもらうことが大切であると考えていた。更に対話を通して得た学びや気づきに関する知識を基礎として、その知識を広く伝えることを通して、人と熊との間に発生する危険や対立を未然に抑えることを目指す姿勢が本番では見られた。発表本番は緊張することなく、場面転換の仕掛けにより、聞き手の注意や関心を引きつける多様な工夫が施されていた。また、視覚的な工夫や話の展開など各々の場面においてPさんらしい表現の特徴が見られ、関心を引きつける発表となっていた。この発表経験は、Pさんが自分の得意なことや強みを活かして社会的テーマを表現する貴重な機会となっただけでなく、聞き手であるメンター学生や一

般学生にとっても「共生とは何か」「人と自然のよりよい関係とは何か」について改めて考えさせられる機会であった。

後半の活動の内容は「共生」をテーマにした写真絵本作り。Pさんは、事前に自分のやりたいことを決めており、『私が痩せた雑学物語』をやりたいと、一般学生とメンター学生に話してくれた。そのテーマについて、一般学生とメンター学生がいくつかの質問を投げかけると、「着れなくなったお気に入りの服をもう一度着たい」「綺麗にテレビに映りたい」という背景が見えてきた。しかし、自分が「痩せる」と、「共生」というテーマはどのようにつながるのか、悩むことになった。



何度か制作するグループが入れ替わり、最終的に固定されたメンバーは、Pさんとメンター学生（筆者）のペアだった。「ダイエット法を紹介したい」というPさんの熱い思いを、どう表現につなげればよいのか。どうしたら、Pさんが実現したい「ダイエット法をみんなに伝える」という思いと、「共生」という抽象的なテーマを掛け合わせることができるのか。「なんでダイエット方法を伝えたいと思ったの？」と、メンター学生が問いかけてみたが、Pさん自身の思いはあまり見えてこなかった。そのため、再び、「なぜ痩せたいと思ったの？」「ダイエットと『共生』で考えてみると、何と何が共生できてない？」といういくつかの質問を投げかけ、語り合いを試みたが、Pさんの返事は色々な健康ダイエット法の紹介にとどまった。この時点では、Pさんにとって重要なのは、自身が行なっている様々なダイエットの工夫や方法を発表することであり、授業のテーマである「共生」は意識していない様子だった。

休憩時間になると、使い古されたノートを開いて、KUPI学生とメンター学生にその中身を見せてくれた。野比のび太という名前で、いろんなダジャレを溜めることにハマっているという。いくつかのダジャレが披露された後、その場にいたKUPI学生とメンター学生も、一緒にダジャレを作って笑い合った。Pさんは、ファイルや文房具、ぬいぐるみなどドラえもんグッズのコレクターでありながら、映画のタイトルと年代を細かく覚えており、かなりマニアックな、ドラえもん博士である一面が見えてきた。

一旦、Pさん自身が実現したいことや、好きなことから出発の方がいいのではないかと考え、「じゃあ、今回の発表も、藤子・F・不二雄みたいにペンネームつくっちゃおう？」と提案すると、ノリノリで同じように名前を入れたペンネームを作り、ドラえもんの漫画のストーリーに則って、一つの健康ダイエット法につき、一つのエピソードを紹介していく流れになった。Pさんには、たくさん名前があった。落語家としての名前、KUPIでのニックネーム「ドラちゃん」、ダジャレノートの「野比のび太」、そして、今回の発表で作成する物語のペンネームである。いろんな名前があることを話してくれた際に、「今の

いろいろな名前の自分はそれぞれ違う？」「特に好きな自分はいるの？」とメンター学生が質問をすると、「落語のとき！」と食い気味に答えた。ついで、「落語があったから、自分のことを好きになれたの」という言葉も語られた。

落語をすることによって、新たな自分の一面を他者に見せ、分かち合うことに喜びを感じていたのではないかと、メンター学生は考えた。それが、Pさんの「痩せたい」理由に何かつながっているのかもしれない。

Pさんは、伝えたいアイデアで溢れている一方で、「でも、こう思われたいかな？」「○○さんが気にするかも」という不安も随所で語っており、自己表現する際に、他者のまなざしが強く意識されているように思えた。人からどう見られるかを気にするPさんの姿に、メンター学生も自身を重ねていた。自己表現をする場面では、他者のまなざしを強く意識してしまう。どう見せたいのか、どう見られたいのか。自分の中にあるいくつものいろいろな自分たちが、せめぎ合っているように思えた。

メンター学生と共に、自己表現の際の不安を語り合った後、お互いの自分の変化を捉えて、なぜ自分を好きになるのに至ったのかを考える作業がなされ、「(太っていた) 昔の自分」と「(痩せた) 今の自分」という、過去と現在のPさんの対比を物語形式で伝えていく方向性になった。Pさんの中に、「過去の自分と現在の自分の共生」というテーマが少しずつ実感として浮かび上がってきていたように思われる。



制作が始まってしばらくして、体調を崩してしまい、2回授業を欠席した。年明けに再開した際には、進捗への不安が語られた。久しぶりにみる

Pさんは、いつもの底なしの明るさというよりも、無理をして頑張ってきている様子であった。しかし「発表したい」というPさんの強い思いで、発表に向けた作品づくりが再開した。その中で印象的だったのは、ずっと「痩せたい」と言っていたPさんが用いる「痩せる」の意味に変化が現れていたことである。

今回の体調不良によって食事のままならなく、結果的に体重が落ちた経験をしたPさんは、「今回で4キロも痩せたの」「痩せるのは嬉しい。でも、病気で痩せるのはあんまり嬉しくない」と話してくれた。そして、「なんで前は痩せたいと思っていたの？」とメンター学生が尋ねると、ぼつりぼつりと、過去に体調を崩しがちで自分が嫌だったことや、「健康で、笑顔でいたい」「周りの人がみんな、すんごく心配してくれた」という理由が断片的に語られた。このことを契機に、Pさんにとって「痩せる」とは、ただ単に体重を落として、体を細く見せるということではなく、健康で笑顔でいられる自分であること、そして、自分の笑顔の輪を周囲に広げたいというPさんの思いがあることが、ペアの中で共有され、少しずつ「共生」との接点が見え始めた。その日から、制作の方向性は、「私の痩せた雑学物語」から「自分を好きになれた物語 ～過去の自分と今の自分の共生～」

へと変化した。ドラえもんのように、過去の自分と今の自分が出会い直すストーリーのイメージで、制作が再開された。過去の嫌いだった自分から、今の好きになった自分にへと変化してきた過程を描きながら、自分が健康で笑顔でいられるために試してきた方法を紹介していき、最後に P さんにとっての共生を提示するようなストーリーの流れになった。

発表当日、P さんは紹介したい健康法の一つである白湯を水筒に入れて持参し、発表の中で実際にそれを飲むと言う実演をした。これは、初めから一貫して P さんがこだわりを見せていた演出だった。発表後の P さんは満面の笑みを浮かべ、メンター学生とハイタッチを交わした。そして、来場者に積極的に声をかけ、自らのパワーポイントを見せながら、嬉しそうな様子だった。



今回の制作は、P さんにとって、時間軸（過去・現在・未来）と関係軸（自己・他者）を行き来しながら、自分のあり方、そして自己を取り巻く他者を見つめ直すプロセスであったのではないかと。その中で、P さんとメンター学生は、自分を表現することについて語り合い、他者にどう見られるかという視点だけでなく、自分はどうありたいかという問いにも向きあった。

自分が笑顔でいられる生き方を模索し、同時に周囲の人の笑顔も大切にしたいという P さんの思いは、「共生」を考えるうえで大切な視点や学びだと考えられる。

■「できている」から「できていない」を探る

授業の前半では、O さんは「共生できていない」例として、事前に ChatGPT を通じてテーマの素材を準備し、参加してくれた。その素材は、阿部寛主演のドラマ『白い春』であった。当初は、このドラマのストーリーから「共生できていない」エピソードを見つける予定だったが、O さん自身はドラマを視聴していない様子だった。また、嵐の大野君が大好きだという話題も出たため、「同担拒否」という現象が「共生できていない」ことに繋がる可能性を探ってみた。しかし、O さん自身は同担拒否ではなかったため、話の展開には至らなかった。一般学生やメンターも、どのようにテーマを展開していくかを模索することとなった。対話を重ねるうちに、O さんからご自身の家族や通っている事業所のスタッフについて話してくれるようになった。その語りから、温かな人間関係が築かれていることが伝わってきた。関わりのある人たちの話をしているときの O さんの表情は明るく、家族の愛情に包まれて育ってきたことがうかがえた。

そこでメンター学生は、「共生できていない」事例を探るよりも、「共生できている」関係性に焦点を当てて展開した方が、O さんの表現がより自然に引き出されるのではないかと考え、方向転換を図った。すると、ご家族との温かな関係や日常のエピソードが、O さん

んの口から自然と語られるようになった。Oさんが愛ある関係性の中で生きていることを可視化し、メタ的視点を獲得する一助になるのではないかと考えた。家族の話題は毎年のように取り上げられているとのことだったが、今回グループを組むことになった一般学生、メンター学生とOさんは初めての出会いだった。浅い関係性において、まずOさんの表現を丁寧に受け止めることが重要だと感じた。常に微笑んでいるように見えるOさんが、四年のプログラムに継続して参加したいと思えるようになったのは、彼女自身の思いや表現を、一般学生やメンター学生、教員、コーディネーターが丁寧に受け止め続けてきたからではないだろうか。「共生していない」という概念を理解し、形にして発表するという目標にとらわれすぎると、一般学生やメンターがOさん自身を理解しようとする姿勢が、かえって後回しになってしまう可能性もあったと振り返る。

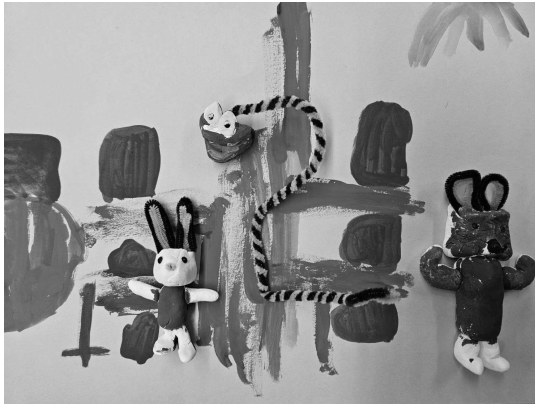
後半の活動では、「共生」をテーマに動植物の食物連鎖を表現する作品づくりに取り組んだ。制作を通して最も強く感じられたのは、「共に生きる」という言葉の意味が、Oさんの中で明確だったということであった。

はじめに、森や草原、海といった生態系の中で、植物・草食動物・肉食動物・昆虫がどのように循環しているのかを整理した絵コンテをパソコンで作成した。ミツバチと花の関係、魚を掃除するエビとの関係、そして映画『ズートピア 2』のウサギとキツネとヘビが助け合うシーンが描き出されていた。この「共生」の一連の流れは単なる補完の関係ではなく、命が命を支え合う循環の構造であることに改めて気づかされた。絵本作りの過程では、Oさんのイメージが大きな力を発揮した。動植物のイラストを配置し、背景に森や海の風景を折り紙と画用紙で作成していく作業は、彼女にとって非常に自然なものだった。折り紙や紙粘土への色塗り、細かな人形の制作や色彩の統一、文字のフォント選択など、彼女は「これがいい!」と楽しそうに選択をしてくれた。彼女が持つ視覚的な構成力、そして何よりも一つの作業に丁寧に向き合う姿勢は、筆者にとって学ぶべき点が多かった。食物連鎖の図を作りながら、「これは支え合っているんだよ



ね」と彼女が言った言葉が印象に残っている。その表現には、知識を超えた実感が宿っていた。最初はどのようにして食物連鎖なのだろうかと思った。一見すると弱肉強食の世界のように見える。しかし視点を変えれば、そこには相互依存がある。どの生物も単独では生きられず、他者との関係性の中で存在している。もし植物がなければ草食動物は生きられず、草食動物がいなければ肉食動物も存在できない。さらに、分解者がいなければ循環は止まってしまう。生態系とは多様な存在がそれぞれの役割を担いながら、全体として均衡を保つ仕組みなのだ」とOさんが教えてくれた。

筆者は「共生」とは一方的な配慮や保護ではなく、相互に力を引き出し合う関係である



と理解するようになった。Oさんが生態系の知識を説明する場面もあれば、一般学生が紙粘土や折り紙を作成したり、声を出しながら台本の準備を手伝ったりする場面もあり、お互いが支え合っていた。その往復運動こそが、共生の具体的な姿であったと感じられた。完成した作品には、太陽から植物へ、植物から草食動物へ、さらに肉食動物へと続くエネルギーの流れが明確に示されていた。今回の体

験を通して、Oさんのイメージとパソコン技能がなければ、完成度の高いものにはならなかっただろう。そして筆者自身も、彼女や共に製作に携わった一般学生との対話を通して視野を広げることができた。

「共に生きるとは何か」の問いかけは、共生社会の縮図のような時間であった。Oさんの見せる笑顔からは、これからも多様な人と関わりながら、互いの強みを活かし合う関係を築いていく未来のOさんの姿が予感された。

■距離を超えた共生を KUPI 学生が教えてくれた

写真絵本作りのテーマを模索する対話を通じて、Lさんの素直で穏やかな人柄が自然と伝わってきた。ラポール形成するため自動販売機やお気に入りのドリンクについて話していた最中、スマートフォンに「九州で地震が発生した」とのニュースが表示された。ニュースを目にしたLさんはおおしく動揺したので気持ちを落ち着けるために隣室へ移動し、しばらく涙を流した。様子を見守りながら話をしていくと、2018年の大阪地震の被災経験、ご両親の阪神淡路大震災の被災経験が、涙の背景にあることがわかってきた。恐怖の記憶が蘇るつらさを抱える一方で、被災によって不安や恐怖と戦っている人へ強い思いがLさんにあることが見えてきた。大阪地震については小学生だった少女が犠牲になったことへひどく心を痛めていた。能登地震の被災者は今も辛い思いをしているに違いないと気持ちを寄せ泣いていた。Lさんと共に活動したメンター学生は被災経験がなく、日々の忙しさに追われて被災地の人々への思いが薄れてしまっている。Lさんとの対比が浮き彫りになった。それをLさんに伝えたところ、距離を超えて被災地の人々と共生しているLさんの思いを表現することをテーマにすることに決まり、自ら『距離をこえた応援』と絵本のタイトルを決定し、製作にむけたLさんの気持ちに前向きな変化が見られた。一般学生が「Lさんにしかできないことやで」と声をかけていたのが印象的だった。

Lさんは、物語が起承転結で展開していくこともすぐに理解していたため、早速絵本のプロットの作成に取り掛かった。素直な性格であることもあって、一般学生との対話をしながらの作業はスムーズに進んだ。しかし、一般学生やメンター学生がややリードする形

になりがちだったので、Lさんの主体性を引き出せているのかという疑問を抱いていた。また、被災の記憶による心理的負担に配慮するよう、表情や声色、口にする言葉から読み取れるように様子を見ながら進めた。写真の構成、撮影も順調で、時間的にも余裕があり、みんな楽しく取り組んでいるようだった。出来上がった絵本に文言を入れる段階で、Lさんの表現と想いが自然に現れ、主体的な姿勢が見られた。記入した文言は全てLさん自身が考えて打ち込んだ。PC作業は仕事柄得意なようで、作業中の表情もますます生き生きしてきた。絵本の最後に、Lさん自身の被災経験について書くことを提案したら了承してくれた。伝えたい事がすでに内面にあったので、被災経験の記入は完全に一人の力で仕上げられた。被災時の周囲の慌ただしい、ただならぬ様子を見た時のLさんの不安と恐怖感が伝わってくる文章だった。しかし、どんなにつらい出来事があっても、助けてくれる人がいることを知っているLさんは、被災経験をただの悲劇として捉えるのではなく、人は助け合いの中に生きていることを短文の中に表現していた。作業中においても神戸大学のボランティア団体WILLで被災地支援をしている一般学生と現地の様子を話し合ったり、今の自分ができることとして、コンビニで寄付をしたり、被害地域産の果物を使用したジュースを購入するなど、実際に行動に移していた。発表前に、「ここまでで大変だったことやしんどいと思ったことがあった？」とたずねたところ、「被災経験を思い出し、辛くなってしまったらどうしようとおもったが大丈夫だった。」と晴れやかな表情とともに語ってくれた。被災経験はLさんの人生の中で大きな意味を持つ出来事だ。KUPIに参加する前からすでに、その経験の意味を受容できていたのだろうと推測できるが、KUPIで絵本にして表現し、人前で発表し、受け取められたことは、被災経験の意味をより深く受け止める契機となったのではないかと考えられる。



偶然にも、昨年度のテーマ「いのち」とつながったテーマとなった。KUPI二年目のLさんにとって、昨年度に掘り下げた「大切にされてきた自分」と、今年度の「他者を大切に想う自分」がいることが意識された内容になったかと推測される。Lさんは今後WILLに所属し、被災地支援に携わることを希望している。

Lさんと絵本制作を通して、被災地の人々との共生を考えた。これはメンター学生にとって、どこか遠くにあった被災地、被災した人々との距離が一步縮むような経験となった。メンター学生とLさんとの親しさ、関係性の上に被災地が近くに現れた感覚がある。メンター学生がLさんの真似をしてコンビニで寄付をするという変化があったことも学びの一つとして捉えられるのではないだろうか。

■劇作家・Kさんの誕生—共に学ぶことのできる環境を活かして

Kさんは、今年度初めてKUPIに参加した。前半の活動では、「共生できていないもの探し」というテーマに沿って、Kさんの関心と「共生」がどのように接続できるかを、ボランティア学生、一般学生、メンター学生とともに探っていった。Kさんは活動が始まった時点で、刑事ドラマになぞらえたストーリーを考えており、その共有からグループ活動は始まった。どのような内容を伝えたいか語り合う中で、肌の色による差別、白人至上主義、K.K.K.といった単語が挙げられた。差別や偏見、とりわけアメリカにおける人種差別の歴史に強い関心があることがグループの中で共有された。なぜそのテーマに関心を持ったのかを尋ねると、過去に観た映画がきっかけであったことが語られた。肌の色だけで差別される場面が強く印象に残っていたという。Kさんの頭の中には明確な劇のシナリオがあり、次々と案が提示された。警察の階級設定をはじめ、細部にまでこだわりが見られ、制作過程そのものを楽しみ、没頭している様子であった。寸劇という表現方法、登場人物の名前や関係性、演者、演出に至るまで、すでに具体的に構想されていた。細部に至るまで具体的な構想が、Kさんの中で既に出来上がっているため、後は、物語の内容や展開、既に決めてくれていた詳細なものの調整を一緒に考えることを中心に進められた。

シナリオには人種差別にまつわる過激な描写が含まれていたため、メンター学生が、写真による直接的な描写ではなく、BGMを用いることで深刻な場面を表現する方法を提案した。Kさんはそれを受け入れ、BGMと一緒に探す作業が行われた。

また、「そもそも K.K.K.の説明がないと、発表を聞いてくれる人がわからないんじゃないかな」という提案がボランティア学生によってされた。それに対しても納得した様子で、スマホを取り出し背景を調べ始めた。その後、シナリオに書かれていた状況や展開を、Kさん、ボランティア学生、メンター学生の3人で会話劇を重ねながら台本へと落とし込んでいった。各自が自分のセリフを考え、書き進める形式がとられた。

このような相互の調整を経て、人種差別をテーマに据えた寸劇の発表を行うという方向性が決まった。題目は『K.K.K.に向き合う～半沢警部たち～』。Kさんは演者でもあり、同時に監督でもあり、全体をプロデュースしていた。

制作の過程では、間違えた際に強く自己反省をする一面も見られ、自身に対して厳しい様子うかがえた。そのKさんの姿勢から、彼の発表にかける思いの強さを、ボランティア学生とメンター学生は感じ取っていた。

発表当日、Kくん自身の発表が終わるまで、ため息をついたり、お茶を何度も飲むなど、緊張が滲み出ていた。原稿を繰り返し確認する姿からも、自分なりに落ち着く方法を試みている様子うかがえた。本番では、力のこもった演技を披露した。ラストの決めシーンで「人種差別は許すマジです!!」と言い放つ場面はリハーサル以上の熱演だった。発表後には「ビクトリ～～！」と天を仰ぎ、クランクアップさながらの解放感を見せた。晴れやかな表情で席に戻る姿が印象的であった。



後半の活動では、共生がテーマの写真絵本作りに取り組んだ。刑事ドラマが好きな K さんは、絵本の題材も刑事ものにする（制作前からすでに）決めていた。初回の活動では話の構成を考えるワークシートが配られ、他のグループはどのような「共生」について扱うかを考えるところからスタートしていた一方、K さん

は、すでにお家で話の内容を考えてきているといった強い気合の入りようであった。それと同時に、とにかく早く作品にしたいという焦りも感じられた。このように、自分の作りたい作品像を強く持っている K さんに対して、彼と同じグループとなった一般学生・メンター学生は、彼のあふれんばかりの熱量についていくことに必死で、双方向の対話は見られなかった。ただ、はじめは K さんのオーダーを形にすることに徹していた一般学生・メンター学生であったが、次第に「こんな感じで良いかな?」「こんなのはどうかかな?」と K さんと対話し、共に作る関係性になっていった。K さんも「ここはもう少し〇〇をお願いします!」と、自身のこだわりが相手に伝わるように言葉を選んでいくように感じた。

制作が進んでいく中で、今回の作品のどこに共生の要素がどこにあるのか、とメンター学生が問いかけるとイメージがないわけではないが、言語化することが難しそうであった。どこに K さんの捉えた共生の要素があるのか、内容について深ぼっていくと、白人至上主義、外国人差別という言葉が出てきた。差別された恨みから犯行に及ぶという内容であった。そこから次第に、人種差別は良くないという K さんの想いが表れてきた。制作の手を一度止め、他者とじっくり話して頭の中にあることを整理していったことで、写真絵本の軸となる「共生」というテーマが自分の考えたストーリーに入っていることを確認でき、さらに制作に弾みがついたように感じた。

その後、本人の口から人種というキーワードは、L さんの発表（前半の）から想起したものであると言っていた。考えてくれていた物語では、「神戸大学」、「(実際にある学部の)教授」と存在する名称が使われていた。題材が事件ものであったので、架空の名前のほうが良いのではないか、と思ったが、かつちり物語を作ってくれていたため、変更に同意してくれるかわからなかった。すると、一般学生が「この登場人物の名前は国民的アニメの登場人物を想起させるから著作権引かからないかな?」とユーモアを交えて K さんに言った。すると、「あ、それはまずい。」と言って、名前を変える流れになった。その流れで、「大学名とかも K さんのオリジナルにしてみたらどう?」と提案すると、「そうですね!」と言って実際に存在する名称が次々にオリジナルの名前に変わっていった。

内容や設定が固まってくると、写真撮影に移っていった。まずは、登場人物の表現方法を考えた。登場人物を紙で作ると言っていた N さんのアイデアを参考にしたいと言った。そのアイデアをベースに、大学教員の作品を参考にモールドで登場人物の人形を作ることに

決め、メンター学生の助言を活かして人形の頭に印刷した顔写真を貼りつけることにするなど、他者との関わりの中で K さんの作品に合う形に発展させていった。次に、背景のなる画像をメンター学生と「これがいいかな。」「あれがいいかな。」と一緒に決めていった。そして撮影では、一般学生・メンター学生が絵コンテを参考に配置をしていった。「K さん、これでいいかな?」「小道具付け足したらどう?」という同じグループの学生の提案に、K さんは「いいと思います!」「いや、そのまま!」と絵コンテにとらわれず、意見を交わし、その場でより良いものが生まれていった。制作をしていく中で、学生の提案を取り入れたり、対話を通して折衷案を見つけたりするなどのコミュニケーションが活発になっていった。

授業が終盤に差し掛かると、K さんは良い作品を作りたい気持ちと時間がないことへの焦りで葛藤しているようだった。一緒に活動している一般学生・メンター学生も時間が限られていることは自覚していたが、K さんの制作にかける強い想いを自分事として感じるようになり、良い作品を作りたいという共通意識で繋がっていたように思う。そして、何とか写真絵本は完成し、あとは発表を残すのみとなった。発表の際には、登場人物ごとに声優として一般学生・メンター学生を割り振り、セリフを言ってほしいと K さん自らオファーしていたのだが、事前に練習することはできなかった。そのため、発表当日に急遽読み合わせをすることになった（写真は読み合わせの様子）。みんなで円になり、K 監督の指示に合わせて読み合わせをした。K さんの熱心な取り組みを知っている学生たちはみんなセリフに気持ちが入っていた。



直接 K さんから頑張れ!と言われたわけではないが、K さんの制作に向かう真剣な姿と熱量は、周囲の人に伝わっていたのだと思う。K さんは発表後、「もう少し準備できたらよかった...」と言いつつも達成感に満ち溢れた顔をしていた。参加した学生からは「楽しかった。」という言葉があり、K さんの持つ、人を巻き込む力を感じた。

最初は、自分の好きな刑事ドラマを作りたいという思いが先行していて、「共生」という授業のテーマが明確に見えていなかったと思われるが、一般学生やメンター学生、KUPI 学生とかかわる中で次第に共生というテーマが言語化されていき、K さんの中で明確になっていったと考えられる。また、刑事ドラマに対する強い思いから、自分の世界観が出来上がっていたが、次第に他者の意見を取り入れるようになっていった。それは、K さんがもつ熱い思いに刺激を受けた学生が K さんと同じ気持ちで作品と向き合うことで生まれた信頼の表れのように感じる。

発表会当日、「最後のページに付け足したい!」と急遽追加した次回予告。来年度はも

っとパワーアップしたものを作りたいと意気込んでおり、今回の学びが生きてくれることを楽しみにしている。

■創作活動を通して学んだ多様な表現の在り方

Jさんは今年度初めて KUPI に入学し、火曜日の授業を通して様々な活動を行った。「共生できていないもの」について考えた前半の活動では、人と自然に焦点を当てて紙芝居を作成した。紙芝居による発表を通して、「共生とは必ずしも同じ場所で共に生活することではなく、安心できる場所で生活することも共生である」という考えを自分なりの表現方法で示していたことが大変印象に残っている。また、KUPI に参加するまでの通学時間が長いにもかかわらず、授業開始時刻に遅れることのないように毎回余裕をもって授業に参加の様子を見て、Jさんの学習に対する強い意欲と責任感を感じた。

後半の写真絵本作りでは、「共生とは何か」をテーマとする最終発表会に向けて、Jさんは、自分が「共生」についてどう捉えているか、また創作活動を通して、自分にとっての「共生」をどのように表現すれば良いかについて一生懸命考えることができており、学び



に真剣に向き合う姿勢が見られ、頼もしく感じた。Jさんは、絵を描くことをはじめ作品を制作する創作活動を得意としており、自身の考えやイメージを具体的な作品として形にすることができていたように見えた。様々な登場人物をキャラクターに置き換え、手際よく粘土や木工、折り紙などで個々のキャラクターの表情まで再現する能力・芸術性の高さには、一般学生もメンター学生も圧倒された。

その一方で、発表に向けて、自分の考えや思いを文章にして書いたり、まとめることに対しては困難さを感じており、特に絵本のストーリー作りの場面ではストーリーの構成や展開をどのようにするのかについて悩み、試行錯誤する様子が見られた。しかし、一般学生やメンター学生たちの力を借りながら、一文一文丁寧に言葉を紡いでいった。何とかストーリーが完成し、それに沿った写真を撮影する段階に移ると、粘土や様々な色の折り紙、木工素材などを用いて個々の場面に応じた小道具や背景を作成し、それらを撮影して作品に仕上げ、彼女の世界観が溢れる作品を完成させることができていた。完成までの過程の中には、Jさん自身の粘り強さや KUPI に対する強く熱い思いが込められているのではないかと感じている。また、細部の表現や、配置、色使いなどそれぞれのバランスを考慮しつつ、丁寧に細部を調整していた点が印象的であった。

最終発表会に向けて授業を重ねる度に、Jさんは自身の通っていた学校の特色や思い出、エピソードなどを嬉しそうに私を含めたメンター学生や一般学生に語ってくれ、彼女の人

となりやこれまでの人生・経験、彼女なりの価値観を間主観的に感じ取ることができた。メンター学生と KUPI 学生、一般学生、教員などお互いのこれまでの人生経験や体験談（主に学校に関する事柄）を語り合うことで、一般学生、メンター学生との距離が近くなり、信頼関係を構築することができた。実際、最終発表会の舞台が彼女自身の学校という設定になっており、本人がこれまで通っていた学校での実体験をもとに構成されたものだったため、身近な経験を出発点としてテーマを具体化しようとする工夫は素晴らしいと感じた。

最終発表会では、J さんが作成した写真絵本が高い評価を受け、彼女のストレングスや特技が発輝され、彼女の強みを様々な人々に知ってもらう良い機会となった。J さん自身も KUPI への参加ははじめてであり、発表する際、とても緊張していた様子をメンター学生として感じ取っていた。しかし、本番では大きな声で絵本の読み聞かせをすることができ、発表後は満足しているように見えた。また、このような経験を通して、J さん自身の表現力や他者とのコミュニケーション能力の向上など彼女自身の成長が見られる貴重な経験となった。創作活動や発表などのプロセスを経験することで、自分の得意な方法を使った考えや思いを伝えることができたという成功体験は、KUPI やそれ以外の場面における大きな学びとなっているのではないかと考えられる。



今回、J さんが KUPI に関わる全ての人々が一体となって作り上げた KUPI という学びの共同体で大学の知にアクセスすることの楽しさを共有することができ、J さんの今後の人生へとつなげることができたのであれば、メンター学生としてこれほど嬉しいことはない。また、KUPI への参加を通して育成された経験や自信が、J さん自身の今後の学習や生活場面において活かされていくことを期待したい。

【まとめにかえて：ボランティア学生とメンター学生の視点から見た今年度の活動】

■「共生」をみんなで作る教室の風景

今年も KUPI が始まった。授業開始前の教室は、知っている人同士が会話していたが、驚くほど静かだった。KUPI 学生と一般学生は互いに距離をとり、まだ言葉は交わされていない。けれど、その静けさは第 1 回の自己紹介が始まった瞬間に崩れた。白い紙に名前や好きなものを描き、輪になって紹介し合う。ただそれだけの活動だったが、そこにはすでにこの授業の核心があった。

最初に行われたのは「語りの共有」であった。KUPI 学生が、自身の好きなこと、大切な人、記憶に残る出来事について語る時間を設けた。ここで重要視されたのは、一般学生・メンター学生・ボランティアが評価や訂正を急がず、傾聴を基本姿勢とすることだった。今年も当然のように傾聴する雰囲気は共生とは理念ではなく、関係性の質であることを体験的に理解する機会となった。イラストがぎっしり描かれた自己紹介シート、文字が丁寧に並ぶ紙、色使いにこだわった表現。それぞれの個性が紙の上に現れていた。発表が終わると、「それってどういうこと?」「なんで好きなの?」と自然に問いが生まれる。気づけば教室は笑い声と質問で満たされていた。KUPI 学生からは「ガイダンスって何?」「アイスブレイクって何?」という素朴な質問も出る。普段、大学では当然のように使われている言葉が、決して当然ではないことに気づかされるのが KUPI であった。

今年度、特に印象的だったのは、一般学生とメンター学生の支え合う姿勢の成熟である。過年度と比較しても、個々の支援技能の高さが際立っていた。声のトーン、視線の高さ、沈黙の待ち方、言葉の選び方。その一つひとつが繊細であり、KUPI 学生が安心して語れる環境が自然と形成されていた。例えば、自己紹介の場面で言葉に詰まる KUPI 学生に対し、すぐに代弁するのではなく、隣で静かに待ち、必要なときだけ短い問いを差し出す一般学生の姿があった。また、緊張が高まる場面ではコーディネーターやメンター学生がさりげなく話題をつなぎ、場の温度を整える。その関わりは決して目立たないが、確実に関係性を育み、空間を支えていた。

次の週に行われた謎解きづくりは、関わる人同士だけではなく、神戸大学との関係を一気に近づけた。学校内のどこかにお菓子を隠し、その場所へたどり着く謎を考える。KUPI 学生、一般学生、メンター学生が混ざったグループは、次第に役割を見出していく。自由な発想でアイデアを出す KUPI 学生、論理的に整理する一般学生、全体を見ながら調整するメンター学生。謎が解け、お菓子を発見したときの歓声は、立場の違いを一瞬で消し去った。そこにあったのは「一緒にやり遂げた」という感覚だけではなく、「大学ってこんなところもあったんだ!」という、新しい発見も体験した。

授業は本題に入り、「共生できていない私たち」というテーマで、身の回りの違和感を探す時間が始まった。スライドには「人と自然」「日本人と外国人」「いじめ」「差別」と

いったキーワードが並ぶ。しかし議論が進むうちに、それらは単なる社会問題ではなく、学生一人ひとりの経験と結びついていった。あるグループは、現在社会問題となっている「人とクマ」の関係をとり上げた。自然破壊の話題の中で、KUPI 学生が「クマも生きている」と強く言った。その一言が議論の軸を決めた。別のグループでは「幸せと共生」がテーマになった。「好きな人と一緒にいることが幸せ」という言葉から議論が広がる。抽象的な概念は、具体的な語りの中で初めて息を吹き込まれるのだと実感した。

写真撮影ワークショップでは、教室の空気がまた変わった。カメラを手にした KUPI 学生は、驚くほどの集中力でシャッターを切った。エフェクトを試し、机の上の小物に目を向け、ジオラマで好きなマスコットを撮影する。一般学生が構図に悩んでいる横で、KUPI 学生は直感的に世界を切り取っていく。その感性の豊かさに、思わず息をのむ場面もあった。後半の写真絵本づくりでは、寄り添う姿はさらに洗練された。構想がまとまらず戸惑う KUPI 学生に対し、一般学生は選択肢を限定しすぎず、しかし過剰な自由で混乱させない絶妙なバランスで支えた。メンター学生は、テーマ「共生」と具体的エピソードをつなぐ翻訳者として支え合って、心理的安全性を維持する重要な役割を果たした。今年度は特に、支援が「うまい」と感じられる瞬間が多かった。だがそれは技術的巧拙だけではない。相手の尊厳を守る姿勢、焦らず待つ態度、失敗を恐れさせない雰囲気づくり。その総体が高いレベルで実践されていた。

発表会当日、その成果ははっきりと現れた。自分の言葉で語る KUPI 学生の姿は、自信に満ちていた。観客が感想を直接伝える光景のなかで、一般学生が「こちらこそありがとう」と頭を下げる姿があった。支えた側が感謝を述べる。今年度の火曜日プログラムの象徴のように感じた。一般学生の多くは就職活動や卒業論文の執筆など、それぞれに多忙な様子が伺えた。授業中にも製作の手を進めながら、就職ガイダンスを受ける学生や、退院直後にもかかわらず授業に参加し、授業後に快復して間もない疲れた身体をらせん階段の下で人知れずに休める学生の姿があった。

共生とは、誰かを助けることではなく、互いの力を引き出し合う関係をつくることである。今年度の火曜日の KUPI は、その関係を支える「支え合う力」が顕著に成熟していた。個人を支えるちからの高さ、相手を尊重する態度の両立が、教室を豊かな学習空間へと変えていたのである。

■火曜日プログラムに吹いた新しい風

2023 年度、2024 年度と長年 KUPI に参加してきた KUPI 学生やメンター学生の卒業が重った一方、新たな KUPI 学生 2 名とメンター学生 3 名が加わってくれたことによって、今年度の火曜日プログラムの雰囲気は例年とはどこか異なるものであった。そのことについて、2021 年度から KUPI の火曜日プログラムに参加しているメンター学生の視点から、簡単にではあるが記録を残しておきたい。

今年度の KUPI がはじまってしばらくの間抱いていたのは、今年は例年と比べて落ち着いているな、という印象だった。まず、一般学生に注目してみれば、例年は KUPI 学生と共に授業のテーマ（今年度であれば「共生とは何か？」がそれに該当する）に向き合う際、KUPI 学生から出てくる突飛なアイデアやこれまで経験したことが無いような取り組み方に驚き、迷い、葛藤する一般学生が多く見られる。そのため、毎回の授業が終了した後に大学教員やメンター学生との「相談会」が開かれることもしばしばであった。しかし今年度は、KUPI 学生の話にとにかく耳を傾け、意見を尊重する一般学生が多く見られた。「共生」というテーマの難しさに苦戦している一般学生は多くいたが、KUPI 学生とのコミュニケーションは円滑に進んでいるように見えた。そのことは、一般学生の関わり方が上手であったと受け取ることができる一方で、火曜日プログラムを通して一般学生がどのような葛藤を抱いていたのか、そもそも葛藤を抱いていたのか、メンター学生の視点からは分からなかったことを意味している。

無論、それは一般学生の中に一切の学びが生じていないことを意味しているわけではない。特に、授業が最終局面を迎え、発表会の日が近づいてくることへの焦りが生まれるような時期になると、はじめは落ち着いていると感じられた教室の空気も熱を帯びていった。そういった中で、一般学生が何を学んだのか。一般学生が内面化している何かを揺さぶる出来事があったのか。メンター学生の視点からは迫ることが難しかった今年度だからこそ、彼らが提出してくれるレポートの内容がますます楽しみになった。

次に、KUPI 学生にも注目したい。今年度の KUPI 学生は7名と、例年10名以上が参加していることと比較すると人数が少なかった。また、そのうち2名が新入生であった一方、4名が今年度で卒業を迎える4年目の参加者であり、参加歴に大きな偏りがあった。ただ、新入生は二人ともそれぞれにこだわりや活気を持った学生たちであり、それぞれが火曜日プログラムに新しい風をもたらしてくれた。Jさんは、授業や振り返りの中で誰かが発言する場面が生まれると、必ず一番最初に話をしてくれた。全体的に落ち着いた、大人しい雰囲気の流れの中で、いつでも先陣を切って発言しやすい雰囲気を作ってくれた。Kさんは、火曜日プログラムには欠かせない「周りを巻き込む力」を持っており、Kさんがいてくれたことによって、KUPI 学生と一般学生、メンター学生の間で結束感が生まれる場面が生じた。（来年も参加してくれると期待してのことだが、）この二人が、これからの新しい KUPI の雰囲気をつくり上げてくれるのだろう。

4名の KUPI 学生が卒業するため、来年度の KUPI がどのようなものになるのかは全く分からない。しかしながら、今年度の KUPI において既に新たな可能性が萌芽していたことは先に述べた通りである。今年度の学びについて丁寧に振り返る機会を設けながら、8年目の KUPI に向けて新たな一歩を踏み出してほしい。

3) 「話し合う！ やってみる！」

【活動の概要】

メンター学生が中心となり、KUPI 学生とメンター学生にとっての大学の学びとは何かという問いに向き合い、考え、活動内容を作っていく。対話を重ねることで起きる変化や発見を楽しみ、それらが活動に活かされることも期待したい。そして何より、やってみないとわからない面白さを楽しみたい。20 時からのメンター学生のふり返りは、ふり返りと次回の活動内容を決めるため大変忙しかったが奮闘した。

【活動日について】

オムニバス授業を担当する教員の予定を考慮し、3 回の授業が木曜日に実施された。その分、月曜日が活動日に変更され不規則になったが、より多くの授業を受講できたことは良かった。メンター学生は固定のため、月・木のメンター学生はいつもと違う内容を担当することになったが柔軟に対応した。木曜日に実施した授業のふり返しには対話形式を採用するなど、木曜日の特徴を取り入れたことも良かった。

日 程	内 容
10 月 9 日	コミュニティボールを作りながら自己紹介、入学式の感想 みんなに聞いてみたいこと
10 月 16 日	構内散策、みんなに聞いてみたいこと
10 月 23 日	木曜日にしたいこと、今の生活と 10 年後の生活について①
10 月 30 日	岸本吉弘教授の授業
11 月 6 日	構内の自動販売機めぐり、鶴甲公園へ行こう 赤木先生の授業を受けている学生さんに聞きたいことを書こう①
11 月 13 日	体験新喜劇①
11 月 20 日	体験新喜劇②、活動の前に赤木先生の授業にとつげき！②
11 月 27 日	大田美佐子教授の授業①
12 月 4 日	体験新喜劇③発表会
12 月 11 日	学生さんが答えてくれた回答を見る、KUPI 学生への質問に答える③
12 月 18 日	今の生活と 10 年後の生活について②、これからの活動について
12 月 25 日	大田美佐子教授の授業②、ミニクリスマス会
1 月 5 日	年末年始の話&抱負を話そう、学生さんの質問に答える（模造紙作り）④

1月8日	模造紙を完成させてピロティに掲示する⑤ 対話のテーマをみんなで考えよう 六甲台第二キャンパスの計画を立てよう
1月15日	1/8 で出たテーマで対話、アゴラパーティーの計画
1月22日	六甲台第二キャンパスへ行こう
1月29日	アゴラパーティーの計画、卒業生の卒論のアンケート協力、対話
2月5日	アゴラパーティー
2月12日	【番外編】 学生さんと繋がっていた模造紙にお礼を書こう⑥

[10月9日 コミュニティボールの完成、入学式の感想、みんなに聞いてみたいこと



この日の初めは、ウォーミングアップとして「おおあらし」というゲームを行った。初めに体を動かし、心も体も温まったところで、本格的な活動がスタートした。

前半は、自己紹介&入学式の感想を話しながら、入学式の日を作り終わらなかったコミュニティボールを完成させた。好きな色の糸をそれぞれ巻いていき、世界に一つだけの素敵なコミュニティボールが出来上がった。

そのあと、完成したコミュニティボールを使って初めての対話を行った。ルールはコミュニティボールを持っている人が話せて、そのほかの人は聴く、話を聴き終えたら質問タイムという流れで、ボールを次々と回しながら進んでいく。話したくなかったり、考えている時はパスすることもでき、ゆとりのある対話が進んでいく。初めての対話のテーマは「好きなテレビ番組」であった。YouTube やドラえもんが人気で、ドラえもんが大好きなPさんはドラえもん豆知識をみんなに話してくれた。

後半は、「みんなに聞きたいこと」をそれぞれ出し合った。最初に、それぞれ「みんなに聞きたいこと」を発表した。「仕事はなにをしていますか？」や「移動方法は？」、「休日の過ごし方」などみんなの日常に関する聞きたいこともある中で印象的だったのは、「運動会で流したい曲は？」や「最高だった日、最悪だった日は？」、「一日立って何ができる？」など自分の経験からみんなと話し合いたいことを出している KUPI 学生がいたことである。

その後は、ラグマットに出た質問を並べて、それぞれ話したいことについて答えていく対話を行った。Nさんはアゴラ（カフェ）での仕事について話したが、その内容に興味を持

ったJさんがたくさん質問をしている様子が印象的だった。また、メンター学生が出した「社会学」という言葉に興味を持った KUPI 学生に、どんな学問内容なのかを説明するといったこともあった。普段は聞くことがない専門的な学問の話に触れられるのも KUPI の良さだなと感じた。



[10月16日 構内散策、みんなに聞きたいことの続き]

はじめに KUPI が開講されている鶴甲第2キャンパスの構内散策を2チームに分かれて行った。昨年からの KUPI 学生と今年初参加の KUPI 学生が一緒のチームになるようにチーム分けをしたためか、先輩 KUPI 学生が率先して案内をしてくれた。

C 棟は音楽に関する設備が充実しており、ピアノがおいてある練習室がたくさんあった。個室を覗いてピアノの鍵盤を押して音を出してみたり、天板を開けて中を覗いてみるなど、皆が楽しそうにピアノと触れ合っている姿が印象的だった。

カフェアゴラがある A 棟の6階にも行った。6階の廊下から見える夜景はとてもきれいで目に焼き着けるように景色を見る姿や、写真を撮る姿が見られた。また、閉まっているアゴラの前で、「みんなでいつか行きたいね〜」「ここでなんかできたらいいね」というような活動につながる会話も生まれた。

ほかにもギャラリーに行ったり、グラウンドに出てみたりとたくさんの場所を回ったが、先輩 KUPI 学生からは今年の活動を振り返るような発言がたくさんあった。

構内散策を終えてからは、みんなで構内マップを作製した。散策の感想を述べながら、お気に入りの場所や楽しかったことなどを全員で共有した。自動販売機についてとても詳しい L さんは、構内に2か所ある自動販売機について会社名や売っている商品などの説明をしてくれ、みんなは興味津々に聞いていた。また、最も多くの意見が出たのが音楽棟で、「ピアノを弾くのが楽しかった」や「いろんなものがあっておもしろかった」などの意見が出た。

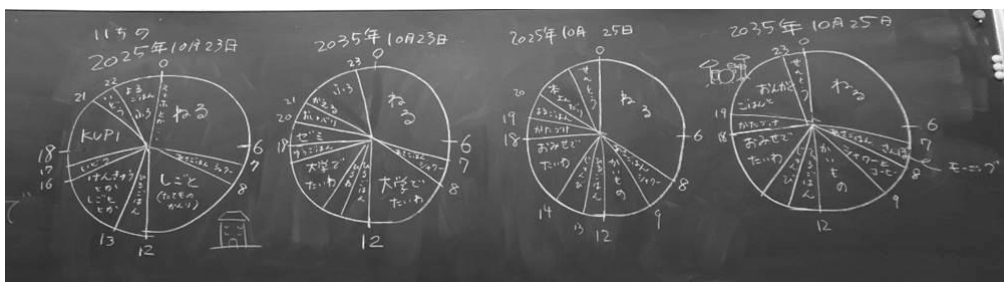
最後の活動は前回やった哲学対話、「みんなに聞きたいこと」の続きを行った。前回同様に、質問をラグマットの上に並べて、それぞれが答えたいものに答えていき、質問も交わしながら、さらに深くみんなのことについて知れる機会になった。



[10月23日、12月18日 生活について①②]

10/23 と 12/18 は「自分の生活」をテーマに、今の生活と10年後の生活について考え、描く活動をした。ここでは12/18の回も含めて活動を報告する。

この活動では、自分の現在の生活(平日/休日)と10年後の理想の生活(平日/休日)を4つの円グラフに表現した。2回目の12/18ではそれぞれの生活を発表し、対話をした。



この活動を実施することになった経緯は、KUPI 学生の K さんがメンター学生に自身の生活の悩みを話したいということを言葉にしてくれたことであった。K さんは自身の悩みについては「メンター学生に」ということであったが、これまでの活動の哲学対話では、K さんが提示した「話したい問い」のなかに「最高だった日と最悪だった日」というものがあった。そのため、K さんはメンター学生だけでなく、KUPI という場で自分のことを話したいとどこか願っているのではないかと授業後の振り返りのなかで意見がでた。それを踏まえ、それぞれが自分の生活について話すこの活動を実施することになった。

【10/23 今の生活と10年後の生活について①】

1 回目の活動(10/23)では、模造紙をみんなで囲みながら自身の生活について書いていく作業となった。書きながら、「朝ごはんになにを食べるのか」「何時に寝るのか」「最近している入浴ダイエット」といったお互いの生活からその人の意外な一面を知ることができた。雑談をしたり、つかったペンを積みあげたペンタワーを KUPI 学生同士で作っていたり、ゆるやかな時間となった。

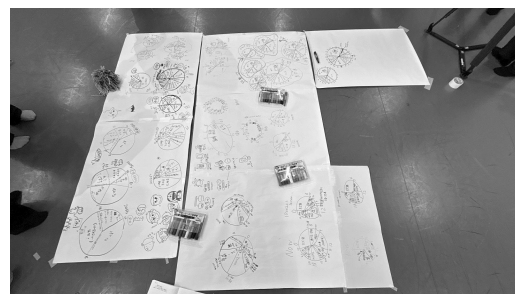


【12/18 今の生活と10年後の生活について②】

2 回目の活動(12/18)では、1 回目に書いたものを加筆した後に、それぞれが自身の生活を発表した。1 回目の活動から、体験新喜劇やオムニバス授業などがはいつたため、2 か月ほど日が空いての活動となった。その間、K さんは「あの生活の発表はいつしますか？」とコーディネーターやメンター学生に度々尋ねており、待ち遠しい様子があった。そのような K さんは今回の活動にあたり、発表原稿を書いてきていた。K さんは自身の小説の執筆について話し、KUPI 学生からも「すごい!」「読みたい!」という意見があり、K さんの執筆ノートを回覧する時間となった。

「仕事や趣味の特技」、「10 年後の夢」などはじめて知ることも多くあり、質問も多くでていた。メンター学生も、自分の生活について話すなかで、普段 KUPI では話さない「研究のはなし」や「バイトのはなし」を語り、KUPI 学生も興味をもって聞いていた。そし

て、この活動後の休み時間も、KUPI 学生同士やメンター学生も交えて、自分のことについて話し、「いっしょ〜！」と意気投合するような様子が見られた。この活動は、お互いのことをよく知る機会になったのはもちろんのこと、お互いのことを介して自分の生活やこれからの自分について考える機会となった。



[11月6日 自販機ツアー&公園散策、スナップ]

この日は、つぎに報告する赤木先生の授業での交流の準備のほかに、自動販売機を中心とした飲料の種類や値段、またどこにどんなものが売っているかという情報を網羅的に把握しているLさんの案内で、大学構内および近隣の自動販売機ツアーに出かけた。

また、ツアーの中でそれぞれ買った飲み物を片手に、近所の鶴甲公園へ出かけた。道中や公園内で、好きなものを写真にとって、のちに紹介しあいながら対話する計画であった。しばらく、自由に散策したのち、公園の明かりが思ったよりも明るかったので、公園内でこしかけ、写真を見せあいながら、対話した。遊んでいた地域の子供たちが、なにしてるんだろう、とのぞきこんでいたので、さそってみたら参加してくれた。「この公園のお気に入り」をテーマに対話した。



[11月6日、11月20日、12月11日、1月5日 赤木先生の授業の学生さんとの交流]

KUPI をとびだし、赤木先生の授業を受講する学生さんと交流する機会をもった。その計画から、交流、そして新たな活動をはじめるところまでまとめて報告する。

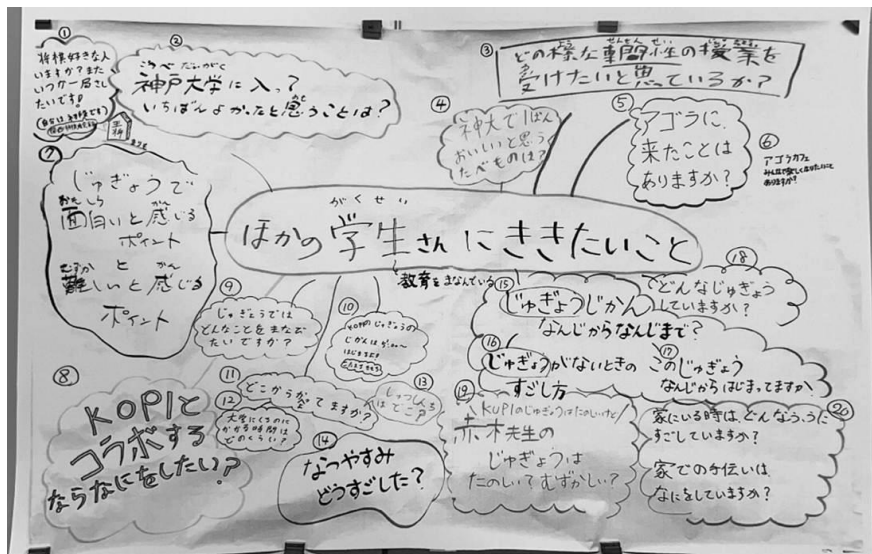
まず本活動を行うことになった理由は2つある。まず1つ目は、「木曜 KUPI でしたいこと」をこれまで話し合うなかで、「将棋のサークルにいつてみたい」など他の学生との交流をしたいという意見がでたためである。2つ目は、「自分の生活」の活動との関連で、他の学生のことや生活について尋ねることで自分の生活についての考えをより深められるのではないかと考えたからである。そのような中、子ども教育学科の1年生全員が受講する

赤木先生の授業が KUPI のはじまる前の時間に開講されており、交流の機会を得られることになった。

[11/6 赤木先生の授業を受けている学生さんに聞きたいことを書こう]

いつものように円になり、「赤木先生の授業の学生さんに聞きたいこと」について、対話をした。ほかの学生と交流することを伝えたときには、KUPI 学生から「やったー!」「したい!」という声があがり、とても楽しみにしている様子であった。

大学の授業やお休みの日の過ごし方、KUPI とコラボするならどんなことがしたいか、などいろいろな質問があがった。写真にあるのが、そのときにでた質問の一覧である。



[11/20 活動の前に、赤木先生の授業にとつげき!]

授業の時間を 30 分程お借りして、KUPI の紹介と事前準備していた「学生さんに聞きたいこと」を尋ねた。この時間の進行は KUPI 学生の 3 人が役割分担をして主に行った。

KUPI の紹介では、KUPI 学生が作成したチラシを配布した。お仕事の関係でこの時間来ることの出来なかった P さんが KUPI の良さについて話す動画を作成しており、その動画もいっしょに流した。また、卒業生も一人参加していた。



「学生さんに聞きたいこと」では、KUPI 学生がそれぞれ自分の聞きたいことを即興で決めて、対話のボールを学生さんにまわし、回答してもらった。「どんな授業を受けているか」「アゴラに来たことがあるか」「KUPI とコラボするなら何がしたい?」「休日はどんな風に過ご

しているか」といった質問や、「KUPI の授業は楽しいけれど、赤木先生の授業は楽しいか」といった少しドキドキする質問までいろんなお話をすることができた。時間に限りがあったため、学生さんには付箋を渡し、答えたい質問に対して回答を書いてもらい、後ほど回収をした。3枚の付箋を渡していたが、1枚の付箋に何問もの質問の回答を書いてくれる学生さんが多くいて、大変うれしく楽しい機会となった。

[12/11 学生さんが答えてくれた回答を見る、KUPI 学生への質問に答える]

子ども教育学科 1年生の学生さんからいただいた回答を質問ごとにまとめて模造紙に張り出した。そしてそれぞれ読みながら、さらに感想を付箋にかいて貼っていった。回答を貼るなかでも、「こんな遠いところから通っている学生さんがいるんだ!」「食堂のメニューおいしそう〜」など会話がはずみ、学生さんの回答に対して自分の知っていることを書いて付箋に貼る KUPI 学生もいた。



そして学生さんからの回答だけでなく、KUPI 学生への質問もいくつかあった。そのため、それらの質問を並べてながめ、KUPI 学生とメンター学生が質問に回答する活動もあわせて行った。「人前で話すときに緊張しない方法は?」といった悩み相談もあり、Lさんは「失敗することを恐れないことが大事!」と心に刺さるメッセージをかいていたりと、学生さんと紙面上で対話をしているような気持ちになった。



KUPI 学生とメンター学生の回答も掲示しようということになり、また新しい模造紙をつかって、掲示物をつくりはじめた。Kさんが「KUPI 学生への質問の回答」という文字の大枠を書き、その中の色をメンター学生や Pさん、Oさんが塗っていき、いつのまにか共同作業となっていた。

[1/5 学生さんの質問に答える (模造紙作り)、新しい質問をつくる]

前回の続きで KUPI 学生への質問の回答を付箋で書いて貼る作業を行った。Nさんが「KUPI で行きたいところ」や「KUPI で一番思い出に残っていること」に対するみんなの回答を自身のノートに記録する様子が見られた。Nさんは今年で KUPI を卒業するため、KUPI についてのみんなの回答は思い出深いものなのかもしれない。さらに、「神戸大学のみなさんへの質問」のコーナーの模造紙を新たにつくり、そこに質問も貼っていった。新しい質問をつくるなかで、大学でよく出沒するうりぼうや食堂のおすすめのメニューなど自然に雑談に花が咲いていた。Mさんは付箋にいろんな絵や文字を書いて、たくさん貼っ

ていた。また、これまでの活動写真を貼ったりしたため、Mさんはそれらの写真を見ながら「なつかしい～」と繰り返していた。いろんな作業の選択肢や楽しみ方があり、各々が自分のしたい作業に取り組んでいた。

[11月13日 体験新喜劇①]

3年ぶりに「体験新喜劇」が行われた。赤木和重教授が指導と研究のため訪れ、外部講師の砂川さん、中川さん、堀口さんが指導にあたった。卒業生が参加できる活動でBさん、Eさん、Hさんが参加し、FさんとGさんは後ろで見ていた。前半は砂川さんと堀口さんが「体験新喜劇とは何か」について簡単に説明して、短い実演も披露してくれた。講師の実演に教室は笑いに包まれ、場の空気も一気に和らいだ。その後、講師は劇をやりたい学生にも舞台に上がって演じるよう呼びかけて、学生たちはそれぞれの個性が感じられる演技を披露した。どの実演も真剣さが伝わりつつ、思わず笑ってしまうような面白さがあるのが非常に印象的だった。



続いて本題に入って、砂川さんから本番で使う台本が配布された。台本の内容は、KUPI ホテルで幽霊騒動が起こり、ホテル側と宿泊客が補償について交渉し、最終的にテレビ局が取材に訪れたことでホテルが話題となり大きく注目を集める、というストーリーだった。登場人物にはホテル側、宿泊客、テレビ局、お化けなどの役があり、参加者は自由に担当したい役を選んだ上で、初回のリハーサルを行った。後半には外部講師の中川さんもリハーサルに参加した。みんなは、それぞれが担当する役に集中しながらリハーサルを進めたが、この中で、いくつか小さな出来事も見られた。例えば、初参加かもしれないから、ちょっと緊張して声が遠かった学生がいて、Kさんが台本の内容について何かのアドバイスを提案したようなことなど。しかし全体として、KUPI 学生の多くは今回が初参加だが、皆のテンションが高くて、熱心にリハーサルに取り組み、演技そのものを楽しんでいる様子が見えた。最後には、二人の講師から「稽古ながらも、皆の演技はとても良く、見ていて非常に面白かった」との評価があり、参加者にとって大きな自信につながった。

リハーサルが終わってから、振り返りが始まった。授業が始まった時は、多くの学生は緊張していたものの、徐々にリラックスできたことが分かった。しかし、全体として学生は体験新喜劇をすごく楽しいと感じて、今後のリハーサルと本番に対する期待も高まっていた。

[11月20日 体験新喜劇②]

本日も、前回に続いて稽古が行われた。本番の日が近づくにつれ、参加者全員が残り少ない稽古の機会を大切に、真剣な雰囲気が感じられた。今回は新たに卒業生の D さんも加わり、それに伴って役割分担が再調整された。また、台本も前回の K さんの意見を踏まえて、再調整された。最終的に、西井さんが背景音楽の役、堀口さんと E さん、K さん、J さん、N さんが客役、中川さんと L さん、D さんがホテル側、砂川先生と B さん、H さん、O さんがテレビ局役、喬さんと竿さん、J さん、P さん、M さんがお化け役を担当することとなった。

役が決まった後、稽古が本格的に始まった。稽古中には、全員が細かな部分まで丁寧に調整しながら取り組んでいた。例えば、背景音楽を担当するメンターの西井さんは、音楽と登場タイミングの一致度を高めるために何度も調整を重ねていて、L さんは黒板の後ろで静かにセリフを繰り返し練習した。さらに、お化け役の学生は事前に衣装を着替えて稽古に臨み、その姿が他のお化け役の学生の気持ちも盛り上げるきっかけとなっていた。テレビ局のインタビュアー役の KUPI 学生が、ダンスを披露してくれたことは非常に印象的だった。これらの様子から、参加者全員が最終の本番を心待ちにしていることが伝わってきた。また、先週の稽古と比べると、今回は全体的に緊張が和らぎ、より自然に演技を楽しむ雰囲気が見られた。



ふりかえりには、多くの学生が「体験新喜劇で演じるのが楽しかった」「皆の演技がとても良かった」「再来週の発表が無事に成功してほしい」といった前向きな感想を述べていた。しかしある学生からは「K さんが稽古中にテンションが高くて、声が大きすぎになったことで少し怖く感じた」という意見も出された。K さん自身はその意見を聞いてやや落ち込んだ様子も見られたが、最後にはメンターの調整により、互いに理解を深めることができた。それぞれに異なる表現スタイルがあることを確認し合い、全体として前向きな形で振り返りを終えることができた。

[12月4日 体験新喜劇③発表会]

参加者全員が楽しみにしていた体験新喜劇の最終発表公演の日がいよいよ来た。そのため、一部の KUPI 学生とメンター学生は授業開始前から HC センターに集まり、衣装や小道具の準備を行っていた。

授業前半はリハーサルが行われた。しかし残念ながら、L さんと西井さんは体調不良のため欠席となり、M さんは緊張のあまり最後まで車から降りることができず、本番では観客席で他の学生の演技を見守る観客となった。その結果、L さんと西井さんが担当する予定の役は、卒業生の F さんとコーディネーターの橋澤さんが代役を務めることになった。

リハーサルでは、学生たちの仕上がりが良く、多くの場面で台本を見ずに演じていた。



また、これまで緊張しやすく、声が小さかった学生も、今回は明らかに自信を持って演じている様子が見られた。稽古が終わってから、学生たちは衣装に着替え、本番に向けて準備を進めた。中には、そのこだわりに驚かされるほど、衣装や小道具の作り込みが非常に丁寧な学生もいて、またお化け役の学生たちは衣装を工夫して、個性的なお化けになっていた。

衣装・小道具の準備が整うと、KUPI 学生の保護者や卒業生が次々と入場し、教室が徐々に埋まっていった。全員が着席後に赤木先生が挨拶を行い、いよいよ発表会が開始された。本番では、衣装や小道具が身につけにくく、衣裳が気になる KUPI 学生もいたが、最後まで集中を切らさず演じ切った。また、客席は学生たちの即興的な演技に大きな笑いが起こった。発表会は無事に成功し、全員で挨拶をして終わった。最後に K さんからは来年度に演じたい台本として「理想の休暇」が紹介され、観客の間でも期待が高まった。卒業生の G さんは動画や写真を撮ってコーディネーターに記録として渡した。

集合写真の後の振り返りでは、KUPI 学生は「今日皆と一緒に舞台に立てて楽しかった」「来年もまたこのような活動を行いたい」といった感想を述べていた。また卒業生からも「体験新喜劇に参加するのは 3 年ぶりだが、毎回とても楽しい」という声が聞かれた。今回の発表は、参加者一人ひとりにとって非常に印象深く、忘れがたい経験となったことが見られた。



[1 月 8 日 模造紙を完成させて掲示しよう、テーマをみんなで考えて対話をする、六甲台第二キャンパスへ行くの計画]

この日は初めに「KUPI に来るまでの時間は何してた？」というテーマで対話をした。話す人は一日の過ごし方を振り返りながら、聞く人はみんなの最近の生活の一部が覗けて、興味を持って聞けていた。



次に、前回途中まで作った「KUPI 学生への質問の回答」と「神戸大学のみなさんへのしつもん」を完成させた。KUPI の雰囲気や生活が伝わるように、写真を切り貼りし、色もカラフルに目立ちやすくした。この日は P さんが休んでいたのので、J さんは P さんが写っている写真を探して貼ってくれた。あたたかい場面だ

など印象に残っている。そのあとは、完成させたものを、B棟のエントランス部分にみんなで見せに行った。協力して掲示し、とても素敵なものが完成した。

次に、「テーマをみんなで考えて対話する」活動を行った。初めに、みんなで対話したいテーマをそれぞれ考えた。みんな個性豊かなテーマを決めたが、中でも面白いなど感じたのが、「授業の途中疲れない？」というテーマである。これはLくんが書いたものだが、大学の授業と同じ時間(90分授業)で進むKUPIだからこそ出る、学生らしい悩みで印象に残っている。

考えたテーマのうち、この日対話したのは、「5日間お金をいくらでも使ってもいいならなにをする？」というものであるが、これもまた個性豊かな回答がたくさん出た。Kさんは、その頃書いていた野球小説の続編？を書き、それを売って稼いで、さらに稼いだお金でアニメを作る、という答えを出したが、非現実的な夢を語る回答が多い中で、今と結びつけた回答がとてもいいなと思った。

最後は、1月中に行くことが決まっていた六甲台第2キャンパスで「何をするか」の対話を行った。行ったことのあるJさんが、様々な情報を教えてくれ、みんなはそれを聞きながら、やりたいことや食べたいものなどを伝えあった。

[1月15日 対話、アゴラパーティー計画、ふせんを見る]

まず、前回みんなで出し合った対話のテーマから、「じゅぎょうのとちゅうつかれない？」「つかれたときのリフレッシュのほうほうは？」というふたつを選んで、たいわをした。KUPI学生からは、KUPIの授業はたのしいからつかれない、という話がたくさんあがり、大学で他の授業を自分自身も受講しているメンター学生からは、普段の授業はつかれるが、KUPIはあんまりつかれないのは、なぜだろうという話が語られた。KUPIの授業スタイルとその他大学の授業スタイルのちがいに言及がされた。また、リフレッシュ方法についても、それぞれの普段の暮らしの中で心休まる時間やものが語られ、共有された。

つぎに、木曜日にやりたいこととして対話を通して強く支持されたアゴラでのパーティーの計画を、これもまた対話によって行った。まずは、パーティーの中で、何をしたいか、どんなパーティーにしたいか、なんとなくのイメージから、すこしずつ具体的な内容まで、ひとりひとりが安心してパーティーへの希望を語る場となった。とはいえ、以前の対話のようにそれぞれが各々のやりたいことを投げていくのではなく、誰かの発した案に肉付けするような形で、内容が膨らんでいき、なんとなくぼやけていたパーティーのイメージが、しだいにその輪郭をはっきりさせていくような時間が流れた。好きな音楽を



流しながら、なにかをみんなで調理して食べる、という大まかな方針の合意形成がなされつつ、もう一度計画の機会を持つこととなり、参加費の金額や、食べるものの内容など、パーティの詳細が課題として残された。

さいごに、これも前回大学の共用部分にはりだした「神戸大学のみなさんへのしつもん」にたいして、さっそく複数回答がよせられたので、それを見ながら、感想を対話した。神戸大学に来ている学生や教職員の多くが帰る時間帯から始まる KUPI において、他の学生をはじめとした大学の他者とのかかわりをひろげたい、という思いからの試みである。KUPI 学生は、回答をとってもらうれしように受け取っており、やはり KUPI の枠組みだけにとどまらない関係のひろがりへの希望を感じる時間となった。

[1月22日 六甲台第2キャンパス]

この日はずっと前から計画しており、KUPI 学生の多くが待ち望んでいた六甲台第2キャンパスに行く日であった。

最初に、理工学部の図書館にみんなでいった。理工学部の図書館は、近年新しくなり、とてもきれいなことで知られている。テスト期間間近で、学生は多かったが、KUPI 学生になじみがある図書館とは、どんなところが違うのかを話したり、きれいでおしゃれな勉強スペースをみんなで見回ったりした。その後は、百年記念館にあるスターバックスに向かう組と、もう少し図書館を散策する組、本を探す組に分かれた。



図書館を散策する組は、一通り図書館を回った後、最上階から見える景色を楽しんだ。窓から見える景色は、KUPI の授業が行われる鶴甲第2キャンパスから見える景色とはまた違っているようだった。図書館を散策したあとは、先にスターバックスに向かったグループと合流した。好きなものを頼んで百年記念館から見える夜景を見るなど、思い思いの形で活動を楽しんでいる姿が印象的だった。

後半はすべてのグループが集まって、工学部の食堂で夜ご飯&対話を行った。鶴甲第2キャンパスの食堂はお昼しかやっていないので、大学の食堂に初めて行く人も多く、おいしそうなものや、今までの対話の中でおいしいと話題になっていたものを注文していた。みんなで机を囲んでご飯を食べるのは初めてだったが、食卓を囲むことで生まれる自然な会話は、対話とは少し違う日常感のあふれるものであったのが印象に残っている。



最後は、前に「テーマをみんなで考えて対話する」活動の中で出た、「どんな能力でも使えるならどんなものを使いたい？」というテー

マで、みんなで対話をした。いつもの教室とは違う、少しにぎやかな環境の中で行う対話だったが、いつもどおり、質問が飛び交う楽しい対話となった。Nさんはガチャガチャが好きなことから、ガチャガチャで狙っているものが出る能力と答えたが、月曜 KUPI の時間に、魔法のアイテムでそのようなガチャガチャを作っており、授業でやったことと対話での答えが繋がっていたのが印象に残っている。

[1月29日 アゴラパーティー計画、Mさんの卒論アンケート実施]

一週またいで、アゴラパーティーを計画する対話のつづきを行った。前回の計画において、①好きな音楽を流しながら、②みんなでなにかつくって食べる、という大まかな方針がなんとなく見えてきた。しかし、対話は合意形成のための場ではないので、流れと異なる新しい意見や希望を語ってもらうこともできる、という呼びかけをした。

まずは、みんなで何をつくって食べるか、というテーマで盛り上がった。以前にも出されたたこ焼き、そしてパスタが人気で、たこ焼きの中にたこ以外のものも入れてみよう、など意見が出された。パスタは、それぞれ好みのソースが出てきたため、いくつか絞って、複数の味のパスタソースをかけて用意することとなった。また、ゲームがしたいという意見が出たほか、Pさんより「自分も将棋ができるから、誰かと対戦したい」という提案がなされた。かねてより、Jさんが将棋を趣味として打ち込んでいるという表明は、KUPIの中でもたびたびあった。Jさんのことを意識してのPさんの提案だったのかどうかは定かではないが、Jさんはもちろん、その提案にとびつき、他のKUPI学生の間でもぜひやってほしい、観戦したい、という受け止めとなった。また、Kさんも、野球ゲームの中で、自分がつくったチームの試合動画をみんなに見てほしいと語った。いずれも積極的に受け止められ、食べながらみんなで観戦しよう、という流れになった。

もっとも意見が交錯した点が、参加費の設定である。前回も、最後に話題にあがったものの、ふだんの生活においてお金の使い方がそれぞれに異なることもあり、なかなか共通の着地点が見出せないままだった。とくにKさんは、高い牛肉を買ってみんなで焼いて食べたいという希望から、自分だけみんなの分もまとめて多めに、それもとびぬけて多めに払う、という提案をしていた。今回も、前回の提案よりは少し金額が下がったものの、やはり自分がかかなり高額を負担をしたいと語った。

そこで、いったんパーティーの計画を中断し、「だれかと（ごはんを食べるなど）お金を出し合うとき、ひとしく同じだけ払うほうがいい？それとも、ひとによって差をつけたほうがいい？」というテーマで、哲学対話をする事となった。友達となら均等に分けた方がいい、という意見や、先輩後輩、先生や目上の人となら、実際におごってもらったり、ちょっと差をつけてもらったりすることもある、という体験が、KUPI学生からも、メンター学生からも出された。そして、KUPI学生の間において、先輩後輩という関係がどれだけの意味を持っているか、またそれぞれの経済状況の配慮も必要ではないか、など問いはひろがり、また深まっていった。哲学対話は、合意形成の場ではない。しかし、合意形

成の過程ではあるかもしれない。結果的に、それぞれがどうしても食べたいものは自分で買って持ってきてよい、という条件のもと、みんなで作って食べるたこ焼きとパスタの材料費は均等に分けよう、という着地点に落ち着いた。以前は、自分の意見と異なる流れとなった場合に、落ち込んで教室を出てしまっていた K さんも、「それでいいとおもいます」と受け止めていた。

なお、アゴラパーティー計画の休憩をはさんで、M さんの卒論の「しょうらいのゆめについてのアンケート」も実施した。M さんが神戸空港で自ら撮影した、飛行機のとびたつ動画をみんなにみてもらってから、それぞれのむかしのゆめと、いまのゆめ、またそれらの理由を書いてもらう、というアンケートであった。

[2月5日 アゴラパーティー当日]

あらかじめコーディネーターによって、基本的な材料はご用意いただきつつ、当日早めに大学へ集まれる KUPI 学生とメンター学生で、大学近くの食料品店へ買い出しに出かけた。また、たこ焼き機は、メンター学生の所属する研究室所有のものをお借りした。そののち、N さんの働く大学のカフェ・アゴラへ移動し、音楽をスピーカーで流しながら、ゆるやかに調理が始まった。とくに、分担を決めるわけでもなく、とはいえ自然に手分けして調理がつつがなく進行した。この自然な進行は、半年間の KUPI の中で培われた関係性ゆえであると感じる。

大学にこのような空間があること、このような時間があること。



それが、KUPI のもっともたしからしい意義だ、と感じるパーティーだった。これでまた、それぞれの日常、あるいはそれぞれの人生に帰っていく、進んでいく、予感をたこやきに詰めながら、パスタに巻き取りながら、はざまの時間がゆっくりと流れた。

さいごに、KUPI の時間を振り返るたいわを行った。



4) 課外活動「WILL キャンプ」に参加をして

WILL 冬の ESD プログラムに KUPI 学生を迎えて

藤原ゆうな（神戸大学国際人間科学部・ESD プラットフォーム WILL）

①活動内容

2026 年 1 月 23 日から 25 日にかけて、神戸大学・ESD プラットフォーム WILL が主催する「WILL 冬の ESD プログラム」を行いました。活動場所は岡山県瀬戸内市にあるハンセン病療養所邑久光明園、参加人数は途中参加を含めた計 40 名の大所帯での活動でした。

ESD 開墾キャンプ場「つどいの広場」での門柱建立のための穴掘りやコンポストづくりといったワーク、園内散策や模造紙を使ったワークショップなどを行いました。

ハンセン病を起点にしてハンセン病の問題についてはもちろん、参加メンバーの世界がより広がっていくようなプログラムを目指しました。

厳しい寒波にさらされたこともあり、2 泊 3 日の共同生活は各々大変な瞬間もあったかもしれませんが、たくさんの笑顔や輝きを見ることができました。



1/24 メンバー達が話す様子

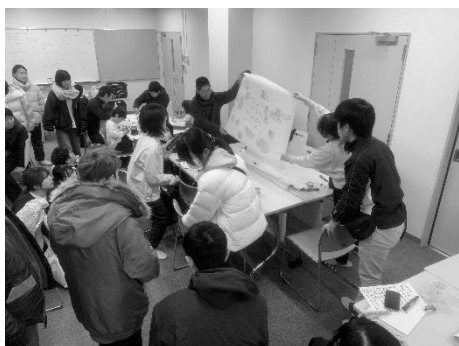
②KUPI 学生の様子

今回現役 KUPI 学生として J さん、卒業生としては A さん、F さん、G さんが参加してくださいました！

J さんは持ち前の明るさで場を盛り上げてくれました。また豊かな知識と発想力にハッとさせられることもあり、重要な役割を果たしてくれました。

F さんは自分から仕事を見つけ取り組むだけでなく、良く周りを見ていて困っている人への声掛けも積極的にしてくれてとても心強かったです。

G さんは写真係を務めてくださり、その腕前を存分に発揮してくれました！邑久光明園での振る舞いも習熟しており活動内で私自身助けられることが多々ありました。



1/24 一日の振り返り



1/25 朝食のパンケーキ作りー

Aさんも働くことに高い意欲を示していました。冬プロに初参加の人とも穏やかに接しており、居心地の良い集団づくりに一役買ってくれました。寒さもあってか途中調子が悪そうな様子もありましたが、最後はとても楽しかったと笑顔を見せてくれました。

③さいごに

当たり前のことではありますが、それぞれが異なる個性を持っている集団でひとつの活動に取り組むことは決して簡単なことではありません。そのことを改めて認識するとともに、そこから得られる豊かな経験や学びは何物にも代え難いと感じました。今後も一緒に活動できたら嬉しいです。お待ちしております！



1/25 コンポスト作り

4. KUPI 学生の声

①

「月曜日の KUPI」

月曜日の KUPI は音楽をしたり、作文を書いたり、目かくしをして立体作品をさわったり、図書館に、行ったりしました。

音楽は、歌を歌ったりしました。

月曜日の KUPI は、いろんな授業が出来て楽しかったです。

4年間、KUPI をしてとても楽しかったです。

4年間、KUPI をしてお休みしないで参加が出来てとても良かったです。

②

「KUPI に参加した感想」

4回目の KUPI でした。

今までより人数がすくなくてさみしかったです。

でも、ハチの授業やメタンハイドレートを作ったことは、とてもよかったです。

大好きな津田先生の授業もたのしかったです。

メンターさんや学生さん、先生や友だち、NHK の人もみんなにお世話になりました。

たのしいじかんをありがとうございました。

たくさんいろいろな人にであえたことは、ぼくのたからものです。

こんどは、おしごとをがんばります。

大好きな KUPI ありがとう。

③

「私の KUPI 活動記」

最初は会社で一日働いてばかりいて将来が見えない日々が続いていく中、私にある転機が訪れた。そう、神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」通称、KUPI である。

そのプログラムを受けていくと小説家と脚本家になる事が見えてきたのだが、ある苦悩を抱えてしまったのは、仕事をやめてから小説家になるのか、仕事を継続しながら小説家になるのかだった。

その答えには、就職支援センターの担当者からこう答えた。

「収入がなくなるから、継続しよう」

それで私は、目を覚ました。メンター学生との活動や授業を受けていくうちにその苦悩を直面したと。

話しを戻すが、文章のつづりについて英会話を楽しんだ事や活動で話し合う事も十分に楽しめたとでも言えよう。

また来年もこのプログラムを受けたいと思っている。

④

2025年度の KUPI もそろそろ終わりを迎えますね。

私は今年度の KUPI も楽しかったです♪

メンター学生さんや一般学生さんと沢山お話出来たのが嬉しかったです。

雷や地震等、突然の気候変動や自然災害で心が痛んでしまうといった事もありましたが、それでもメンター学生や、一般学生さんに励まして貰ったお陰で元気が出てきました。

今年も楽しかった KUPI になりました！

また来年も参加したいと思います。

五ヶ月間という短い期間でしたが、本当にありがとうございました。

令和8年2月2日

⑤

KUPI での4年間をふりかえって

私が KUPI に入りたいと思った理由は、父の母校で学びたいと思ったからです。

入学する前は、「大学ってどんな所かな？」と思い、とても楽しみでした。

KUPI でいちばん学んだことは、「声がうるさい」と言われたことをきっかけに、

人の気持ちも考えてみようかな、と思うようになったことです。

その中で、まわりの人のことを少し考えながら行動することが、できるようになりました。

心に残っていることは、同年代の学生さんと話をしたことです。とても楽しかったです。

私は高齢者サービスで働いていて、年上の人と話すことが多いため、

同年代の人と話す時間は有意義でした。

むずかしかったことは、嫌なことがあっても「やめて」と言えなかったことです。

言い返すことができなかつたので、コートを頭からかぶって、耐えました。

KUPI では、先生が勉強を教えてくれたことが楽しかったです。

支援学校や自立訓練では、勉強はほとんどありませんでした。

「どういうことなのかな？」と思ったことは、学生さんが私に分かるように説明してくれて、とても嬉しかったです。

KUPI に入る前と今では、自分に対する考え方が少し変わりました。

今の私は、自分のことが好きになりました。

卒業後にやってみたいことは、若者がどこにいるかを探すことです。

そのために、いろいろな場所に顔を出していきたいです。

KUPI は、私にとって行くのが楽しみな場所でした。

4年間、本当にありがとうございました。

⑥

今年、一番楽しかったことは、アゴラパーティーでした。

みんなでたこ焼きを作ったのが、とても楽しかったです。
いっぱい作って、いっぱい食べました。

ほかにも、楽しいことがたくさんありました。
ひとつはコンテンポラリーダンスです。
リンゴづくりも楽しかったです。自分だけのリンゴができたからです。
今も玄関に飾っています。
新喜劇も楽しかったです。みんなで力を合わせて頑張りました。
階段アートも楽しかったです。みんなの思い出が、たくさんつまっているからです。

いろいろな友達がたくさんいるから、**KUPI**が大好きです。

Jさんは、いつもみんなを笑顔にします。
Pさんは、笑わせてくれます。
Nさんは、仲良くしてくれます。
Lさんは、優しいです。
Mさんは、笑顔がステキです。
Kさんは、英語を上手で、むつかしいことたくさん知っています。

KUPIの友達と先生といろいろな事が出来て楽しかったです。
ありがとうございました。
KUPIが終わったら、みんなと会えなくなるので、とてもさみしいです。
来年も、**KUPI**に来たいです。

⑦

「クピの思い出」

私は**KUPI**が大好きです。**KUPI**を知ったのは2025年の3月終わり、エコールでお世話になった生田先生に去年未完成だった研究ゼミの発表を見せに行った時、神戸大学で学生さんたちと一緒に勉強できる**KUPI**というのがあるよと教えてもらった事がきっかけで**KUPI**の存在を知りました。

私は高槻に住んでいて、神戸大学まで片道1時間半かかりますが、生田先生から話を聞いて絶対に**KUPI**に行きたいと思いました。**KUPI**は入学した時から凄くあたたかい雰囲気の良い所だなと思いました。毎回どの授業も凄く楽しくて楽しくてしかたなかったです。月曜日のオムニバス授業では、毎回いろんな先生が教えてくれました。どの授業も凄く楽しくて、またマニアックな質問にも答えてもらえて嬉しかったです。火曜日の津田先生の授業では一般学生と一緒に共生について学びました。中学部から支援学校に通ってい

たので一般の大学生とあまり話したことがなかったけれど最初の授業ですぐに仲良くなれて嬉しかったです。みんなで大学の広い校内で宝探しをしたり、暗号を一緒に考えたりとても面白かったです。共生についてみんなで話し合ったり、グループのみんなと一緒に写真絵本や紙芝居を作って発表したりしました。グループのメンバーと共生や自分の考え、環境のこと、学校のことなどを話せて凄く充実した時間でした。写真絵本作りは少し難しいところもあったけれどみんなと一緒に作るのはとても楽しかったです。困った時に優しく声をかけてくれて嬉しかったです。2月には完成した写真絵本をみんなに観てもらうことができるとても達成感がありました。木曜日は哲学対話をたくさんしました。回を重ねるごとにお互いの事がわかってくるので、どんどん対話が楽しくなりました。新喜劇は私自身人を笑はせるのが好きなので演じていてとても楽しかったです。

11月に1年半程通っていた事業所を辞めました。新しい事業所を探すまでの間、どこにも属していなかったので KUPI がなかったら家族以外の人と話す機会がしばらくなかったと思います。KUPI があったので本当によかったです。また、自由に使える時間がたくさんあったので途中からは学食にも KUPI のある日は毎回通いました。KUPI の授業で社会科学系図書館や図書館の書庫を見学した時に凄く感動したのでその授業以来 KUPI がある日のたびに社会科学系図書館の書庫にある明治時代の本を読んだりしました。KUPI があったおかげで仕事に通えない時期も充実した日々をすごすことができました。大学は凄く居心地がよかったので、授業以外の時間も多く神戸大学ですごしました。授業で一緒に KUPI 学生やメンター学生、一般学生と帰りのバスでおしゃべりしたりしたのも凄く楽しかったです。今回は NHK の取材が入っていたので最初は緊張するかなと思っていたのですがすぐに慣れました。

高木さん¹たちとおしゃべりするのもとても楽しかったです。完成した番組はいろんな人に観てもらえて、保育園の時お世話になった先生にも観てもらうことができ凄く嬉しかったです。私にとって KUPI はとても楽しい大切な居場所です。2月17日で今年の KUPI が終わってしまうので凄く寂しいですが、また来年も再来年も4年生までずっと参加したいと思います。半年間本当ありがとうございました。

¹ 編者注：NHK のディレクター

5. 4 回目受講生による卒業研究

1) 概要

大学の標準修業年限が 4 年であることから、KUPI においても受講は 4 回で「卒業」することとしている。また、一般的な大学生と同様に、4 回目の受講となる KUPI 学生を対象に、本人の希望や関心に応じて研究や作品制作等に取り組む「卒業研究」という活動を設定している。

KUPI における卒業研究の活動は 2022 年度より実施しており、また昨年度より卒業研究の実施に関しては任意の活動としているが、これまでのところ卒業研究を行わなかった KUPI 学生はいない。本年度も KUPI 開講時に、4 回目の受講生 4 名に「卒業研究を行いたいかどうか」について聞き取りを行ったところ、4 名全員が卒業研究に取り組む意志を示した。4 名は KUPI の活動の前後や予備日などを活用して個別に少しずつ準備を行い、修了式に成果発表を行った。

卒業研究の実施にあたり、KUPI 学生 1 名につきサポーターが 1 名ずつ付いた。なお、サポーターはコーディネーターが担ったほか、研究の内容および KUPI 学生の意向をもとにメンター学生 2 名に依頼し、快諾を得た。

2) 研究内容およびサポーター所感

研究テーマの設定は、まず全員に対してコーディネーターが「どのようなことをやりたいか」について聞き取りを行い、ある程度の方向性が固まったところでサポーターと個別の活動に移行した。以下に、各 KUPI 学生の研究内容およびサポーター所感を記す。

M さん【ひこうき ゆめ しょうらい とびたつ】

まず、そつろんってなんなのか、という話から始まった。そつろんって、なにかわかる？

「わからん。」

そうやんね。そつろんには、「とい」と「ほうほう」がある、という説明を、紙に書いておこなった。まず、そつろんの「とい」っていうのは、4 年間 KUPI に参加してきたいま、さいごになにかかんがえたいこととか、きになってること。なにかない？と問いかけた。

「しょうらいのゆめかな。」

めっちゃええやん、と思った。ただ、ここで切り上げずに、もうすこし、深掘った。

Mくんのしょうらいのゆめってなに？

「わからん。」

ん一、なるほど。あ、そうか、わからんから、そつろんで「とい」たいんやね？

「そうそう。」

お、やっぱりそうか。そうやね。そつろんで、わからんから考えるんやもんね。僕らのやってる研究も、そうやもん。しょうらいのゆめがわからないから、考えたい。めっちゃいい「とい」だと思う。

そしたら、「ほうほう」を決めようか。「ほうほう」っていうのは、どうやって「とい」を考えるか、ということです。わからないことを、どうやってしらべるか。よくあるのは、わからないものを実際に見にいったり、知ってるひとにきいたりします。わからないものに関する写真をとったり、絵をかいたりする「ほうほう」もあるよ。と提案しつつ、どんな「ほうほう」がいい？とたずねてみました。

「ひこうきかな。」

ん？えっと、ひこうき？

「ひこうきやな。」

あ、やっぱり、ひこうきか。ひこうきを、どうしたい？

「ひこうきを動画にとる。」

ん一、なるほど。動画ね。そうか。

ひこうき、すきなん？

「ひこうきすきやで。」

そうか。すきなものは、とりいれたい、と思った。

ひこうきの、どんな動画とりたいん？

「とぶところかな。」

なるほど。とぶところって、こうやって（手を離陸させながら）とびたつところ？

「そうそう。」

それは、いいかもしれない、と思った。まだ具体的にイメージはできないが、「しょうらいのゆめ」というテーマと「ひこうきのとびたつ動画」は、相性がいいと思ったからだ。

このような流れで、「テーマ」と、ひとまずの「ほうほう」のようなものが決まった。

そこから日程をあわせ、バス停で待ち合わせて、一緒に神戸空港まで、飛行機の動画を取りに行った。曇り空ではあったが、飛行機は通常運行していた。飛行場を見渡せる屋上デッキにて、飛行機の離陸を待った。待ちながら、卒論の内容について相談してみる。

Mくんはさ、ひこうきの動画とってから、どうしたい？

「みんなにみてもらう。」

おお、いいね。みんなって、KUPIのみんな？

「うん。」

うんうん。いいと思う。

それで、「しょうらいのゆめ」については、どうしよう。どうやってかんがえる？

「みんなにきいたらええんちゃう。」

おおー。

そうやな。みんなに、きいたらいいよね。

つながった。パチッと、そつろんの方針が組みあがった。

飛行機から搭乗コースが外れてゆく。Mくんが、自分のスマートフォンを構える。確認するとカメラモードになっていたのので、動画モードに切り替える。飛行機が滑走路を走り出す。離陸まであと、

「3、2、1、、うおーいけいけいけー。」

カウントと共に、バンザイをするMくん。

その後も、何度か失敗しつつ、ようやくうまく離陸をとれたときには、雲間から光が差し、明るみに向かって飛行機がとんで行った。本当に。神がかっていると、感じた。

また空港からの帰り、少し小雨がふって、止んだと思えば、空には虹がかかっていたのである。やはり神がかっていた。本当です。

その後、M さんと相談して、アンケートをつくって、みんなに協力してもらうことになった。M さんの直筆で、「むかしのゆめ」と「そのりゆう」、そして「いまのゆめ」と「そのりゆう」、4 項目のアンケートが出来上がった。(M さんの絵も添えた。)

KUPI のなかで、M さんのとったひこうきの動画をみてもらい、そしてアンケートに答えてもらった。KUPI 学生だけでなく、メンター学生、先生、たまたまそこに居合わせた学生など、たくさんの回答をもらった。

それらをながめる。漢字も多いので、読み上げながら、説明を加える。M さんの、まだ知らない世界の話も多い。伝えきることの、限界も感じながら、それでも、なるべく、かみ砕いて、伝えようと試みました。そして、ひとつひとつの回答に対する、M さんのレスポンスを、ふせんに直筆でかいてもらいました。M さんは、ときにことばで、ときに絵で、かきました。

また、一緒に、みんなのゆめのりゆうを、いくつかの共通点ごとに分類しました。このあたりは、とても難しかったです。どこまでが、M さんの意思で、どこからが自分の意思なのか。介入する以上、それはどうしようもない葛藤なのかもしれません。

さいごに、分類の結果、もっともゆめのりゆうとして多かった「あこがれ」と「すきなもの・こと」を M さんに考えてもらいました。それぞれ、紙にかいてもらった結果、ところどころ、文字の混ざった絵が出来上がりました。

発表では、とびたつひこうきの動画をはじめ、アンケートの一連の流れをスライドにしつつ、みなさんからいただいたアンケートと、M さんによるレスポンスのふせんを張り出しました。ふせんは、それぞれ、アンケートに答えて下さった方々に持ち帰っていただきました。

読み取ることが、むずかしい表現でも、見て、感じたり、想像することができます。

そうした、M さんの独自の表現を、どこまで、読み取り可能なものに置き換えるか、あるいは、置き換えないか。そこが、葛藤の核でした。

Nさん【火曜日の KUPI で1年目から4年目をふりかえって】

Nさんの卒業論文は『火曜日の KUPI で1年目から4年目をふりかえって』というタイトルで、Nさんが KUPI にはじめて参加した2022年度から今年度（2025年度）までの火曜日プログラムで取り組んだことについて、各年度で制作した作品の紹介をしながら振り返った。2022年度の「曲づくり」で制作し、今や KUPI の代表作となっている『私の職場』を皮切りに、SDGsがテーマだった2023年度に制作した演劇『住み続けるまちづくりを～2050年三宮編・姫路編～』、「いのちをつなぐ」というテーマだった2024年度に制作した「KUPIを未来につなぎたい！」という想いを込めた演劇、そして、「共生」をテーマにした写真絵本作りに挑戦した今年度制作した『クマとわたし』の4つの作品について、制作した当時の気持ちや作品に込めた想いを思い出したり、改めて作品を見た今の自分について考えたりしながら、丁寧に言葉を紡いでいった。

内容を考える中で、Nさんが何度も話していたのが、特に演劇づくりに取り組んだ2023年度、2024年度の活動で、他の KUPI 学生やメンター学生や一般学生をはじめ、たくさんの人に協力してもらって演劇をつくり上げることができた、という話だった。また、2024年度の演劇のテーマになった「KUPIを未来につなぎたい！」という気持ちは今も変わらず抱いており、Nさんが卒業してからも KUPI という活動が未来に繋がってほしいこと、またNさん自身も、卒業してからも KUPI と関わり続けたいことを話していたのが印象的だった。

これから KUPI に参加する未来の KUPI 学生に向けて、Nさんは「メンターさんたちと一緒に、私が学んだことや楽しかったことを同じように学んでほしい」と語ってくれた。卒業論文に取り組むことを通して、Nさんがこれまで KUPI で歩んで来た道のりを振り返ると同時に、これからの自分や KUPI について考える時間になったのではないかと思う。そして、共同執筆者として、Nさんが卒業論文に込めた、学校を卒業してもいろいろな人と関わり、たくさんのことを学ぶことができる場所として、KUPI がこれからも続いて欲しいという想いを、たくさんの人が未来に繋いでくれることを願っている。

Pさん【私の4年間～KUPIと社会で役割をもつということ～】

Pさんは、その独特な感性と巧みな話術から、KUPI 学生の他にも司会者や落語家、詩人など、いくつもの顔を併せ持つ。そこで卒業研究では、KUPI 内外で経験した様々な出来事について振り返り、まとめることにした。

2月の発表会を見据えて内容を練るにあたり、まずは印象的な出来事や卒業研究発表会で伝えたいことなどを、思いつくままに挙げてもらった。すると、KUPI を受講する中で経験した衝撃的な出来事や、イベントの司会で日本各地を訪れたり、様々な人と出会った

りしたこと、落語家としての体験などが次々と語られた。一方で、それらの体験から得た気づきや活動への思いなどについては、おそらく P さん自身は多くのことを感じてはいるものの、すぐには言葉が出ない様子であった。そこで、いくつかの出来事をピックアップして、それらひとつひとつの具体的なエピソードや当時考えていたことなどをじっくり掘り下げていくことで、言語化を促した。P さんの語りをもとに、卒業研究発表では「KUPI での経験と気づき」「司会や落語など大学外での活動の紹介」を軸に内容を構成することとした。

年明け以降の P さんは体調を崩して KUPI はおろか仕事にも行くことができない日々が続いた。KUPI に参加できないことや、卒業研究が進められないことに対する不安から、体だけでなく心も元気がなくなっているとのことであった。そこで卒業研究に関しては、保護者の方のご協力のもとオンライン対応や「宿題」を出すことで自宅でも研究に取り組める環境を構築し、KUPI および社会との断絶の解消を図った。P さん・サポーターともにコロナ禍を経てオンラインでの活動への抵抗感が無くなっていたことが功を奏したと言えるだろう。幸いにもオンライン対応を始めた後は比較的早い段階で体調が回復して KUPI にも仕事にも復帰でき、P さんにとって KUPI が「元気の源」であることを改めて感じた。

KUPI 復帰後も自宅で研究に取り組むスタイルは継続した。自宅でスライド作成を進め時折進捗を共有してくれる姿や、本番直前まで発表原稿を手直しする姿は、一般的な大学 4 年生と何ら変わりはない。また、発表会ではさすが喋りのプロと言うべきか、広い部屋と聴衆の視線、大小様々な撮影カメラにも臆することなく、堂々と発表をやり切った。その姿はとても眩しく、4 年間で培ってきた揺るぎない自信を聴衆に感じさせたのではないだろうか。自身の感性を大切に育み、障害を強みとして捉え、「最近自分のことが好きになった」とはにかむ P さんが、これから歩む長い人生の中で、逆境はその大きな声でぜんぶ笑い飛ばして、できれば良い言葉だけをたくさん浴びて生きていって欲しいと切に願う。

O さん【嵐のステキなところ】

KUPI 関係者の間で、O さんがアイドルグループ「嵐」の熱烈なファンであることを知らぬ者はいない。卒業研究を始めた当初は、KUPI を受講した 4 年間の中で印象に残っている授業についてまとめる方針であったが、1 ヶ月ほど経った頃に、自らしたためた「嵐について研究したい」という内容の手紙と共に、自宅で作成した研究内容の案をコーディネーターに提示してくれた。すぐさま方針を転換し、卒業研究では「なぜ自分は嵐が好きなのか」について考察した上で、KUPI 学生およびメンター学生、一般学生を対象として、

嵐の知名度や好きな楽曲等に関するアンケート調査を実施することにした。アンケート調査の回答はOさんが自ら手作業で集計し、卒業研究発表会にて結果を発表した。

また、Oさんはパソコンや生成AIの利用に慣れていることから、それらテクノロジーの力も借りながら研究を進めた。終盤は保護者の方にもご協力いただきながら自宅でも研究に取り組み、発表会では聴衆から「おお」とどよめきが漏れるほどの力作に仕上がった。さらに、自宅でコツコツ練習を重ねてきたカリンバの演奏もうまくいき、発表会終了後のOさんはなんだか誇らしげな様子であった。

研究のサポートをするにあたり、Oさんの「嵐が好き」「大野くんが好き」という気持ちは大切にしつつ、もう一步踏み込んで「なぜ好きなのか」「嵐の歌を聴くとどういう気持ちになるか」というような問いかけをすることで、普段は実際にあった出来事を伝えてくれることの多いOさんが、自身の内面に意識を向けられるようなアプローチを試みた。やや抽象的な問いを提示してしまうことも多々あったが、木曜日プログラムで取り組んだ哲学対話での経験が生きていたからか、どのような問いに対してもじっくりと考える姿が印象的であった。また、自分のお気に入りの人以外の人にはあまり興味を示さないOさんが、アンケートの集計をしながら「私の大好きな嵐のことをみんなも知っているのが嬉しい」と笑っていたのが忘れられない。彼女の表情や言葉から溢れてくる嵐への想いをひとつずつ集めて並べる作業をする中で、「推し」の存在がいかにかに人を支え、人生を豊かにするかということを改めて実感した。

個人的には初恋の人が櫻井くんだったこともあり、ただのオタク同士として嵐について語り合えたことも、とても楽しい思い出となった。Oさんにはぜひ、今回の卒業研究の経験を胸に、これからも臆することなく堂々と「オタ活」に邁進して行ってほしいと思う。

「嵐が好き」という、文字にすればたった4文字に過ぎないシンプルで純粋な気持ちこそが、これからの人生でどんなにつらいことが待ち受けていようとも、必ずOさんの生きる糧になってくれるはずである。

6. プログラムから何を学んだか

1) 授業担当教員

授業担当者の感想

津田英二

火曜日の授業を担当している。この授業は、神戸大学国際人間科学部 3 年生向けの「社会教育課題研究（障害共生教育論）」との合同授業である。

初年度（2019 年度）は「ライフストーリーを語りあう」というテーマを掲げ、2020 年度はコロナ禍の最中ということもあり、イギリスのピープルファーストとのオンライン交流をテーマに掲げた。2021 年度から現在の形式に移行し、今年度で 4 年目となった。2021 年度は「自己表現」、2022 年度は「作詞作曲して歌ってMVを制作する」、2023 年度は「SDGs」、2024 年度は「いのちをつなぐ」というテーマを掲げ、その流れを受けて今年度は「共生とはなにか」を追究することとした。

このテーマを掲げたのには次のような背景がある。第一に、本授業が「共に学ぶ」とはどういうことかという問いをもっていることである。第二に、一昨年度の「SDGs」をテーマとした授業において、社会現象と自分の生活実感とを重ね合わせることのできるテーマが深い学びにつながると気づいたことである。そして第三に、昨年度「いのちをつなぐ」をテーマとした授業の中で、優生思想や出生前診断をめぐる「深刻な問い」が緩やかな優しい関係性の中で消化されていく様子を体験したことである。

思えば、初年度は KUPI 学生と一般学生の間にある差異を強調し、「異質な他者から学ぶ」という意識を強くもった授業設定から始まった。その授業の中で、両者の同世代としての共通性が学びの重要な契機になることを感じ、また非言語コミュニケーションの機会を意図的につくっていくことの重要性を感じ、「表現」を媒介とした「共に学ぶ」実践へと移行していった。2021 年度と 2022 年度は、KUPI 学生の表現欲求に即した授業展開となり、質にこだわった作品も生まれた。しかし、単に「表現」というだけでは、学びの焦点が不明確になっていくようにも感じ、特に自分と社会との関係を意識しながら学ぶことができる環境をつくるために、2023 年度からは授業全体を通した「テーマ」を設定することにした。

今年度取り組んだ「共生」も、さまざまな切り口がありえるし、抽象的でもあって、扱うのが難しいテーマである。多くの知的障害のある人たちは「共生」という言葉に触れることは少ないだろうし、他方ほとんどの一般学生はこの言葉を理念的にしか使うことがないだろう。しかし、結果的にこの差異が、生き生きとした授業の原動力になったのではないかとも思う。KUPI 学生は自分の身の回りのことに引きつけながら、ひとつの概念をゆっくりと消化していき、他方、一般学生は KUPI 学生の様子をみながら理念型ではない「共生」の語り方を学んでいったのではないだろうか。

前半は、「共生できていない私たち」を探してパワーポイント資料を作成し、発表するという課題に取り組んだ。この数週間は、考えるためのウォーミングアップと、参加者全

員の関係形成という2つの目的をもって臨んだ。後半は、写真撮影を趣味としている KUPI 学生（今年度は受講していない）に、写真撮影の魅力や技術を伝えてもらいながら、「共生」をテーマにした「写真絵本づくり」に挑戦してもらった。どのようなテーマで、どのような物語をつくり、どのような舞台を創って、どのような登場人物（動物）を描くかということを考える中で、KUPI 学生と一般学生との間に協働的な関係が形成されていった。写真好きの KUPI 学生の活躍の場を提供することを考えて「写真絵本づくり」を表現方法として提案したが、「写真絵本」は自由度が高く、表現の工夫のバリエーションも豊富な上に、できあがりの見栄えもよく、結果的に良い選択だったと思った。ここにも私にとっての有意義な発見であった。

授業最終回は例年通り、グループごとに制作した作品の公開発表会だった。自信をもって発表をした学生たちの生き生きとした言葉に、それぞれが向かい合った学びが存分に表れていた。

哲学「わたしのひみつ道具 ～じぶんに贈る道具～」

稲原 美苗

KUPI のプログラムの一環として、「わたしのひみつ道具 ～じぶんに贈る道具～」をテーマに、2025 年 12 月 1 日および 12 月 8 日の全 2 回（各回 90 分）で哲学の授業を実施した。KUPI 学生はメンター学生およびスタッフとともに、自分自身の生活や気持ちに目を向けながら、「もし自分のための道具があったら」という発想を起点に、道具の構想、設計、制作、発表までを経験した。

この授業では、ドラえものの「ひみつ道具」という親しみやすいモチーフを用いることで、哲学的な問いや自己理解のプロセスを、抽象的な議論ではなく、具体的で想像しやすい活動として提示した。KUPI 学生のなかに、「ドラえもん博士」と呼ばれるほど、ドラえもののひみつ道具に詳しい人もいた。ここで重要なのは、KUPI 学生が「正しく答える」ことを求められるのではなく、「自分にとって意味のあるもの」を自由に考え、表現できる場をつくることを重視した点である。

第 1 回の授業では、「もし、こんな道具があったら？」という問いを中心に、ひみつ道具の構想と設計に取り組んだ。冒頭ではアイスブレイクとして、KUPI 学生が好きなドラえもんの道具について語り合い、道具がどのような場面で使われるのかを共有した。この導入により、参加者のみなさんは自然な形で自分の日常や感情を振り返ることができ、活動全体への参加意欲が高まった。

続く時間では、ワークシートや対話を通して、「困ったとき」や「こうだったらいいなと思う場面」について考えたが、実際には「困りごと」を深く掘り下げる対話よりも、「こんな道具があったら楽しい」「あったらうれしい」といった願望的な発想が多く語られた。この点は、問題を言語化すること以上に、それぞれの肯定的な未来像を描くことが、

KUPI 学生にとって表現しやすく、安心できる入口になっていたことを示している。

特に印象的であったのは、メンター学生と話し合いながら、彼らがどのような道具を作るのかを少しずつ設計していくプロセスだった。漠然としたイメージが、対話を重ねることで具体的な形や機能を持ち、「自分の道具」として輪郭を帯びていく様子が見られた。こうした設計の時間は、KUPI 学生が自分の考えを整理し、他者に伝えられる形にしていこうと、非常に重要な意味を持っていた。

設計図が完成した段階では、p4c（ハワイで実践されている子どものための哲学）の実践を意識し、全員で輪になって「次週、こんな道具を作ります」と宣言する時間を設けた。この場を共有したことで、それぞれの道具の意図や使い方が参加者全体にとって分かりやすくなり、相互理解が深まった。また、自分の考えを場に差し出し、他者から受け止められる経験は、参加者にとって大きな達成感と安心感をもたらしていた。

第 2 回の授業では、制作活動を中心に進めた。前回の設計図をもとに、色や形、素材を工夫しながら、各自のひみつ道具を形にしていった。制作に十分な時間を確保したことで、参加者は集中して取り組むことができ、試行錯誤そのものを楽しむ姿が多く見られた。

最後の約 20 分間には、ひみつ道具の作品発表会を行った。完成した作品を手にしながらか発表する時間は終始和やかで、笑顔や笑い声があふれるものとなった。他者の作品に対する関心や驚きが共有され、活動全体の締めくくりとして非常に充実した時間となった。

この授業の実施にあたっては、スタッフの黒崎さん、橋澤さん、そしてメンター学生の皆さんに、事前準備や材料集めなど多大な協力をいただいた。結果としてエクストラワークをお願いする形となったが、当日は KUPI 学生に寄り添いながら、終始温かい雰囲気場で支えていただいた。関係者全員の笑顔が、このプログラムの質を大きく高めていたといえる。ありがとうございました。

今年度の KUPI の授業は、「困りごと」を課題として扱うのではなく、「こんなものがあつたらいいな」という想像力を入口とすることで、KUPI 学生一人一人が安心して自己表現できる場をつくり出した点に大きな意義があった。対話による設計、輪になっての宣言、制作と発表へとつながる一連のプロセスは、KUPI の今後の事業展開においても有効な実践モデルになると考えられる。

KUPI での気づき — 音楽に主体的に関わるしかけ

大田美佐子

1. 担当授業：音楽文化史の世界 — 歌が表現しているもの、歌で表現できるものを想像する
2. テーマ：歌の中の世界を想像して体験してみる。
3. 授業の内容と受講生へのメッセージ（シラバス）：「音楽文化史」は、音楽と音楽以外が共に歩んできた歴史を研究します。たとえば「歌」。歌は一人一人の「個人的な体験」と結びつくことも、みんなが共に体験した「時代」と強く結びつくこともあります。歌は、

音と言葉が結びついて、わたしたちの「想像力」に働きかけ、それぞれの人生や社会にも大きな影響を与えてくれます。「音」を通して「想像力」を働かせることは、皆さん自身の人生を豊かにすることにつながりますね。皆さんは、どんな歌が好きですか？なぜ、その歌が好きなのですか？今回は、皆さんの想像力を働かせて、歌のなかの世界と一緒に旅してみましょう。できれば、皆さんと一緒に歌も歌って、楽しみたいと思います。

11月27日の歌 — 「花は咲く」（「手のひらを太陽に」「さとうきび畑のうた」）

12月25日の歌 — クリスマスの歌

4. 授業の実際と授業を通して得た気づき：

昨年から引き続き、「歌」を中心に2回の授業を展開している。

KUPI「学ぶ楽しみ」を志向する授業で重要なことは、「複数」の人々で授業が運営されている点である。KUPI学生、KUPI学生のメンターとしての学生、KUPIのプログラムを運営する人々、そして教員。KUPI学生一人一人が抱えている状況や障害の程度は一人一人異なるが、KUPIに関わる複数の人々の相互の理解が深まると、KUPI学生の個性が自然なかたちで創造的に発揮される。その際、教員の立ち位置が「教える人」ではなく、「共に感じ考える人」として、この輪の中に存在することがもっとも大切な点だと感じている。

その気づきによって、実際の授業では、「知識」を「共有」して「共に」感じ「共に」考えることを目標とした。具体的には、「歌」を構成する言葉、響きなどを一人一人自由に感じ、表現してもらい、他の人の感じ方を共有し、一人一人が異なる感じ方をして歌っても、「共に歌う」ことが可能であること、必ずしも揃わなくても、一人でもみんなで歌っても、歌を歌うことをとことん楽しんでもらう。

そのための教材選び、曲選びは重要である。担当回初回では、誰もが様々な場所で聞き覚えがあり、歌ったこともある震災復興応援ソング『花は咲く』を取り上げた。担当回（2回）の初回では、まず、好きな歌をそれぞれに紙に書いて発表してもらい、それぞれの拘りと歌への愛着を語ってもらう。その後、震災応援ソング『花は咲く』の歌詞を手書きで書いたものを配布し、各人に一節ずつ読んでもらった。この時、上手に読めなくても読めなくても構わない。その歌に「関心」を持ってもらう、「知りたい」と思ってもらうことが重要である。

この歌では、冒頭から16小節のAの部分で「現在から昔を回顧する」。次に4小節ずつ繰り返される「誰かの歌が聞こえる、誰かを励ましている、誰かの笑顔が見える、悲しみの向こう側に」の部分、自分の内向きな思いから、周りの思いに視点が広がり、共感性が芽生える。そして「花は咲く」と続くサビの部分では、「未来」が語られる。

このように『花は咲く』という歌は、過去と現在と未来にどんどん視点が開いていく物語である。しかしながら大切なのは「答え」があることではなく、自由に感じてもらうことである。そのために、「どう思う？どう感じた？」という問いに多くの時間を割いた。

そして、音が実際に、歌詞に描かれた過去と現在と未来をどのように象徴しているのかを感じながら、歌ってもらえるように工夫した。音楽を実際に奏でて例示することが必要である。その時もあくまで、「こう感じることもできるかもね」という問いかけで、受講生一人一人の主体性を尊重するように進めた。

2 回目の授業は、クリスマスの歌、オールリクエスト。普段教材として選ばれた歌は、必ずしも個人がこだわりを持つ歌ではない。そこで、クリスマスには季節をイメージする有名な曲が多いことから、受講生全員に何が歌いたいのか、どんなクリスマス・ソングが好きかを尋ねて、教員があらかじめ伴奏を準備した。バラエティに富んだ結果で、「きよしこの夜」「ジングル・ベル」「あわてんぼうのサンタクロース」は老若男女が楽しめるスタンダードなクリスマス・ソング。「クリスマス・イヴ」「クリスマス・キャロルの頃には」などのトレンドィー・ドラマの主題歌から今に歌い継がれている歌、そして英語の「ハッピー・クリスマス(War is Over)」と「ラスト・クリスマス」の全7曲。どの曲も、はじめにみんなで歌詞を読んで、意味を確認してから、ピアノでメロディーの音を確認して、みんなで歌った。授業後のアンケートでは、受講生の充実度がとても高く、「クリスマスの歌をたくさん歌って楽しかった！」という文字が踊り、教員も安堵した。

今年度の KUPI での授業を通して、あらためて感じたことは、音楽に主体的に向き合うことの重要性である。そこには「楽しい」と感じさせる素材が必要である。KUPI 学生は、一般学生と比較しても、自分で表現することにこだわりを持っている受講生が多い。ある KUPI 学生は「英語の歌」に強いこだわりを持っていて、英語で歌う二曲についてはリードして楽しそうに歌っていた。英語が歌えない人も、手拍子やハミング、ラララで参加すればいい。大切なことは、主体的に表現に向き合うこと、主体的に参加すること、主体的に感じることであり、それを通してお互いの主体性を認め合うことである。受講生たちの輝くような笑顔に音楽の魔法を感じるとともに、来年度もまた KUPI 学生が音楽に主体的に関わる時間が過ごせるように計画したいと考えている。

描（えが）くことの再発見と期待

岸本吉弘

今回、初めて KUPI での演習授業を 1 回（10 月 30 日）担当した。開講前に幾度か打ち合わせを持ち、授業方法や実現可能性、素材選びなどを検討した。結果、私が国際人間科学部の 1 年生（主に発達コミュニティ学科）を対象に開講している担当授業「創造の発想とプロセス A」の内容をアレンジしたタイプの美術演習とした。そこでは敢えて視覚を閉ざした状態での描画行為（目隠しをした状態で手を使い描く）を軸としながら展開し、「描く行為」の視覚的な計画性よりも、直に手で絵具を使い「触覚的」「感覚的」に表現を創発するものである。人は「描く行為」にイメージの再現性を主とした一定の目標を設定しがちであるが、むしろそれを崩すことに意義を見出すことにより、イメージの「再

現」ではなく、感覚的な「生成」を目的としているのである。

そうした前提のもと、今回の授業テーマは「本能（心）で絵を描こう！」とした。開催場所はA137教室において卓上で実践とし、受講生1人につき大判画用紙（全紙サイズ）4枚の制作を決めた。また今回の授業内容として次の記載をした、《人は古来より絵を描いてきました。旧石器時代より暗がりの洞窟の中で手探りで「手」を使い描いていました。できれば皆さんと一緒にその頃に戻りたく思います。大きな画用紙を使い表現してもらいます。》とし、描くことの本能性を取り戻すという期待値をおいた。また、授業のサブタイトルを「Don't Think! Feel!!（考えるな！感じよう!!）」とした。

先ず最初の3枚（全紙サイズ）は目隠しをした状態により、ラジカセにより一定の音源（音楽※）を各10分程度3曲を聴かせ、それを感覚的な取っ掛かりとして表現する方向とした。何も見えない状態での描画行為は、不安もあり、なかなか手も動かないのも実際である。そこで一定の音楽3種（クラシックから現代音楽まで）を選び、CD音源より再生することにより、それを聞きながらの描画行為を実践させた。

最後の4枚目は更に大型サイズ（全紙2枚版）をやや時間も長く掛け制作させた、今回は音楽再生は行わず、代わりにイメージ（自分自身の内面や感情をモチーフとした）を個々の内面に想起させることで、最終的には目隠しを外し、更に描画を発展させた。

結果（気づき）>

授業担当者の感想としては、音源再生の3枚については、案外、素直に音楽に合わせた身体の動きから展開される描画行為が実践できたものと認識している。そこには一般学生に見られる「戸惑い」のようなものは余り見られず、偶発性を誘いながらもランダムにオートマティックに描き出すという実直で良き雰囲気であった。次に最後の「自分自身のイメージ」の大作については、画用紙のスケールアップに伴い、描く行為（身体性）にも変化が生じた。それは手が隅まで届かないという身体尺との関連により、それをどう捉え表現に繋げていくか？という課題でもある。更に目隠しを外し、視覚化することも最終局面において大きな展開である。

本授業の受講者の特徴は、創作における「迷い」や「停滞」が少ないとも認識できた。迷いや停滞は順調な進行を妨げるがゆえに、創作においては一定の展開や転換をも促進させるという長所がある。また、そうした不自由さや非日常性のなかに一つの契機を発見し、意識と無意識を往還しながらも、それが一定のイメージ形成や表現の生成にも繋がるのであり、それこそが描画行為の拡張であり、また本義でもあろう。

本授業が描くことへの先入観と期待、それらを個のレベルで解体し、更には再構築していくという表現契機となれば、何より幸いである。

今後の発展ポイントは対話や鑑賞などの自己認識的態度や協調的な態度や実践を、如何に授業内に効果的に参入できるかという点である。これが本授業の今回の反省点でもあり、

今後の課題でもある。

※具体的なイメージ誘発に繋がらない曲目（歌詞がない、抒情性が低いなど）を選定した。

身近な昆虫“スズメバチ”の生態と蜂の子を食べる文化

佐賀達矢

スズメバチ類は現代では恐怖の対象とされる一方、伝統的には食資源として利用されてきた歴史がある。都市化の進展に伴い、スズメバチ属やアシナガバチ属は生態系サービス的主要因となっており(Lyytimäki et al. 2008)、都市住民を対象とした調査では、スズメバチ属の蜂は野生動物で最も嫌われ、自宅近くでの共存を望む住民はわずか 6%である(Hosaka et al. 2017)。神戸市における駆除要請記録の分析では、特に郊外ニュータウンで駆除依頼が集中していた(Saga et al. 2025)。

しかし、こうした否定的認識は必ずしも普遍的なものではない。日本では古くからスズメバチ類は広く食され、大正～昭和時代には兵庫県内、大 I・北河内でも食されていた(三宅 1919; 日本の食生活全集 大阪編集委員会 編, 1991; 松浦, 2002)。現在でも中部日本の山間地域では、農作物害虫の捕食者としてスズメバチ類を認識し、採集して食べる伝統的生態学的知識が発達している(Payne & Evans 2017)。これらはヒトと蜂の長い付き合いの中から生まれてきた共存の文化である。ただし、こうした共存文化を現代に取り入れることは容易ではない。高校生対象の昆虫食教育研究では、昆虫食の文化的・歴史的講義と試食によっておいしいから食べられてきたという社会・文化的理解が発達したが、昆虫食の伝統がある地域でもすぐには受容されず、実践的経験とともに教育が必要であることが示された(佐賀ら 2022)。また、昆虫の見た目や味を変えても一時的に嫌悪感は軽減するものの、昆虫食全般への受容には広がらないことも明らかになった(Saga 2025)。

重要なのは、スズメバチ・アシナガバチがどのような生き物なのか、そして我々の食文化がどのように形成されてきたのかを知ることである。そこで本講義では、スズメバチの生態学的役割と伝統的ハチの子文化の両面から理解を深めることを目的とした。

講義前半では、スズメバチの基本生態を解説した。ハチ目全体では真社会性を示す種は少数派であり、スズメバチ亜科の巣は春から初冬までの単年性である。成虫の腰部は極端に細く固形物を通さないため、幼虫が消化器官として機能し、成虫は餌集めを担うという分業システムを解説した。続いて、DNA メタバーコーディングによる食性研究を紹介した。シダクロスズメバチの腸内容物分析では三百種を超える餌生物が検出され、昆虫だけでなく鳥類、哺乳類、両生類、爬虫類、魚類まで含む広範な捕食が示された (Saga & Fujioka 2025)。オオスズメバチでは、餌種組成と幼虫のアミノ酸組成に有意な関連が認められ、愛好家の夏の蜂はまずいという経験則と生態学的知見の対応について紹介した (佐賀ら 未発表)。講義中盤では生きたスズメバチを観察した。ほぼ全受講生が危険という認識を、

もちながら実物のスズメバチの観察は初めてであり、針を持たないオスバチを手に乗せる受講生もいた。

講義後半の文化的側面の解説では、岐阜県東濃地域のシダクロスズメバチ飼育文化を取り上げた。飼育者への調査では、多くが野生下での脊椎動物捕食を認知しており、観察による在来知識の蓄積が確認された。蜂の子は秋の味覚として高値で取引され、巣の採集自体も楽しみとされることも紹介した。比較事例として、南部アフリカのモパニムシやラオスのカメムシ類など、世界各地の昆虫食を紹介した。いずれも単なる栄養摂取ではなく風味の追求を伴い、食材特性を生かし不要なものを除く技術が蓄積されていることを紹介した。

講義では、昆虫を食べることが生態知識、採集・飼育技術、環境理解、調理技術、経済的・社会文化的・時間的条件を含む複合的営みであることを強調した。蜂の子食は、大変だけど、それでも食べたいものであり、自然との関わり、技術の伝承、季節感の体験など、多層的な価値をもつという視点を提示した。

講義者としては、DNA解析という最新技術と地域の経験知を組み合わせた研究アプローチが受講生にどう受け止められたか関心がある。昆虫食が風味の追求や社会的交流を含む文化的営みであるという視点は、食の効率化が進む現代において再考の余地があるように思われる。実物観察については、都市化が進む中で生き物との直接的な接触体験が稀少化していることを改めて認識した。恐怖の対象であったスズメバチを間近で観察することで、受講生の認識に何らかの変化があったとすれば意義があったと考える。

引用文献

- Hosaka, T., Sugimoto, K., & Numata, S. (2017). Effects of childhood experience with nature on tolerance of urban residents toward hornets and wild boars in Japan. *PLoS ONE*, 12(4), e0175243.
- Lyytimäki, J., Petersen, L. K., Normander, B., & Bezák, P. (2008). Nature as a nuisance? Ecosystem services and disservices to urban lifestyle. *Environmental Sciences*, 5(3), 161-172.
- 松浦誠 (2002). スズメバチを食べる —昆虫食文化を訪ねて. 北海道大学図書刊行会, 332 pp.
- 三宅恒方 (1919). 食用及薬用昆虫に関する調査. 農事試験場特別報告, 30: 1-203.
- 日本の食生活全集 大阪編集委員会 編 (1991). 聞き書・日本の食生活全集 27, 392 pp. 農村漁村文化協会.
- Payne, C. L. R., & Evans, J. D. (2017). Nested houses: Domestication dynamics of human-wasp relations in contemporary rural Japan. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, 13, 13.
- Saga, T. (2025). Group cooking sessions with crickets: Effects on high school students' acceptance of entomophagy. *Journal of Insects as Food and Feed*, Advanced

Online Publication, 1-10.

Saga, T., & Fujioka, H. (2025). Unraveling the Dietary Ecology and Traditional Entomophagy of *Vespula shidai* in Central Japan: Insights from DNA Metabarcoding and Local Practices, *Journal of Insects as Food and Feed*, 11(12): 2097-2115.

Saga, T., Nakata, T., & Uchiyama, Y. (2025). Spatial patterns of ecosystem disservices across urban-rural gradients: Municipal wasp extermination data from Kobe, Japan. *Urban Ecosystems*, 28, 180.

佐賀達矢, 野中健一, Van Itterbeeck Joost (2022). 高校生の昆虫食に対する意識と試食を伴う講義の効果. *E-journal GEO*, 17(2), 350-362.

「コンテンポラリーダンス体験 ～彫刻みたいに、創ろう、踊ろう～」

関典子

2025年10月20日、KUPIの授業を担当させていただきました。題して「コンテンポラリーダンス体験 ～彫刻みたいに、創ろう、踊ろう～」。シラバスには以下のように書きました。

【授業の内容】——コンテンポラリーダンスは、人それぞれの個性を大切にする身体表現です。リラックスした雰囲気の中、アタマとココロとカラダをやわらかくして、踊ってみませんか？今回は、「彫刻」をテーマにして、創ったり、踊ったり、見合ったり、話し合ったりしてみましょ。ドキドキするひと時を共有できたら嬉しいです。

【みなさんへのメッセージ】——「ダンス?!」と、ちょっとためられるかもしれませんがね？あるいは、楽しみ！と、思っただけでも？ダンス経験は必要ありません。動きやすい服装で、リラックスして、ご参加ください。楽しみにしています。自分自身や仲間たちの新たな魅力を、発見することができますように。

KUPIの授業はここ数年継続して担当しましたが、メインテーマはすべて「コンテンポラリーダンス体験」、副題を「名前でも踊ろう」(2022)、「光と踊ろう」(2023)、「名画を踊ろう」(2024)、そして「彫刻みたいに、創ろう、踊ろう」(2025)として、コンテンポラリーダンスの創作を通して、普段とは異なる身体表現や身体感覚を味わい、自分や他人の個性を再発見していただくことを目指しました。

上記のような目標のもと準備し臨みましたが、当日は、参加者の皆様の反応や様子をしっかり観察して進めて行くことを心掛けました。まずは、2人組でのストレッチやマッサージなどゆったりとしたウォーミングアップを通してココロとカラダをほぐしてから、ゲーム感覚の即興を行いました。2人組で行う「人形遊び／人間彫刻」です。一人が人形あるいは素材になり、もう一人が彫刻家になって、相手を造形していきます。照れくさかったりくすぐったかったり、笑いの絶えない和やかな雰囲気の中、それぞれのこだわりも見られました。最後は、同じく2人組で、よりダンスらしい取組を行いました。先ほどと同様に相手を造形するポーズを3回行い、4回目には彫刻家の方がフリーズして、すりぬけた相手に彫刻される、それを交互に実践する試みです。どんな風に抜け落ちるのか、質

感や高低差を工夫していくと、音楽の効果も相まって、非常に見応えのあるダンスが誕生しました。 受講者からは以下のような感想をいただき、コンテンポラリーダンスの面白さ、新しい感覚を味わっていただけたようです。

- 「コンテンポラリーダンスで、普段はしない動きができて面白かったです」
- 「人を動かしたり、人に動かしてもらったりするのは初めてで、最初は少し緊張したけれど、とても楽しかったです。ポーズがつながっていくのが良かったです」
- 「持ち上げられた時に、空を飛んでいる感じがした」
- 「動かし方のクセが、良い意味で一人一人違って面白かった」
- 「人に動かされるのは初めてで、最初くすぐったかったけど、自分一人ではやらない動きもできて面白かった」
- 「動かす側の時は力が強すぎないかな～とドキドキしたけれど上手くいって良かった」
- 「お気に入りのポーズを崩されたら、激怒しそうになった」

授業の様子は NHK でも一部放送され、知人からも「見ましたよ！神戸大学の KUPI、とても意義ある取り組みですね」との連絡をいただき、KUPI に対する注目の高さ、意義深さを再認識しました。貴重な機会をいただき、本当に有難うございました。これからもますますのご発展を、心よりお祈り申し上げます。

2) 一般学生

①

今回の授業に参加する前、正直なところ私は授業の様子を具体的に想像できておらず、知的障害のある方とどのように関わり、どのように学びが進むのかを「まずは見て知りたい」という気持ちが強かった。健常者と障害のある方の間に溝があるかもしれない、うまく会話できないかもしれないという不安もあったため、せめて少しでも自分から話しかけて関わりを持てるようにすることを目標にして授業に臨んだ。

最初の1～2回は、昔からの友人である T 君以外の KUPI 学生とはあまり会話ができず、「どう話しかければいいのか分からない」という戸惑いが大きかった。ところが授業を重ねる中で、KUPI 生それぞれの個性が少しずつ見えてきた。よく話す人、あまり話さない人、大きな音が苦手な人、いつも笑顔の人、自分の世界に入っている人など、本当に多様であり、「同じ知的障害」という括りでは捉えきれない違いがあることを本当の意味で実感した。私はこれまで障害について学ぶとき、どうしても「この障害にはこういう特徴がある」と一般化して理解するしかない場面が多かった。しかし実際に関わることで、「障害」はその人を規定するものではなく、その人の数ある特徴の一つであり、アイデンティティの一部でもあるのだと実感した。「障害があつてその人がある」のではなく、「その人がいて、その中の一つとして障害がある」ということを、言葉ではなく経験として理解できたことは大きい。

また、授業の中で感じた知的障害のある方々の学びの特徴として、自由な発想の豊かさがある。私は何かを考えると、与えられたお題に強く縛られ、常識や「正解」に寄ってしまいがちである。一方で KUPI 学生たちは、自分の好きなことや興味関心を核にしなが

ら、柔らかく視点を広げ、思いもよらない切り口で話を展開していく。その自由さは刺激的で、同時に「この発想をつぶさず、授業内容につなげていく」ことの難しさも感じた。本人の中では何かしらのつながりがあって発言しているのだと思うが、それを言葉で説明することが得意ではない場合も多く、こちらが意図を汲み取れない場面が何度もあった。

そのような経験を通して私が学んだのは、相手の言葉が分からないときこそ、粘り強く寄り添い続けることの大切さである。一見関係のない話に思えても、そこを丁寧にたどっていくことで、どこかで授業テーマとつながり、点と点が結びつく瞬間が何度もあった。無視されたように感じても話しかけ続けること、すぐに結論を決めつけず相手の世界を尊重することが、関係形成にも学びの成立にも不可欠なのだ実感した。

さらに、授業への参加を促す場面でも学びがあった。授業が始まっても別のことを続けてしまう KUPI 学生に対して、声をかけても反応が薄かったり、今興味のあることにしか応じなかったりすることがあった。そのとき先生が「なぜ今授業に向き合うべきか」を、相手の状況に寄り添いながら優しく伝えていたことが印象に残っている。私たちは「授業だから授業を受ける」と切り替えがちだが、先生は「今〇〇さんと関われる時間だよ」「それは後でもできるからね」というように、相手が納得できる言葉で切り替えを支援していた。これは知的障害のある方々の学びが、本人の納得や関係性の中で立ち上がっていくことを示しており、関わり方として非常に参考になった。

私は最後まで先生のような声かけで切り替えを促すことは十分にできなかったが、私なりに試行錯誤する中で一つの方法を見つけた。それは、今やっていることを途中で否定して止めるのではなく、まずは「終わるまで付き合う」姿勢をとったうえで、「〇〇が終わったら次をしようね」と伝えることだった。理想的かどうかは別として、その声かけによって切り替えがうまくいく場面があり、私自身にとって大きな学びになった。加えて、笑顔で接すること、理解しようとする姿勢を示すこと、分からないときには「もう一回教えて」と率直に伝えることも、関係をつくり学びを深める上で重要だと感じた。

この授業を通して、私が最も大きく変わったのは、知的障害のある方々の学びを「支援する／される」といった一方向の枠組みで捉えなくなった点である。参加前の私は、私が関わり方を工夫し、相手に授業へ参加してもらうことが重要だと考えていた。しかし実際には、KUPI 学生と同じ場にいることで、私自身の思考の癖や、無意識に持っていた「授業とはこうあるべき」という前提が何度も揺さぶられた。例えば、私は与えられたテーマに沿って効率よく進めることを重視しがちだが、KUPI 学生たちは目の前の興味や感覚を起点に世界を捉え、そこから話や行動が展開される。そこには“寄り道”のように見える瞬間もあるが、その寄り道こそが本人の学びの入り口であり、無理に切り上げてしまえば、学びの芽を摘んでしまうことになる。つまり私がすべきことは「正しい方向へ導く」ことではなく、相手の関心の流れを尊重しながら、学びにつながる橋を一緒に探し、ゆっくり架けていくことなのだ理解した。

また、KUPI 学生たちの反応を通して、コミュニケーションにおいて「言葉がすべてで

はない」という当たり前のことを、改めて実感した。反応が薄い、目が合わない、話が逸れるといった場面では、こちらが「伝わっていない」と判断してしまいがちである。しかし実際には、後から突然同じ話題に戻ってきたり、こちらが言った一言を覚えていたりすることがあり、本人なりの受け取り方や理解の仕方が確かに存在していた。私が意図を汲み取れなかったのは、相手に問題があるからではなく、私が相手のペースや表現方法を十分に受け止めきれていなかったからだ気づいた。ここから、共生とは「同じやり方に揃えること」ではなく、「違いがあるまま、成立する関係をつくること」なのだと考えるようになった。

さらに、KUPI 生と学ぶ経験は、私に“関係をつくる力”の本質を教えてくれた。それは、気の利いた言葉をかけることや、場をうまく回すことではなく、相手の世界に関心を向け、分からないことを分からないままにせず、何度でも確かめながらそばに居続けることだと思う。無視されたように感じて話しかけ続けたこと、うまく切り替えられないときに焦らず付き合ったこと、分からないところを「もう一回教えて」とお願いしたこと、そうした一つ一つの積み重ねが、相手の安心につながり、結果として学びの場への参加につながっていった。私はこの授業を通して、相手に合わせて自分の関わり方を柔軟に変え、時間をかけて関係を育てる姿勢が、学びの成立に直結することを体感した。

以上のように、本授業での学びは、知的障害のある方々の学び方の理解にとどまらず、私自身の学びへの向き合い方や、人と関係を築く姿勢を見直す機会となった。今後、共生社会を考える際にも、「障害」から人を見るのではなく、「その人」から出発し、その人の関心やペースに寄り添いながら、共に学びをつくっていく姿勢を大切にしたい。

②

まず、私がこの授業を履修したのは、社会教育主事の資格を取るための選択科目の中で、他の授業より関心を持てる内容だったからである。関心を持った理由としては、私はこれまでの大学生活において、社会福祉や障害者、またマイノリティについての授業を多く履修してきたが、知的障害者の方々と一緒に何かをするといった経験はなく、何か学びになることがあるかもしれないと考えたことが挙げられる。また、私は個人的に、死ぬまでにできるだけ多くの様々な種類の人間と出会って関わってみたいという気持ちがあり、大学という場所で知的障害者の方と一緒に授業を受けるというなかなか珍しい経験をできることに魅力を感じたということもある。いずれの理由もふわつとしたもので、何か特別に強い思いがあってこの授業をとったわけではない。しかし、せっかく履修するからにはできる限り多くのことを学んで吸収しようという思いで臨んだ。加えて、授業を受けるにあたっては「一般学生」とか「KUPI 学生」とか「メンター学生」といった枠組みではなくて、目の前にいる「その人」として接することを意識した。これが正しい心がけだったかどうかは分からないが、人と接する時は常にそうであろうと意識しているため、今回の授業でもできるだけ心がけたつもりである。

次に、この授業において知的障害者の学びについてどのような気づきがあったかについてであるが、正直あまり KUPI 学生の方を知的障害者として捉えていなかったため、そこまで多くのことに気付けたわけではないと感じる。KUPI 学生の方々と接していて、授業全体を通してずっと感じていたことは、子どもと喋っているみたいだなということである。子どもではない年齢になっても子どもみたいだから知的障害なのだろうと思うが、話しているも障害を持っている人と話しているというよりは、ずっと子どもと話しているという感覚であった。ただ、KUPI 学生の方自身が反省すべきと感じたことがあった際に、それを自覚して他の人に謝罪をしたりすることができている人もいて、これができない人が世の中にはたくさんいるのにそんな人たちよりよっぽど大人じゃないかと率直に感じた。今回、私が KUPI 学生の方々に対してあまり「障害者」という印象を抱かなかったのは、短い期間で週に 1 回、1 時間半しか一緒に活動する時間がなかったからかもしれない。長期的に関わって成長の速度の遅さ等を実感すると、「健常者と違う」ことが強く意識されたりするものなのだろうかと考えたりした。

KUPI 学生と学ぶという経験は、私自身のコミュニケーション能力の課題を改めて認識する学びであった。私はそもそも、「会話」というコミュニケーションの形が得意ではない。会話をしているのに、相手が投げたボールを受け取らずに自分ばかり話してしまっていて、一方的に相手に対してスピーチを聞かせてしまう形になる場合がよくある。こうなってしまう要因は様々あるが、沈黙が怖く、せっかちであるが故に相手の返答を待てないこと、そして伝えたいことを誤解されるのが怖くて 1 から 100 まで説明しないと気が済まないことなどが挙げられる。こうした私自身のコミュニケーションの形は、特に KUPI 学生との相性が非常に悪かったと思う。なぜなら、KUPI 学生は、伝えたいことを考え、そしてそれを言語化して発するまでに時間がかかる人や、長くて言葉数の多い説明を理解するのが難しい人が多かったからである。このことは授業が始まる前からなんとなく自覚していたため、相手の言葉をできるだけ待つこと、そして伝えたいことは短く簡潔に伝えることをいつも以上に意識しようとはしていた。しかし、これは想像以上に難しかった。こちらからの質問に対して KUPI 学生が黙り込んでしまった時、これは質問の意味がわからなかったのか、返答を考えている途中なのか、返答が思いつかなくて考えが止まっているのか、返答したいことはあるけどどう言葉にすればいいか分からないのか、それが分からないことで、どのタイミングでどんな言葉をかけるのが適切かさっぱり分からず困ってしまうことがあった。このようなことは普段の友達とのコミュニケーションの中でも起こることだが、この授業では特にそういう場面が多かったと感じる。そのまま返答を待った後に質問の仕方を変えてみると、「今考えているから」と遮られてしまうこともあって、その時はそれを伝えられる KUPI 学生の方だったからまだよかったものの、それを伝えられない方だった場合さらに一方的なコミュニケーションになってしまう可能性もあると思う。これらのことから、自分自身の「待てなさ」を改めて実感したし、相手の言葉や姿勢を受け止めるコミュニケーションのとり方についてもっと考えなければいけないと感じた。意

識したからといってすぐに改善できる問題ではないが、この授業でこうした学びを得られたことは非常に有意義であった。

また、私は3人以上でのコミュニケーションもあまり得意ではない。自分が話しすぎてしまわないように気をつけることに加えて、どのタイミングで相槌を打ったり意見を出したりすればいいか悩むのが難しいからである。しかし、今回の写真絵本作りの最終的なグループは私と KUPI 学生、そしてメンター学生の3人だった。私以外の2人ともとても素敵な方だったが、メンター学生の方は消極的なタイプで、何をするにも「私なんて」と自信がなさそうだったため、結果的に私と KUPI 学生の方がメインで会話をする形になることが多かった。今考えればあえて一步引いて見守っていてくれたのかもしれないが、私は本人が言うほど自信をなくす必要などないと感じていたし、もっと3人で一緒に活動がしたいと思っていた。そのため、そうできるようにと意識はしたが、やはり前述したように複数人のコミュニケーションが得意ではないこともあってあまり上手くいかなかった。そんな時、KUPI 学生の方がメンター学生の方を巻き込んだり励ましたりするような発言をしてくれる場面があり、非常にありがたかった。他人を巻き込んでいくような力のあるコミュニケーションの仕方は本当に見習いたいと思ったし、それができる人と一緒に学ぶことができよかったですと感じる。

最後に、この授業の雰囲気はとてもあたたかかった。空気が読めなくても、突拍子のない発言をしても、授業の進行を妨げてしまっても、許容される空気があった。これは、受講者に知的障害者が含まれている授業だからなのだと思う。ただ、「知的障害」というのはどこからどこまでという線引きが曖昧で、「知的障害者」に限りなく近い場所にながらも「健常者」として生活している人は大勢いるはずである。これはもちろん知的障害に限った話ではない。そう考えると、普段の生活の中で他者に寛容的であることがいかに重要であるかを再認識させられると同時に、社会が社会として機能することとのバランスには頭を抱えざるを得ない。少なくとも、私個人としてはできる限り寛容でありたいと、そう感じるような授業だった。

③

私はこの授業に、これまで自分が関わってきた WILL での障害者とともに学ぶという経験を、改めて大学の授業という枠組みの中で捉え直したいという気持ちで臨んでいた。大学1年生から KUPI の課外活動である WILL のプログラムに参加し、知的障害のある人と関わりながら活動してきたが、大学に入学する以前は障害者との交友はほとんどなく、どのような距離感で接し、何を話せばよいかなどを考えており、どこかで壁を作っていた自分がいた。共通のプログラムに継続して参加する中で、少しずつその人自身の魅力や面白さに触れ、個人として関係性を築くことができるようになったものの、「大学の授業」という場で、障害のある人と障害のない人がともに学ぶことには、どのような可能性があるのかを改めて感じ取ってみたいと考えていた。

授業を通して強く印象に残ったのは、KUPI 学生一人ひとりが、自分自身の内面や経験を非常に率直に言葉にしていたことである。残念ながら今期の KUPI 学生全員としっかり話せたわけではないが、H さんの語る優しい世界観や、N さんの震災経験、M さんの「太ってる自分が嫌いでした。」という言葉には、それぞれが今の自分を確かに支えているコアの部分に秘密にして隠さずに開示してくれたように感じる。私はそもそもそれが自分の根幹に関わることなのかどうかということに対して自覚的ではない。そのため、おそらく無意識的に自分の根幹に関わることを避けて人に話しているのであろう。特に私は「学びの場にいる」と感じている場合にこの傾向がより顕著に表れる。ともに学びあうということ考えたとき、普段の生活の中では表出されない当事者性が邂逅することはとても大切なことである。しかし、それは容易に実現できることでもない。KUPI 学生の面々は自らの本質的な部分と向き合いながら写真絵本づくりを行っていたからこそ、T さんの「自分の完璧主義などところを見つめなおしてみようと思う。」という言葉や N さんの「(全部) 自分でやったで！」のような発言から読み取れるように自分の中の認識枠組みが変容していくきっかけや心に残る成功体験になったのではないかと考える。

さらにこの授業を通じた私自身の学びとして特に大きかったのは N さんの他者の痛みに対して敏感に反応し、その痛みを感じている人（たち）のために自分ができることを考え、実行するという考えに触れられたことである。授業中に N さんと話をした際、青森で起きた地震の話題になったことがあった。N さんは、その被害に遭った人々のことを本当に心配している様子で、遠く離れた地域の出来事でありながらも、強く心を痛めていることが伝わってきた。その姿が印象に残っていたが、翌週の授業で N さんは青森のリンゴを使ったジュースを持ってきて見せてくれた。そして、そのジュースは売り上げの一部が復興支援に充てられるものであり、「これで少しでも助けになればと思って買った」と教えてくれた。

私はその行動に大きな衝撃を受けた。まず、直接的な関わりのない遠方の人々のことを本気で想い、心配していること自体が自分や自分の身の回りのことで精一杯になってしまいがちな現代人にはなかなかできないことだと感じた。それだけでなく、その気持ちを気持ちだけで終わらせるのではなく、自分にできることを探し、具体的な行動へと移している点に強く心を打たれた。行動自体は小さなことかもしれないが、その積み重ねが力となり、さらにそれを見た周囲の人に良い影響を与える可能性もある。

N さんの行動は、単なる善意の表出ではなく、「ともに学ぶ」という営みの本質を示していたように思う。学びとは知識の受け渡しではなく、他者の価値観や在り方に触れ、自らの在り方が揺さぶられ、再構成される過程である。N さんの姿勢は、他者の痛みに応答する主体としてのあり方を具体的に体現しており、それを目の当たりにした私は、自分の他者へのまなざしや行動の基準を問い直すことになった。このような相互変容の経験こそが、障害の有無を越えてともに学ぶことのおもしろさなのではないかと感じた。

人は誰もが隠したい本質や無意識的に隠れているその人の根源的な部分があり、それ

らは普段の生活の中ではなかなか出てこないが、大学の授業という場においては、強く意識しておかないと取りこぼしてしまうほど小さく紛れている、コアに関わる発言や振る舞いが現れるのかもしれない。それらを見逃さないように丁寧に目を向けるとともに、なぜそうなるのか、また、どのような仕掛けがあれば根源的なことが表れてくるのかということも考えたいと思った。

④

この授業に臨む前、私の障害者に対する認識は、そして障害者との共生についての考えは、非常に表面的で抽象的なものだった。何せ「障害者と関わる」ことにおいて、私は経験が少ないのだ。知的障害者との関わりについては、コミュニケーションの難しさや理解の違いから、どこか距離を置いてしまう自分がいた。この授業に参加したのも、社会エンパ生として、そうした経験をつんでおきたいと思っていたことが主な理由である。しかし、この授業で実際に KUPI 学生と共に写真絵本作りやプレゼンテーションに取り組む中で、私のそうした認識は根本から覆された。単なる知識の習得に留まらず、人間の多様性と教育の本質について深く考える貴重な機会となった。

授業の初日、KUPI 学生と初めて対面した時、どのように接すれば良いのか、どんな言葉をかければ良いのか、正直なところ少し不安があった。しかし、実際に共に学び始めてみると、その不安は徐々に解けていった。彼らは本当に楽しそうに話すのだ。話すのが苦手な子も、ゆっくりと話を掘り下げながら聞いていくと、本当に楽しそうに話してくれた。KUPI 学生たちは、私が想像していた以上に個性豊かで、それぞれが独自の世界観や表現方法を持っていることに気づかされたのである。

写真絵本作りでは、特に多くの気づきがあった。ある KUPI 学生は、我々が見ても素通りするような景色を「花畑」と表現しており、その感性の豊かさに驚かされた。我々は往々にして、物事を目的意識的に見る癖がついている。しかし、その学生の視点は、私たちが普段どれだけ固定観念に縛られて世界を見ているかを気づかせてくれた。また、別の学生は複雑な感情を言葉で説明するのが難しい代わりに、写真の配置や色の組み合わせで見事に表現していた。これまで私が用いてきたコミュニケーションの形が、実は非常に限定的なものであることを感じさせられた瞬間だった。

写真絵本作り発表会直前での準備時間も印象的だった。KUPI 学生の一人が発表前の確認作業に時間がかかり、当初の予定より大幅に遅れてしまった。私たちは気が急いでいたが、その学生が一つひとつを丁寧に確認し、納得するまで取り組む姿勢を見ているうちに、考えが変わった。現代社会が求める「速さ」や「効率」よりも、「自分がいかに納得できるか」に重きを置いたプロセス。自分勝手と言えばそれまでなのかもしれないが、社会に流されず、自分を貫く強さを感じて、できる限りその思いに応えたいと感じた。知的障害者と学ぶことは、「ゆっくり考えること」「多様な理解のプロセスを認めること」の重要性を教えてくれた。

他方、自分を貫く強さを尊重することは、集団での授業においては進行の乱れを起こしうる。かけられる時間にも限りがあるし、誰かに合わせれば誰かが時間が足りなかったり余ったりしてしまう。そうした中でも授業を進めていかなければならないため、個々の尊重と全体の進行、その塩梅に難しさを感じた。その意味合いでは、KUPI 学生ごとに分かれて各々が写真絵本作りの作業に取り掛かるという授業形態は、その両者のバランスをとる適切なものであったといえると思う。というか、授業とは本来こうあるべきなのかもしれない、と考えさせられた。個々の形を全体用に提示される型にはまった姿に合わせるのではなく、個々を尊重しながらも全体が進められるような授業形態を見出す、このスタイルこそが、あるべき教育の姿であるように感じた。

写真絵本作りという具体的な創作活動は、言葉だけでは伝えきれない思いや考えを共有するのに最適な方法だった。KUPI 学生の中には、言語表現が苦手でも、視覚的な表現ならば驚くほど豊かな世界観を表現できる人が多かった。完成した絵本の一ページページには、それぞれの学生の個性と感性が詰まっていた。この経験から、教育においては多様な表現方法を認め、それぞれの特性に合った学びの場を提供することがいかに重要かを学んだ。従来の教育が「言語的・論理的思考」を中心に設計されがちなのに対し、インクルーシブ教育では様々な学びの形を認める柔軟性が必要だと痛感した。

この授業を通じて、私は「障害共生教育」が単なる「支援」ではなく、「相互変容」のプロセスであることを学んだ。KUPI 学生から受けた影響は、私自身の学び方や他者との関わり方まで変えるものだった。彼らと接する中で、これまで無意識に持っていた「できる／できない」という二分法や、「教育とは何か」という前提を問い直す機会が多かった。障害者と共に学ぶ環境は、健常者にとっても、自己の偏見や社会の暗黙のルールを相対化する貴重な機会となると思う。

最終的に、この授業から得た最も大きな気づきは、「共生」とは「共に生きる」こと以上に、「共に学び合う」ことの重要性である。KUPI 学生の存在は、教育の場を「正解を競う場所」から「多様なあり方を認め合う場所」へと変容させる可能性を秘めている。というのも、最後の発表会にて、発表の仕方から発表内容、撮影風景に至るまで多種多様で、十人十色な発表が見られ、そうした多様な発表をみんなが受け入れてくれる今のこの状況も共生の一つのあり方だよなあ、と感じたのである。写真絵本作りやプレゼンテーションという具体的な共同作業を通じて、私たちはお互いの違いから学び、それぞれが成長することができたと思う。この経験は、今後教育や社会活動に携わる上で、貴重な指針となるだろう。

真のインクルーシブ社会の実現には、まず私たち一人一人が、自分とは異なる他者と真摯に向き合い、共に創造する経験を積み重ねていく必要がある。この授業で体験した「相互変容」のプロセスは、そのための第一歩となった。障害の有無にかかわらず、すべての人が互いの違いを認め合い、そこから新たな価値を創造していく—そんな社会の実現に向けて、この授業で得た学びを活かしていきたい。

⑤

私はこれまでボランティア活動や教育実習で障害のある方と関わる機会があり、障害者の生涯を通した学びに関心を持っていたため、この授業に参加しようと思った。私の今までの障害のある人との関わりの中では、自分が「教える」「見守る」「介助する」という立場であったため、「一緒に学ぶ」「学び合う」という体験が初めてで、どうなるのかわくわくしていた。

最初の授業では比較的ゆるい雰囲気アイスブレイクが行われたが、テーマが発表されると、「共生とは」という思っていたよりも難しいお題が与えられて驚いた。KUPI 学生さんと対話する中で、共生について私も初めて深く考えることができたと思う。

KUPI 学生の皆さんは、本当に個性豊かで、同じお題から出てくる発想も一人ひとり全然違って面白いなと思った。「共生」という難しいテーマも、それぞれが自分の身近なことと関連付けて考えることができて、学びが深まっていたと思う。また、KUPI 学生のみなさんの好きなことへの情熱や、知識の豊富さには、驚かされることが多くあった。映画の話や飲み物の話など、KUPI 学生さんから私の知らないことをすごく生き生きとした表情で教えてもらえた時はうれしかった。まだまだ自分にも知らないことがいっぱいあるなと思った。

今回の授業では、最初の短い発表に向けて「共生できていない私たち」という、具体的に少し簡単なお題から考え始めて、最終発表に向けては自分の好きなテーマで、どちらも色んな人とグループを組んで考えることで、だんだん共生への理解が深まる工夫がされていたと思う。それによって、全員が考えることを諦めずに楽しんで学ぶことができた。

「学ぶこと」「考えること」のハードルを下げる工夫は知的障害者の学びをより深いものに行っていると思う。発表のスタイルが、言葉で説明するだけではなく、寸劇や写真絵本など、自分に合った方法を比較的自由に選べたのもよかったと思う。他の学生にどう伝えようか、どうやったら興味を持ってもらえるかと KUPI 学生さんと一緒に考えるのは楽しかった。言葉で考えを伝えるのが苦手な人も学んだことを表現しやすくなったと思うし、発表会では一人ひとりの工夫が見られ、作品に込めた熱意が伝わった。

また、常に誰かと一緒に考え、共同作業をするようになっていたことも、学びを深めるきっかけになったと思う。異なる興味関心や経験を持つ人と話すことで、自分にはなかった視点での社会への問題意識を知ることができた。特別支援教育に関する授業で学んだ、ヴィゴツキーが「(特に異なる発達段階の人と) 共同学習することで、発達の最近接領域に働きかけることができる」と言っていたのを具現化するということかもしれない、と思った。

KUPI 学生の皆さんは性格も本当に人それぞれで、自分の感情や考えていることの表現が豊かな人もいれば、そうでない人もいるという印象を受けた。話し合いが盛り上がり、たくさん意見が出すぎてまとめきれなくて、メンター学生の方に助けてもらった時もあった。

一方で、自分も相手も人見知りをしてしまい、初対面の時は緊張して言葉があまり引き出せない時もあった。知的障害の方と一緒に学ぶ中で、私は学習を進めることに精一杯になると、作業を円滑に進めるためについ相手の考えを分かったように代弁してしまいそうになる時があると気づいた。でも、こちらの問いかけ方を変えてみたり、少し待ったりするとその人なりの言葉で思いを伝えてくれることもあったので、人の言葉を先取りしてしまわないように関わっていきたいなと思うようになった。

私はこれまでさまざまな授業で知的障害の特性などについて学んだことで、障害者のことや、障害者の学びについて理解したつもりになってしまっていたと思う。実際にたくさんの人と関わってみると、知的障害の人はこれが苦手だ、と一般に言われているような特性は、意外と後になってから「確かに言われてみればこういうことを苦手そうにしていたかも」と思うくらいで、それよりも KUPI 学生さん一人ひとりの性格や個性、特にそれぞれの好きなものや良いところが一番印象に残っている。

特別支援教育に関わる自分の視点では、一人ひとりに合った学習の方法は、その人と関わっていく中で知る個性に合わせて考え、選んでいくべきだということ学んだ。こういうことが苦手で、こんなことはきっと考えるのが難しいから扱うのをやめておこう、と障害の見かけだけで判断して学ぶ機会を奪ってしまうのではなく、難しいことでも、その人の考え方の特徴や興味の方向に合わせて、こう発問したら学びが深まるかも、とこちらの問いかけ方を工夫していくことで、学びが深まる可能性が広がると思った。

また、この授業だけでなく他の場面でも、「知的障害者」という言葉でひとまとめにしてしまうのではなく、同じ一人の人間として、その人の良いところも悪いところも知ってから関わることが、障害者と健常者が共生する上で大事だということ学べたと思う。

⑥

「共生」をテーマに写真絵本づくりを行った。この広いテーマについてどのように考えを深め、形にしていけばよいのか不安もあったが、KUPI 学生の皆さんからどんな刺激ももらえるのか楽しみな気持ちもあった。

いくつかのグループで作品づくりに関わったが、どのグループでも KUPI 学生さんの存在は欠かせなかった。最終発表の前に行った「共生できていない私たち」という発表の準備では、自分たちの経験を出し合いながら話し合いを進めた。そのとき一緒にグループだった KUPI 学生さんが、家で蚕を飼っていた経験を話してくれた。数が増えすぎないように、弱い蚕から殺さなければならなかったという話だった。その言葉は、どこかで聞いたようなきれいごとではなく、命の重さや「強いものが生き残る」という現実を自分の体験として語るもので、とても心に残った。他の場面でも、彼女の実体験に基づいた知識や考えは、話し合いを進めるうえで大きな支えになった。また、最終発表で一緒になった KUPI 学生さんは、刑事ドラマやハリウッド俳優、アメリカの歴史についてとても詳しく、その知識を中心にして写真絵本を作っていた。彼の強いこだわりと豊富な知識があった

からこそ、会場全体を巻き込む唯一無二の発表ができたのだと思う。他のグループの発表からも多くの学びがあった。特に「自分との共生」や「家族との共生」というテーマの発表を聞き、自分や身近な人を受け入れ、大切にすることができなければ、他人と共に生きることも難しいのだと気づいた。

授業を通して、KUPI 学生さんから学んだことは大きく二つある。一つ目は、こだわることの大切さだ。私に関わった KUPI 学生さんは、皆それぞれに強いこだわりを持っている。私はこれまで、時間や周りとの調和を優先する中で、自分のこだわりを少しずつ手放してきたように思う。こだわりと妥協のどちらが正しいということではないが、今の自分にはこだわりが足りないと気づかされた。二つ目は、学ぶ姿勢である。KUPI 学生さんは、一つひとつの出来事を大切に受け止め、自分の中でよく考え、経験として積み重ねているように感じた。授業中も積極的に発言し、学ぶ時間そのものを楽しんでいた。その姿を見て、私は大学という恵まれた環境にしながら、そのありがたさを当たり前にしていてことに気づいた。彼・彼女らの前向きな姿勢を、私も見習いたいと思った。

今回の経験から強く感じたのは、知的障害のある人の学びは、決して受け身のものではないということだ。KUPI 学生さんは、自分の経験や興味をもとに、自分なりに考え、表現していた。私はこれまで、知的障害のある人の学びをどこかで「支援されるもの」と考えていたが、実際には私の方が多くを学ばせてもらっていた。学びとは、理解の速さや知識の量ではなく、どれだけ自分の経験と結びつけて考えられるか、そしてどれだけ楽しめるかにあるのだと気づいた。その一方で、こうした力がありながらも、それを十分に発揮できる場が社会の中にまだ少ないという現実も感じた。大学で学ぶ機会は限られており、学校を卒業した後の学びの場も多くはない。学びたいという思いがあっても、それを受け止める場所がなければ続けることは難しい。

実際に共に学ぶ中で、知的障害のある人の力と可能性を強く感じた。同時に、私自身がどこかで「知的障害」と「学び」を切り離して考えていたことにも気づかされた。私は無意識のうちに、「学ぶ人」と「支援される人」を分けて見ていたのかもしれない。しかし今回の授業では、立場の違いはあっても、同じ場で考え、悩み、意見を出し合う「学び合う関係」が確かに存在していた。そこには上下関係ではなく、互いに影響を与え合う対等な関係があった。また、「共生」という言葉についても考え直すきっかけになった。共生とは、ただ一緒にいることではなく、相手の力を認め、その力が生きる場をつくることではないだろうか。KUPI 学生さんのこだわりや知識、経験があったからこそ、私たちの作品はより深まり、発表も豊かなものになった。その事実こそが、共生の一つの形だと感じている。

知的障害だけでなく、年齢や性別、家庭の経済状況などに関係なく、誰もが学び続けられる社会であってほしい。そのためには、学校以外にもさまざまな学びの場を広げることや、学び直しを支える仕組みを整えることが大切だと思う。また、制度だけでなく、私たち一人ひとりの意識も変わっていく必要がある。目の前の人を「支える対象」として見る

のではなく、「共に学ぶ存在」として向き合うことが、学びを広げる第一歩になるのではないか。今回の経験は、単なる授業の思い出ではなく、私自身の考え方を見つめ直す大きなきっかけとなった。学びが一部の人だけのものではなく、すべての人の人生の中に自然にある社会を目指して、そのために何ができるのかをこれからも考えていきたい。

⑦

私自身は、この授業に人一倍強い思い入れと一縷の希望を求めて受講した。私はグローバル文化学科で主に公共政策や比較政治、グローバル社会動態を中心に探究を進めていたが、元々大学に入ったのも、政策の道に進んだのも私が生まれ育った家庭の影響が多い。私の実の弟は、発達障がいのグレーゾーンである。グレーゾーンと聞くと"相対的に"マシじゃないかと指摘される専門家がこれまでの経験上多かったことに驚いているが、決してそんなことはない。どこにも上手く馴染むことのできない、定型発達の所謂健常者と発達障がいを行き来するマージナルな主体としての本人自身の葛藤や衝突は、想像を絶する程の苦難の連続である。またそれをケアする側の支援者の疲弊や葛藤も相当大きい。介護士や特別支援学校の先生方は教育法や実習法を学んだ上で現場に入っていく。他方で障がいを持つ人が家庭に生まれた時にその家庭は大きな混乱に陥る。なぜならこれまで健常者ばかりのコミュニティで生き続けて、障がい者のことを全く自分事として捉えてこない人々が非常に多いからである。これは安直に個人の責任として追及することは簡単であるが、自己責任論は全く実情を捉えていない。背景にあるのは、子供や障がい者などの向き合い方を真剣に考え学ぶ機会が喪失されており、日本国の現行の教育課程に全くそうした学習機会が必修で組み込まれて無いことがそもそも原因である。加えて、健常者だと生まれてくる前提(これも本来的に言えばおかしいとの指摘もあるだろうが、恐らく一般的な大衆へはそこまでの可能性を考えていない。)や、圧倒的な知識不足・経験不足に加えて、母親や父親のパパママネットワークへの遮断もある。これは、健常者のネットワークで固められてしまい、特性を持つ子どもは子育て支援者たる父母さえもコミュニティから疎外される現実である。上手く馴染めたとしても、根本的に発達段階や今起きている問題や悩み、認識の共有ができない為、結局孤立してしまう。家庭では、親族で見よう見まねで支援をするのだが、勿論のことそんな簡単にはいかない。定型発達の子よりも向き合い方には慎重を要する上に、介護士や特別支援学校の教師のようにそもそも知識がない。またその家庭に生まれた「きょうだい児」は、幼いころからケアを強要される。その部分に理解がある両親は少ない。すると、何となくその家庭は絶望の負のサイクルが回り出してしまふ。両親の関係性が悪くなり、喧嘩が頻発する。それだけで止まればいいが、そうもいかない。その子供にとっては地獄のような状態である。両親を説得できないけど、負担は強いられる。自分の夢ややりたい事はあるけれど時間が取り敢えず無いし、やりたい事すら次第に分からなくなってしまうのだ。

一方で大衆の多くは上手く周りに助けを求めることや、参考書を大量に買って自発的に

学ぶこともできないし、そもそも民間の本では何を信じていいのかわからない。そうした障がいを持つ人々の支援者としての極めて重要な役割を家庭は担っているのにも関わらず、支援者・ケアをする者への支援、専門家との連携・心のケアが我が国では欠落し続けてきたのである。正直、日本のきょうだい児・ヤングケアラーは生き地獄である。私自身もそうであった。私は独学で勉強してなんとかアウトサイダー的に神戸大学に入れたが、多くの人々はそうは行かない。私自身も深夜まで弟の介護をしながら、両親の喧嘩の仲裁に入り、深夜 2 時からようやく勉強にありつける経験を持つ。5 時には起きてまた勉強して、朝になればまた家を手伝うという周囲と比べて極めて厳しい環境の中で進学してきた。その結果、今の私は心身共にボロボロの状態、闘病をしながら通学するという大変な状態に陥っている。社会に貢献したいこと、夢は私にとっては学問であるし、他の生徒達にとってはスポーツや音楽などであろう。生まれながらにして人生を諦めざるを得ない、障がい者が身内にいるからという理由で苦しむような状況は悲しすぎる。社会的に障がい者などのケアをされる側もケアをする側も両者の一層の支援が極めて重要であると改めて認識した。本来は才能を持っていても叶えられない。やりたいこと、夢があるのに、生まれながらにして諦めざるを得ない極めて悲しくて苦しい現実がある。この過酷な現実は何としてでも私達の世代で変えなければいけないというのが、私達当事者としての共通の思いである。近年少し見直されてはきたものの、それが一般庶民の暮らしにまで浸透しているかといえば極めて疑問である。現在の我が国が抱える教育政策・制度の重大な欠陥も見てくる。本文では、授業で学んだことを振り返りながら具体的な政策についても言及したい。

前述したように私が学問の道を志した動機としてのフィールドは家庭であった。しかしそれは残念ながら上手くいっていない現場だったのだ。ネグレクトの両親は、向き合い方が分かっていたいなかった。ケアというものが初めてで元来苦手だった両親は次第に暴力や心理的虐待を繰り返すようになる。それは彼らを加害者として描くことは容易であろうが、誰にも相談できない中で孤立し病んでしまった被害者でもある。そんな痛切な現実には私は直面してきただけに、この授業に参加した時、驚きと共に折れかかった心に希望を見出すことができた。教室に入った瞬間に凄くみんなが明るく、目を輝かせて希望を持っていたのだ。私が見てきた現場、ヤングケアラーの人々は疲弊し苦しそうな表情をしていた。私自身もそうした教育・福祉現場に就職したいと考えるほど、そうした業界は好きだが、暗い雰囲気が漂っていたのも事実である。ここでは、みんなが同じ目線で話しているのだ。何よりも明るく元気いっぱい。これは従来の支援者と被支援者という画一的な枠組みを超えた関係性であり、人と人が互いに尊厳を持ち、敬意を持って対話が創られていたのである。私自身もこの夢のような空間に非常に希望を見出しながら明るい気持ちで授業に臨めた。KUPI の学生も非常に優しくかった。突然来た僕達に対しても分け隔てなく話しかけてくれた。凄く優しさを感じたし御礼を伝えたかった。素直に排除することなく向かい入れて頂けたからこそ僕達も学ぶことができたのである。特性を持ちながらもそれを生かしたり、時に悩みながらも今僕こういう状況なんでと伝えてくれたことも神戸大学生が安心で

きた点ではないかなと考察する。また同じ授業を受講していた生徒達にも何より私は敬意を表したい。私のように身内に障がい者がいる生徒の方もいらっしゃると思うが、そうでは無い生徒さんもいた。元々そうした分野に興味関心があるとのことで、対応についても学んでいるのかもしれないが、それでも一人一人が躊躇なく、自然と向き合いながらケアをする側・される側という存在から 1 人の人間として特性を含めて向き合い、関わり合っていくという人と人との純粋な出会い、それを通して生まれる喜びや悲しみ、葛藤などのかげがえのない学びが生まれていったと感じた。また、何よりも失敗しても良いという雰囲気があったことも大きかったと思う。当初、他の生徒達を見ているとまだどう対応して良いのかという不安や特性への向き合い方に対する葛藤もいくつかの場面で見受けられたが、そうした不安や葛藤、失敗をも包摂するような空間であったことがこの授業が上手くいった何よりの原因では無いかと考えた。KUPI 学生さん、神戸大学生、津田先生やボランティアの人々それぞれが自身の役割を發揮しながらも、互いに学び合い支え合いながら学んでいくそうした姿はまさに理想的な共生社会であるとも言えるだろう。私は非常に感極まる想いであったし、気づかれてなかったかもしれないが胸が熱くなって涙を流す場面が実は何度かあった。また、こうしたインクルーシブ授業を教育課程の中にしっかりと正規化させることや大人になる全ての人々が一度は実践的に学べる場を設けるべきであるとも考えた。勿論、導入の際は今回のように上手くは行かないだろうが、それでも完璧を求めずに両者の心のケアをしながら向き合う機会の提供はこれからの社会では必要不可欠であるとも考える。全く分からないままいきなり現場に入り、やみくもにやる現状よりも、不安や葛藤を抱えながらも支援者や相談者、共に学ぶ仲間と共に学べる環境、そして何かあったら相談したり他者と一緒に考えることのできる居場所の存在はやはり非常に大きいと痛切に感じている。是非ともこの動きをしっかりと学校教育や大人になっても学べる社会教育の現場で形にして頂きたいとも考えた。

当の私自身も沢山のことを学ばせてもらった。それぞれがかげがえのない学びである。授業中私はなるべく多くの人々と関わろうとした。障がいといっても、様々なものがあり、同じ障がい名の名前でも特性も様々である。一人一人個性があり、素敵なところも苦手なところもある。そうした当初私が向き合っていた時に感じていた気づきや楽しさをもう一度取り戻すことができたのが何よりも私にとっては大きかった。授業では、KUPI 学生の皆さんと一緒に何かを製作することも多かった。同じテーマであっても一人一人の個性が出ていた。質問してみると、それぞれが自分の想いを真剣に答えてくれた。中には私達の発想からは大きく外れた新鮮なものもあった。1 番の学びは KUPI の皆さんは何でも一生懸命なのである。特性や障がいに対して悲観的に捉えずむしろ前向きに明るく捉えていたのが印象的で、今闘病し続けている私にとっても非常に大切な精神だと感じたし、そうした人間哲学は是非今後も学びたいと思った。津田先生の関わり方も指導者としては大変素敵だと感じた。何か発表をする際など、規範が重要視される場所でご飯を食べたり立ち歩く生徒さんが居た時に、ダメだということを伝えるのではなく、なぜ今これをしたのか、

どういう状況にあるのかをまず聞き取ろうとされていたように感じた。正解はない。すべての人が自分らしく輝ける。そうする為の包摂的な居場所、空間づくりこそが大切であり、この点は組織づくりや地域コミュニティ創成、あるいは政策立案の現場に至るまで幅広い分野で大切な学びであると強く考えたところである。私自身も分野は違うが、津田先生と同じような問題意識を持って大学に入った。教育こそが障がいを持っている人々も、ケアする人にとっても希望となれるのではないか。こうした問いを持って、日々探究に挑み続けてきた。気づけば私の心身はボロボロになっていたが、こうした経験を他の家庭の子達にはさせてはならない。この想いは人一倍強く持っていた。私自身は病気を抱えながらも後期試験でこの事を書いて合格した。入学後も公共政策や政策立案の研究分野に進み、将来は文部科学省に入省して包摂的な教育政策を立案することが私の夢であった。入学後これまでの心労がたたり、闘病を強いられる中、今はその夢が叶うかは微妙なところで、かなり将来には不安を持っているところだが、この授業は私に大きな勇気を与えてくれた。

最後に私自身がこれまで当事者として経験したことや授業で学んだことを基にいくつか未来の教育のあり方について論じたい。残念ながら我が国の教育課程には重大な欠陥を抱えていると指摘をしたい。ただこれは裏を返せば、十分に改善の余地があるとも捉えられる。それは今回の授業のような命の向き合い方、人との向き合い方やコミュニケーション、更には家庭教育の方法論について学ぶ機会がないのである。それらの役割は社会の中で教師という制度によって外部化されるのだ。教育学を学ぶのは、教師や特別支援学校の先生で元々関心が高い人々である。そうした人達は教育政策に精通しているからこそ向き合い方が上手である。他方、1番届くべき改善すべき人々はそうした課程には目もくれない。他の職業につくのは、職業選択の自由であるが、家ではかなりの上下関係を強いらせる家庭、父親像母親像を押し付ける家庭、興味や児童の権利や自己決定権などの知識を知らない人々が安直に運営して失敗する場面を私は非常に見てきた。ただ本来的には家庭教育は学校教育と社会教育と共に重要な教育の三要素である。家庭が児童の将来や発達に極めて大きな影響を与えるためだ。学校教育はさまざまな欠陥が指摘され続けてきたが、それとは全く次元の異なる非常事態に置かれているのが家庭教育であろう。学校教育とは比にならない強烈な格差や人権侵害が起り得る場面が家庭である。両親の裁量の幅が大きすぎる。また教師や研究者など教育業界などにでもない限り、教えることに全く慣れていない、教育学について全く知らない人々が実際に子供に教えるのだ。方法論などもっての外で、見よう見まねの状態は、序盤で触れた家庭内の介護や障がい者への向き合い方、きょうだい児の葛藤とヤングケアラー・アダルトチルドレンの誕生と共通していると考えられる。家庭教育の質の幅が大きすぎるのだ。家庭は、その先の人生設計に大きく関わる。生まれながら家庭環境の中でどうせ僕なんて諦めてしまう人々が生まれてしまうのだ。だからこそ親ガチャという悲しい言葉が生まれてしまうのだ。ただ、これは今の家庭教育の惨状を生徒である子どもの視点から見た現実的な示唆でもある。

家庭教育の質や格差が根源的な問題であり、そうしたものが学校教育という均質的な教

育現場の中でも如実に現れていくのだ。私は、地元の公立の小中学校、府立高校、国立大学へと公教育でずっと生きて下から這い上がってきた人間だ。進学して勉強に精進すればするほど、そういった問題を抱える生徒は少なくなるように見えるが、総数としてかなりの生徒が同じような状況に陥っている。成績不振や不登校などでドロップアウトしてしまう生徒も非常に多く、「優等生」ではないのかもしれないが、そういう生徒こそ本来は公教育が救い出さなければならないのではないのか。私はそうした生徒を傍で見てきた。みんなもがき苦しんでいた。無論、いじめなどは、学校教育現場で起こる問題だが、その他の不登校や成績不振などの直接的な問題に見えない問題の根底にあるのは事情は様々あるものの、ネグレクトや心理的虐待、離婚、共働きによるコミュニケーション不足など家庭環境が問題である部分も非常に多い。これらは家庭教育が抱える構造的な欠陥である。助けたいけど、民事不介入でなかなか家庭には立ち入れない。児相に連絡して引き剥がしを実施してもやはり心の傷は消えない。先生達の苦しみも同情するばかりだ。不登校の学生達はどこに頼ればいいのか。通信制も親の同意がないとなかなか難しい。里親の下で暮らしても心の傷は消えない。孤立化はどんどん進み、極端な方向に走ってしまう。そうした取り返しのつかない傷を負う前に教育という手立てを行う必要があるのだ。教育法への教育、つまり子どもへの向き合い方であり、障がい者への向き合い方だ。障がい者と共に学ぶ事は障がいとの向き合い方と同時に命への向き合い方も教えてくれる。だからこそ、障がい者が身近な人もそうでない人もすべての人が学ぶ必要があるし、そうした機会の提供は極めて重要である。

総じて今の教育課程では、親になることへの準備段階が無さすぎる。高等学校教育では歯止め規定などで厳しいのであれば、大学などがそれを担うこともできる。または、高等学校教育ではより体系的な教育学を提供し、大学教育では、さらに発展的な社会教育的な教育実践を提供するなど可能性はいくらでもある。また生徒の発達や成長により、今回の授業のような参加者としてではなく、向き合うものとしての主体性を持ちながら行うインクルーシブ授業や介護実習、障がい者やジェンダーなど婚姻や就職、介護など様々な人生の段階で必要になる教育への知見を深める場の提供が必要である。大学を卒業した後も世代ごとに必要な教育、障がいや子育て、発達特性、ライフコース、更年期などの身体的な変化、介護などへの知見を与える場の設定が急務である。現状の大学までの教育課程で、その後は何も学ぶことがない状態は見直す必要がある。学べる場所は自分で探すという状況は、学べる場所は提供しているつもりでも、人々が見つけられていないのであれば意味がない。こうした点に配慮しながら政策を検討する必要がある。仮に自主的に学ぶ人々が限られるなら、それに対する工夫もいろいろ考える。社会教育で得た知見を学校教育や社会教育の現場でプログラム化カリキュラムとして提供することも大切である。学校教育のような強制性を避けたければ、卒業証明書のように、カリキュラム化したコースの認定書を与えることで可視化することやコースとしてプログラム化する。そしてそれへの社会的な特典を提供したり、資格として名乗れるようにして学習機会を可視化する工夫も必要で

ある。企業がそこと連携をして、カリキュラムを取る必要や時間を負担することや子育てパスポートのようなカリキュラムへの特典を提供する、またその資格を取った人々が修了後も専門家や同じ世代の人々と交流する場を提供するなど考えられる。人々がせっかく学んだ実感がないとやる気が出てこないし、自信にもならない。社会教育士だけでなく、パパママ教育隊、子育て教育士、地域福祉士、障がい共生支援プランナーなどカリキュラムとして提供し、企業は奨励して、基本給アップや受講費の負担など考えられる施策は私が数分考えただけでも沢山の可能性がある。「みんなが先生」という発想は、教師の負担軽減にも繋がるであろう。プログラム化には批判もあるであろうが、残念ながら主体的に学ぶ人々は限られている。だからこそ、やってみたいと意欲付けるような制度づくりが私達専門家や政策立案者の腕の見せ所である。日本人は結構こういう所に前向きだと思う。主体的に活動をすることやプログラム化をすることは苦手であろうが、認定証や資格として見える化させることができれば結構集まると推察する。そして結果してやることは、教育の提供であることは変わらないし、この側面は義務教育や学校教育の仕組みと似ている部分であるから、強制性を回避しながら主体性を一定持ち学ばせる動機づけ、更には子供や専門家の視点では滅茶苦茶な教育、向き合い方をする人々を教育から減らし、社会としてもそうした問題が減るなど、一石十鳥ほどの効果がある私は考えている。またこれらの教育を提供する場としては大学や社会教育施設の出番である。大学にはその道のプロがいる。今はオンラインでも行えるものもある。カリキュラム化、コース化など様々な措置を工夫することは現実的に参加を増やす上では極めて効果的な案ではあるとも私は確信している。文部科学省のホームページに子育てや障がい、ジェンダーや介護などの専門的知識が人生を通して生きていく上では必要な過程であり専門的知識が必要になる分野に関する授業を収録して **website** に載せることも一つの案としては考えられる。無論オンラインで学べることも限りがある為これだけでは不十分である。故にこうした重層的な学びの提供、全世代型の社会教育の提供が求められる。教育現場でもヤングケアラーの実態把握やコミュニティ創成や心のケアという観点からの居場所づくりという新たな視点での教育政策の実現、これらが結果として自殺者や不登校やうつなどの問題を減少できることに繋がるとも考える。ここまでかなり様々な発想を自由に展開してきたが、今回の授業は我々生徒達にとっても、**KUPI** 学生にとっても、津田先生のような研究者や政策立案者たる文部科学省にとっても極めて重要な学びを得られたのではないか。是非ともこの気づきをこのままで終わらせず、進化しながらプロジェクト化したり、理論を生み出したり、向き合ってみたり、それぞれの立場で是非とも活用すべきだと考える。私自身もすべての人を包摂できる社会実現のためにこれからも努力し、**KUPI** の皆さんから学んだ特性を愛する心で、闘病を乗り越え、社会で再び輝き、自分らしく明るく何としても生き抜いてみせる。

⑧

4 年生最後の授業として受講したこの講義は、ミュージックコミュニケーションプログ

ラムの私にとって、プログラム外の授業であり、正直に言えば挑戦的な選択であった。また、これまで私はボランティア活動に積極的に参加してきたわけでもなく、知的障害のある方と関わる機会もほとんどなかったため、不安な気持ちの中受講した。それでもこの講義を受講しようと思った理由は、前期に履修した「社会教育課題研究（ボランティア学習論）」である。はじめてエンパワメントという考え方に触れ、ボランティアや障害のある人との関わりを、「支援する側」「手を差し伸べる側」という立場からではなく、「協働する」「同じ目線で共生する」という視点で捉える大切さを学んだ。それまでの私は、良かれと思って助けよう、支援しようとしていたが、そのような行動の中にも、無意識の上下関係が含まれていたのではないかと反省し、実際にその姿勢を変えてみたいと思うようになった。そのため、プログラム外ではあったが、この講義を受講して、改めた姿勢で知的障害のある方々と接したいみたいと思った。

しかし、初回の授業では戸惑いも大きかった。一般学生の中に知り合いはおらず、受講生の多くはすでに KUPI 学生と顔見知りのような会話をしており、場になじみにくさを感じた。正直、このまま受講をやめてしまおうかと考えた瞬間もあったが、単位のこともあり、とりあえず一度受けてみようと思い、参加し続けることにした。

授業が進む中で、私の中で大きな気づきとなったのが、知的障害のある人の「学び」についてである。中学・高校時代にも、障害のある方の講演会を聞く機会があったが、それらは講演者から聞き手への一方通行だった。しかし、この講義では少人数のグループに分かれ、同じメンバーで複数回活動する形式が取られていたため、特に同じグループになった KUPI 生とは、回を重ねるごとに自然な関係を築くことができた。

印象的だったのは、最初に KUPI 学生一人一人の障害の種類や特性についての詳しい説明がなかったことである。講演会などでは、あらかじめ「どのような障害があるのか」という情報を受け取ってから関わるが多かったが、この授業では、クラスメイトとしての関係から関わりが始まった。そのため、相手を「障害のある人」として意識する前に、一人の人として接することができ、会話や活動を通して、友達のように相手の特徴を知っていく感覚があった。結果として、先に情報を与えられるよりも、よりフラットで障壁の少ない関係を築けたと感じている。

活動の中で、何か苦手そうな場面があれば自然に手を貸すこともあったが、それは「障害があるから手伝ってあげる」という意識ではなかった。例えば、私自身も握力が弱く、ペットボトルの蓋が開けられないときに友達に手伝ってもらうことがある。そのように、それぞれの得意・不得意に応じて助け合うという感覚に近かった。以前の私であれば、「私が手伝ってあげなければ」という思いが先立っていたと思うが、ボランティア学習論で学んだことを意識し、できるだけ対等な立場で関わろうと心がけることができていた点は、自分自身の変化だと感じている。

また、KUPI 学生とのコミュニケーションの中で特に印象に残っているのは、言葉遣いや距離感である。これまで私は、障害のある方と接するとき、無意識のうちに子どもに話

しかけるような口調になってしまった経験があった。しかし、KUPI 学生の多くは、初対面のときから敬語で話しかけてくれ、会話の雰囲気も、他の講義で初めて出会う神戸大学生と話すときと変わらなかった。その姿勢から、KUPI 学生自身も「特別扱いされる存在」ではなく、「一人の大学生として対等に関わりたい」と思っていることが伝わってきた。

この講義を通して、知的障害のある人の学びとは、「教えられること」や「支援されること」だけで成り立つものではなく、人と人との関係の中で、共に経験し、共に考えることそのものなのだ気づいた。そして同時に、私自身も KUPI 学生と学ぶことで、多くのことを学ばせてもらっていた。これは知識としての学び以上に、自分の人との関わり方や、社会の中での立ち位置を見つめ直す学びであった。プログラム外の授業であったからこそ、異なるアプローチから、新たな気づきを得ることができたと感じる。

はじめは、受講をやめようかと思った時もあったが、今はこの講義を受けてよかったと心から思っている。この講義で、これから社会に出たとき、自分から意識しなければ出会うことのできなかつた人たちと、教育の場で共に学び、共生について考えることができた経験は、私にとって大きな意味があった。ここで得た気づきは、知的障害のある人との関わりに限らず、これから出会うすべての人や、動物、ものと向き合う際にも大切にしていきたい姿勢を考えるきっかけとなった。大学生活の最後に、このような学びの場に出会えたことに感謝している。

⑨

まず、授業を履修する前提として、現在私は大学 4 年生ですが、3 年後期から 4 年前期にかけて約一年間、ヨーロッパへ交換留学をしていました。その留学経験の中で特に印象に残っているのは、「外国人」というカテゴリーが自分の中で崩れたことです。日本にいた頃の私は、海外の人々を無意識のうちに「外国人」や「〇〇人」といった枠組みでまとめて捉えていました。しかし、実際に現地で生活し、一人ひとりと交流する中で、そのような見方は次第に変化していきました。相手をカテゴリーではなく、一人の人として見るようになり、それまで自分の中にあった先入観やステレオタイプが薄れていきました。この経験から、先入観を乗り越えるためには、実際に相手と関わるのが何より重要であると感じるようになりました。

このように考えていた経緯もあり、もともと 4 年後期に授業を履修する予定はありませんでしたが、シラバスで本授業を見つけたとき、ぜひ受講したいと思いました。私は 3 年前期に「障害共生教育論」の講義を履修しており、知的障害についての基礎的な知識は学んでいましたが、「知的障害者」というカテゴリーをどこかで持ったまま理解した気になっていた可能性があると感じていました。知識として知っていることと、偏見を持たずに相手を見ることは必ずしも同じではないことを海外で経験したからこそ、実際に交流し、自分の中のカテゴリーを崩したいと考えていた私にとって、本授業は非常に魅力的なものでした。

実際に KUPI 学生と交流してみると、まず気づかされたのは、自分の中にも少なからず先入観があったということです。一言で知的障害といっても、その特性や困難はさまざまでした。周囲の様子が気になりやすい人もいれば、自分の思いを言葉にすることに難しさを抱えている人もいるという様子の違いにも気付かされました。また、あまり多くを話さない人もいれば、積極的に話す人・話しかけてくれる人もいました。その姿を見ているうちに、これは私たちの間にある性格の違いと本質的に変わらないのではないかと感じるようになりました。交流を重ねるにつれて、「知的障害者」という一括りのカテゴリーは次第に意味を持たなくなり、私は自然と一人の人として相手と向き合うようになっていきました。

この経験は、知的障害者の学びについての理解も深めてくれました。彼らは決して一方的に支援を受ける存在ではなく、それぞれのやり方で理解し、考え、他者と関係を築きながら学んでおり、学ぶペースや表現の方法が異なるだけであり、「学ぶ」という行為そのものは私たちと変わらないのだと気づかされました。また、共に活動する中で、学びとは個人の能力だけで成立するものではなく、人との関わりの中で生まれるものでもあると実感しました。「教える側」と「教えられる側」という明確な境界はなく、互いに影響を与え合いながら成長していくのだと気付かされました。

さらに、この授業での経験は、私たちが普段どれほど無意識に他者をカテゴリー化しているかを考えるきっかけにもなりました。現在の世論や SNS 上の議論を見ていると、実際に接したことのない対象に対して、外部の情報だけをもとに一様なイメージを持ち、時には極端な判断が下されることも少なくないように思います。対象をカテゴリー化することは、自分が属していない「外集団」を作り出すことにつながりやすく、時に自分の属する集団の方が優れていると感じてしまうバイアスも生まれます。このような構造を考えると、知的障害のある方々に対する偏見も自分が接していないからこそ発生しうると考えました。

しかし、実際に交流することで、「They (彼ら)」として認識していた存在が「We (私たち)」へ変化していきます。この認識の変化こそが、先入観や偏見を和らげる大きなきっかけになるのではないのでしょうか。このことを考えたとき、留学後のある経験を思い出しました。帰国後、私はアルバイトで観光客のガイドをしています。ある日、ガイドを終えた後にドイツから来た旅行者と居酒屋で食事をする機会がありました。その際彼は、「政治的に対立している国や民族は多いが、一人ひとりであれば仲良くなれる。今の私たちのようにね。」と話してくれました。この言葉を聞いたとき、情報や知識はもちろん重要ですが、それだけに頼ると対立や偏見を生むこともあるのだと感じました。実際に出会い、時間を共有し、「同じ仲間になれる」と実感することが何より大切なのかもしれません。

KUPI 学生と共に学んだ本授業は、知的障害についての理解を深めただけでなく、他者と向き合う姿勢そのものを見つめ直す機会となりました。私はこの経験を通して、誰かを安易にカテゴリーで判断するのではなく、一人の人として理解しようとする大切さ

を改めて学びました。大学だけでなく、大学の外に出ると、より多様な背景を持つ人々と関わることになるでしょうが、そのとき、本授業で得た視点を忘れず、相手と直接関わりながら理解を深めていきたいと思います。本授業は、知識の習得にとどまらず、人と人とが共に学び合うことの意味を実感させてくれる貴重な経験でした。

3) メンター学生

KUPI で過ごしたかけがえのない時間

火曜日メンター学生 飯田理愛

KUPI にメンター学生として参加して 2 年が経ち、KUPI に携わる中で多くのことを学ばせてもらった。KUPI の火曜日の授業の魅力は、「答えのない問い」について KUPI 学生だけでなく、一般学生、メンター学生が共に学び合うことである。今年度は「共生とは何か」という抽象的なテーマについて、人と人、人と自然が共生できていないことについて考え、テーマ発表や写真作品による表現方法を通して、「共生」について考えるという「答えのない問い」に向き合う授業であった。しかし、「共生」という難しい問いに対して、個々の KUPI 学生が自分の身近なテーマに関連づけながら、自分なりの「共生」の考えを確立することで、授業に積極的に参加していた。授業の前半では「共生できていない私たち」というテーマの発表会に向けて、KUPI 学生や一般学生と議論し、考える機会が設けられていた。「共生できていないこと」について、KUPI 学生は普段から考えている問題や自身の関心のある事柄を中心に、自分の意見や考えを教えてくれた。KUPI 学生から語られたエピソードの多くは彼らのライフヒストリーに関連した内容が多く、印象的な内容が大半であった。授業の後半では、KUPI にはじめて参加する KUPI 学生と関わる機会があり、その KUPI 学生と関わる中で、様々なことを考えさせられた。KUPI の受講がはじめてであるにもかかわらず、毎回の授業で積極的に授業に臨み、他者と積極的に関わろうとする非常に学ぶ意欲が高い KUPI 学生の姿を見て、大変感銘を受けた。最終発表会に向けた制作活動においても、自分の思いや考えに関して紙芝居を通して多くの人に伝えたいという熱い思いを有しており、授業時間外でも熱心に創作活動を進めていた。

私は最終発表会に向けて、担当の KUPI 学生と共に写真絵本を用いた紙芝居絵本の創作活動に携わった。メンターとして関わる中で、創作過程において、KUPI 学生がこれまで経験してきた生活や学習の歩みを知り、それをうまく表現することができた。特に印象に残っているのは、特別支援学校における授業実践について話を聞く中で、多様性・柔軟性の高いカリキュラムや各々の生徒のニーズに沿ったきめ細かな支援がなされていることを知ったことである。これは、自分自身がこれまで経験してきた学校教育の在り方を問い直す重要な契機となった。私は、一般学生、KUPI 学生と共に対話を重ねる中で、お互い関心のある事柄や経験を語り合い、KUPI 学生とのコミュニケーションを重ねることで、ラポールを形成することができた。そのような関係性を構築することで、最終発表会に向けてお互いに意見や考えを出し合い、創作活動を進めることで、最終発表会では紙芝居を用

いた発表を披露し、無事成功させることができた。発表会では、私だけでなく、一般学生、KUPI 学生にとっても、全員で一緒に創作した紙芝居を完成させることができた。KUPI 学生は自分自身の苦手なことや否定的な感情を理解しつつも、彼らのストレンクスや得意分野を生かした発表を披露し、自己の負の感情に対する意味づけを正の方向に大きく変化させていた。最終発表会では、各々の KUPI 学生が紙芝居や演劇、ドラマなどの表現方法によって自分なりの「共生」について発表している姿を見て、彼らの想像力の豊かさと多様な観点から物事を捉える見方・感じ方を知ることができた。

KUPI は大学の知にアクセスするだけでなく、大学生や大学の教員など日常生活でなかなか出会うことのできない人々と出会い、交流を深めることができる貴重な場である。KUPI という「学びの共同体」をメンター学生、一般学生、コーディネーターの方々、教員、そして主役である KUPI 学生で完成させることから得られる達成感は何物にも代えがたい。

KUPI にメンター学生として関わった 2 年間は自身にとって大変貴重な経験であり、今後の生活においても大きな糧となるものであると感じている。KUPI で学んだことを通して、これからも様々なことに挑戦し、励んでいきたい。

みんなと関わられたありがたみ

月曜日メンター学生 伊東佑莉

初めは「どんな人が来るんだろう?」「うまく接することができるかな...」と思っていた。しかし、KUPI 学生の人たちはとても話しやすく、安心感があつた。ただ、接する中で「今、自分が誘導してしまったり、この言葉を言わせていたりしていたのではないか」と思う場面も多く、コミュニケーションに対する心配がついてまわつた。それは障害のある学生に限らない話なのかなと感じた。

KUPI 学生たちと接する中で、KUPI 学生たちの「好き」という気持ちやその人なりのスタイルを感じるが多かつたように思う。自分は特定の何かに深い情熱を捧げるといふより、広く物事に興味を持つタイプなので、KUPI 学生たちの在り方に刺激をもらえた。「自分もこういうふうになりたい」と思えたり、憧れやリスペクトの気持ちには年齢も障害の有無も関係ないのかなと感じた。「年下だから」「障害があるから」という理由で「この人のことは自分が支えない」と考える人もまだまだいるこの社会って、共生の観点から考えてどうなんだろう...と思った。自分が知らないことを KUPI 学生たちは知っているし、自分にはない観点を KUPI 学生たちは持っていた。自分なりの芯を貫いている KUPI 学生たちはとても輝いているふうに私には映つた。何か目標やスタイルを持ち、努力したり物事に組み入らなつたりしている KUPI 学生たちはかっこいいなと思った。1 人の人間が確かにそこにいる証を感じていた。人と接することや、人という存在について改めて考えさせられた時間だつた。

月曜メンターとしていろいろな先生方の授業を受けたが、とても楽しかったと思う。KUPI 学生たちと話す時間も楽しいし、授業そのものも楽しかったと感じている。普段の自分が触れることのない領域に触れる機会となったと感じている。おそらく KUPI 学生たちにとってもそのような機会だったのかなと思うと、「共に学ぶってこういうことなのかも」と感じた。また、他の曜日の活動ももっと見てみたいし、みんなのことをもっと知りたいと思った。もう会えないかもしれない KUPI 学生たちもいると思うと、とても寂しいと感じているし、メンターをやってみて良かったなと思った。このような経験をさせてくださったことについて、黒崎さん、橋澤さん、月曜の授業に来てくださった先生方、KUPI 学生のみなさんとその保護者の方々に深くお礼を申し上げたい。

自己表現を支える場としての KUPI

火曜日メンター学生 多々内風花

今回初めて KUPI に参加し、火曜日のメンター学生として関わらせていただいた。一つの教室で、毎週同じ時間に集まり、一緒に学ぶのが高校の時以来ぶりで、なんだか懐かしく、たったの 5 ヶ月だとは思えないほど、濃い時間を過ごしたと感じている。毎週火曜日の 17 時に教室に入ると、同じ顔ぶれがあって、休み時間は、他愛もない話をして、「また来週ね～」と言って別れる。それが、なんだかたまらなく嬉しくて、あたたかさがある場所だった。

しかし、KUPI での学びは、今まで私が経験してきた教室の学びとは大きく異なっていたように思う。

そのことについて、振り返りを試みる。

はじめは正直、KUPI に今年初めて参加するのに、いきなりメンター学生になっていいのだろうかという思いがあった。

一般学生とメンター学生の役割や意義の定義は明確にはされていない。メンター学生としての役割ってなんだろうか。もちろん、KUPI 学生のサポートや一般学生への仲介のような役割もあるだろう。しかし、私には一般学生とメンター学生の違いがよくわからなかったし、違いを考えること自体も見当違いなのかもしれない。振り返ってみると、役割に囚われすぎて、勝手に翻弄されていた自分がいた気がする。

授業では、「共生」というテーマに基づき、KUPI 学生と一対一で制作を進めることになった。そこでメンター学生として接した私は悩んだ。ペアの先輩 KUPI 学生は、発表したいという強い思いがありながらも、一見発表とは結びつかないと思われることで時間をたっぷりゆったり使う。

それに比べ私は、他のグループに比べ大幅に制作が遅れていたこともあり、「時間内に形にしなければならない」と一人で焦っていた。

KUPI4 年目の先輩 KUPI 学生の話をつたえただけ聞いてお喋りして欲しいと思う KUPI1 年

目の後輩としての私と、「取り止めのない話をずっとして果たしてテーマにつながっているのかわからない。どうしよう。進めなくては！完成させなくては！！」という頭の中のタスク重視なメンター学生の私、さらには「自分にとって共生って何か？」と深めたいと思う一般学生の私など、複数の自分がいた。

KUPI 学生と作品づくりをする中で、後輩、メンター学生、一般学生としての私が何度も行き来しながら、常に揺れていたように思う。

そんな頭の中渋滞の私の横で、KUPI 学生は常に、自分のやりたいことにまっすぐだった。

その様子を受け、ふと、私は何をそんなに焦っていたのだろうと我に返った。

そこから、完成させるための効率を目指すのではなく、そこまでの道のりをもっと楽しみたいと思うようになった。

KUPI 学生の生き生きと学ぶ姿に触発されて、いつの間にかクラスメイトとして一緒に学ぶことを楽しむようになったのである。

また、自己表現の喜びと怖さについて KUPI 学生と対話したことも大きかった。

人前に立つことは好きでありながら、人からどう見られるかを気にする KUPI 学生の姿に、私自身も重ねた。どう見せたいのか、どう見られたいのか、どうありたいのか。自己表現をする際には、他者のまなざしを感じざるを得ない。新たな自分の一面を他者に見せ、分かち合うことの喜びがある一方で、どう受け取られるのかの怖さもあることを共感しあった。

KUPI で過ごす時間の流れはゆったりとしていて、共に価値を創っていくことを楽しめる場だ。与えられた学びではなく、自分たちの実現したいこと、表現したいことから出発している。やりたいことが中心に据えられ、その実現に向かって協働していく学びの形がとても魅力的だった。そして、一緒に学びを創っていく仲間がいるということは、こんなにも心強いのかと感じた。

KUPI には、多様な表現を受け止める力がある。

それぞれが生き生きと表現できる媒体を模索し、そして、各々の表現が多様で溢れていることに改めて気づかせてくれる。

共同での活動を通して、様々な表現が生まれ、その価値を創造し、共有・発信する場にもなっていた。

KUPI では、内面世界を表す媒体は多様で、広義のことばがあることを知ることができる。その価値について共に学んでいくことができるのが KUPI なのではないか。

個人の中にあるいくつものいろんな自分たちを受け止めてもらえる心地よさがある。

そのような場が成り立っているのは、KUPI 学生を中心に、先生方、コーディネーターの方々、一般学生、メンター学生が共に学ぶ中で編み出された関係性も大きく作用しているからだと思う。

これからも、KUPI を一緒に盛り上げていきたい。そして、いろんなところで KUPI の空間が生まれたらもっと嬉しい。

月曜日メンター学生 福本美琴

私は今回初めて障害をもった方たちと長期間、近距離で関わってきた。入学式の時に見た KUPI 学生たちのキラキラした目、個性の強そうな、なんなら癖ありまくりの自己紹介が、「絶対に彼らと授業を受けたい！」と私に強く思わせてくれた。今となっては、あの時 KUPI に入って本当に良かったと思う。

この KUPI では本当にたくさんのことを学んだ。学んだし、KUPI 学生たちに精神的にも沢山救われた。私は11月ごろ私事で本当に辛いことがあって、毎日泣きそうになりながら大学に行っていた時期があった。その中で月曜日だけは、17時からの時間が本当に待ち遠しかった。ニコニコしながら日常を話してくれる生徒、いつも通りの変わらない、癖の強すぎる皆を見ていると、その時間は嫌なことを忘れて皆と心から笑顔になれていた。私にとって KUPI は本当にかげがえのない居場所の一つになっていた。半年間でその気持ちになれる KUPI は本当に素敵な場所であるし、まだまだ可能性を秘めた場所だなと思う。

実際に講義を受けたり振り返りを一緒にする中で、生徒の考えを引き出しているのか誘導してしまっているのかという問題に悩まされたときもあった。自分が感覚的に理解できている概念的なものが全く伝わらず、自分の伝える力のなさに辛くなった時もあった。今でもまだ正解は出ていないが、KUPI に入って初めて知れた学びであると思うし、大変貴重だと思う。

この半年間、私も KUPI 学生と一緒に沢山成長できたと確信している。これこそが共生だと思うし、私はこの活動を通してもっと人と直接かかわり一緒に喜びを分かち合えるような職業に就きたいと思えるようになった。

橋澤さん、黒崎さんも今まで大変お世話になりました。そして、楽しい授業、話しやすい雰囲気、皆が KUPI に来たい、KUPI が楽しいと思える空間にしてくださってありがとうございました！

7. コーディネーターの感想

黒崎 幸子

①引き継いでいること

7年間で20名の先生が104回のオムニバス授業を担当して下さった。毎年登壇して下さる先生や多忙な時は休んでまた復活して下さる先生がいらっしゃるが、中には次の先生を紹介して下さるなど、引き継いで下さることが本当にありがたい。同じキャンパスでも KUPI のことを知らない先生は多いので、後期になると夕方からキャンパスが賑やかになり、KUPI 学生が20時まで学んでいることを知ってもらいたい。

メンター学生さんは7年間でべ109名が参加しました。KUPI 初年度から参加している人や1回生から卒業まで6年間参加した人など、KUPI にハマってくれる学生さんがたくさんいます。初参加の人は、個性的な KUPI 学生との学びに戸惑うことが多いと思うが、メンター学生さんとのふり返りで迷いや悩みを話し、共有することで少しずつ肩の力が抜けて楽しみに変わっているのではと考えています。マニュアルは存在しないし、先輩メンターさんからこうあるべきと言った話は一切ないので、授業や活動を通して受け入れる部分があるのかなと見ています。メンター学生さんの押し付けない無言の空気があり、自然に引き継がれていることがとても嬉しい。KUPI では毎年、ボランティアさんの参加にも支えられている。雇用のある/なしでボランティアと呼んでいるが、メンター学生さんと同様のことを担っており、社会人学生の方は仕事と学びとボランティアがあるため誰よりも忙しい。総勢15名のメンターやボランティアさんと一緒に活動ができたことに感謝を伝えたい。

KUPI 学生さんは7年間でべ84名が参加しました。引き継ぎたい思いを一番意識しているのは KUPI 学生かもしれません。年齢は関係なく、受講を重ねた人が先輩になるようです。(自然とそうなったようです) 例年、四年目の人は先輩風を吹かせて、卒業が近付くと、「次は君に任せた!」「任せられるのは君しかいない!」と宣言して卒業します。しかし、今年は誰も風を吹かせなかった。(笑) 受講人数も少なかったし、いろんな意味で(どんな意味?) 穏やかな一年でした。これで卒業生は12名になりました。次年度は受講生より多いかもしれません。卒業生が参加できる授業や活動は先輩だらけになるかも? どうしようかな? と悩む楽しみは、次回までとっておくことにします。

②今年の KUPI

開講依頼、一番受講生が少ない年でした。静かな教室が落ち着かなくて、居心地の悪さを感じる KUPI 学生がいるほどでした。おまけに10月はほぼ全ての授業や活動に NHK の撮影が入ったため、カメラやマイクが近付くと途端にぎこちなさが出るのは当然のことでした。初授業を担当した赤木和重教授は、緊張感が漂う中で一番やりにくかったと思いますが、KUPI 学生を和ませようと、少々ボケたり、スリッパで笑わせるというスゴ技を発

揮し、楽しくもあり考えながら学べる授業を展開して下さった。火曜メンターさんの応援が心強かったことも思い出されます。

KUPI 学生 7 名が寂しいと感じる中、プラスとして捉えることができたのが木曜日の哲学対話でした。例年よりもゆっくりまったりできましたが、そのゆっくりしたペースが合わない人はしんどそうにしている、対話の輪から離れて話を聞いてもらうなど自らの方法で気持ちを落ち着けていました。そんな日が続きましたが、1 か月が過ぎるころから最後までみんなと対話をしていると気づき、そこからは他の KUPI 学生のことを気かけたり、グループワークでアドバイスをするなど変化がありました。週に 3 回会うことで、どの KUPI 学生さんもお互いのことを知って受け入れる柔軟性があることは、今年の KUPI でも見られました。

8 月の説明会から NHK の撮影が入り、10 月はほぼ全ての授業と活動で撮影が行われ、11 月からは火曜日と木曜日に撮影がありました。KUPI 学生はすぐに気さくな撮影隊の方と仲良くなり機材を持たせてもらう場面もありました。この度、撮影や取材が行われたことについて、KUPI に参加し、そして関わってくださった全ての方にご協力とご理解、ご配慮をいただきましたことに深く感謝申し上げます。そして放送される番組を通して、KUPI のような学びが全国に広がることを強く願っています。

③KUPI 学生のこれからについて

KUPI 学生のご家族と話した時に、KUPI 学生の将来について情報がほしいと聞きました。地域によって情報量も様々で、KUPI 学生の生活環境もご家庭によって様々なので、必要な情報も多岐にわたりますが、KUPI を卒業したご家族からは、「KUPI のような学びの場や居場所が近くにほしい」「これから 30 代、40 代となった時に、仕事を続けているかどうか？」など KUPI 学生の将来を心配する声が多くありました。木曜日の対話でも、将来や自立について考えている KUPI 学生の話は多く、「KUPI を卒業したら、私はどこで若者と話せるのでしょうか？」と、卒業研究で考える KUPI 学生もいました。家族の会がほしいとの声もありましたので、今後、検討していけたらと考えています。

今年度も KUPI 学生が頑張る姿の影には、ご家族の支えやご協力がたくさんあったことと思います。片道 1 時間以上かけてご家族と一緒に通う人は一人や二人ではありません。県外の方は帰宅が 22 時になると聞きました。感染症が流行する季節のため、体調管理も大変です。仕事帰りに大学へ行くことの大変さは計り知れません。それでも本当に楽しそうので、予備日はもったいないから授業をしてほしいと言われました。予備日も大学に来て、物語を書く人がいて、私がそろそろ帰ろうよ～と言っても、まだやります！と。KUPI 学生にとって大学はとても大切な場所だと今年も強く思いました。KUPI に興味を持って、見学に来てくださる方とたくさん出会えたので、新しい出会いも楽しみにしながらこれからも KUPI 学生さんと繋がりたいと思います。

KUPI を開講するにあたり、鶴甲第二キャンパスの教務学生係や総務係のみなさまには、今年度も大変お世話になりました。オムニバス授業コーディネーターの橋澤さんは、今年ならではの大変さがたくさんある中で、一緒に運営を進めてくださったことに感謝いたします。

橋澤 慧

この原稿を書いている今は修了式の後、時刻は朝 6:11。イタリアで開催中のオリンピックを観ていたわけでもないのに今日も起きたまま朝を迎えてしまったことは誠に遺憾であるが、自他共に認める超夜型人間の私にとって 17 時スタートの KUPI は大変ちょうどいい。しかし KUPI 学生の多くは、私がまだヨダレを垂らしながら寝ている時間に起きて、日中は働き、退勤してから大学にやってくる。大学に来るなり、大好きな自動販売機と飲み物について熱く語り、黙々と小説を書き、お弁当やカップラーメンを食べ、外が暗くなってきたら何やら難しいことを学び、作り、話し合い、夜遅くに家に帰る。翌朝また起きて、仕事に出かける。彼らはこんな生活を週 3 日、約 4 か月間ほぼ欠かさずにやり遂げる、バイタリティ溢れる青年たちである。かたや私ときたら、昼過ぎに絶望とともに起床し、適当にその辺にあったお菓子をつまんで、寝癖もそのままに、かろうじて大学に向かう。研究室の椅子に座って「何もやる気が起きん…」とうだうだしているうちに夜になり、1 日が終わりかけた頃になってようやく焦りだすと、いつの間にか夜が明ける。ちなみに、この原稿の締め切りは 3 日前だ。障害があるとかないとか、そういうことよりももっと根源的な、何か人間として大切なものが欠けている気がしてならない。

私の KUPI の経歴は、メンター学生 3 年、ボランティア 1 年、コーディネーター 1 年の計 5 年である。KUPI に携わっている人間としては長老の部類だが、いかんせんまだ学生。障害者支援領域とか、あるいは「社会人」としてはとんでもなくヒヨッコだ。しかも全力で責任（と朝起きること）から逃げてきた。チャランポランな生き方をしてきたという事実が、コーディネーターを引き継ぐと決まってからずっと私に重くのしかかっていた。それでも気がついたら KUPI が始まり、クローゼットの服が半袖から長袖に変わり、コートやダウンジャケットを羽織ってもなお震えるほどだった寒さはいつしか和らぎ、カフェでは桜をモチーフとしたドリンクが販売され始めた。あっという間だった。もちろん楽しい瞬間はたくさんあったが、それでも月曜日が終わるたびに、KUPI 学生とご登壇くださった先生の双方にとって良い時間であったか、つらいことはなかったか、不安でたまらなかった。授業の内容は先生方とコーディネーターとで話し合っただけで内容を調整していくので、そうそうおかしなことにはならないが、それ以前に、そもそもどの先生に授業をお願いするかを決めたのは私だ。KUPI 学生や先生方の人生の一コマに責任を持つということが、いつも怖かった。それでもどうにかこうにか修了式を迎えることができたのは、KUPI で学んだことを大切に持ち帰り、「〇〇先生の授業が楽しかった」という感想をたくさん伝

えてくれる 7名の KUPI 学生のおかげだ。

若干危惧してはいたのだが、修了式では、修了生を差し置いて私が泣くという、とんでもない失態を曝け出してしまった。自分の卒業式でも泣いたことはないのに、これが「歳をとると涙もろくなる」ってことか、いや、ついに飛び始めたスギ花粉のせいにしておこう。めちゃくちゃテレビカメラで撮られてしまったので、もしかすると公共の電波に私の 1 ミリも美しくない泣き顔が乗ってしまうかもしれない。どうか来世は北川景子の顔で生まれてくれますように。

忘れないように、修了式で伝えたかったことをここにしたためておこう。

KUPI はキラキラした場所だ。それは間違いない。「歩く三日坊主」の私が、5 年も KUPI にいたのだ。それほど魅力が、KUPI にはあると断言できる。けれども落ち着いてじっと目を凝らしてみると、オムニバス授業ひとつとっても、内容に興味津々で先生に質問を投げまくる KUPI 学生、一生懸命ノートを取る KUPI 学生、明らかに「今日の内容は全然興味ないワ」という顔をしている KUPI 学生などが混在する。質問と答えが噛み合っていないことは日常茶飯事だし、話し合いをすればあつという間に連想ゲームが始まって話が脱線していく。今年に至っては「絶対に英語でしか話さないぞ」という固い意思を貫く KUPI 学生もおり、海外から見学に来られた方を交えたグループワークでは、日本語ではなく英語が飛び交うグローバル化っぷり。「カオス」とはまさにこのことである。

そんな自由気ままな KUPI 学生に向けた特別な授業づくりを、超多忙を極めている先生方をお願いするコーディネーターの身にもなってほしい...というのは全くの冗談だが、それでも接し方や授業の組み立て方など、おそらく普段とはかなり違う頭と時間の使い方をお願いしているのは事実だ。そして、大きなご負担をおかけした先に待ち受けている「カオス」な状況は、先生方の目にどう映ったのだろうか。コーディネーターもとい月曜プログラムのプロデューサーとして、気にならないわけがないのだ。しかし幸いにも、ご登壇くださった先生方は皆口々に「学びになった」「おもしろかった」「新鮮だった」と話されていた。「来年は〇〇をやろうか」「来年もよろしく」と、登壇継続を匂わせてくださる先生も何名もいらっしやった。本当にありがたいことだ。KUPI は、KUPI 学生、メンター学生、一般学生、我々コーディネーター、そして KUPI に関わってくださる先生方が、それぞれの立場から学ぶ楽しみを発見することができる場なのだということを実感した。そして、そのような場に立ち会うことができ、とても幸せだった。

諸事情により、本年度をもって私の KUPI 学生生活は一区切りとなる。私の好きな歌の中に《どんな夜がきても楽しくずっと 生きていくことは難しいけど どんな夜もあなたがいるならば 耳鳴りの形も愛おしいかもな》という歌詞があるが、KUPI はまさにこの歌詞の通りの夜を私に与えてくれた。たくさんの方が学ぶ楽しみを発見していく過程に立ち

会えたこと、そのような場をプロデュースさせていただけたこと、苦しいことも楽しいこともあったが、KUPI で拾い集めたたくさんの思い出たちが、きっと明日からも私の夜を守ってくれることだろう。KUPI 学生をはじめ関係者の皆様においても、KUPI を通じて耳鳴りの形が愛おしく感じられるような夜を過ごしていただけたなら幸いである。

最後になりましたが、KUPI を支えてくださったすべての皆様と、文字通り右往左往する私をあたたく見守ってくださった皆様に、厚く御礼申し上げます。本当に、本当にありがとうございました。

8. KUPI に関する論文、発表、原稿掲載

次ページより KUPI に関する論文、発表抄録、特集記事などを掲載いたします。
(WEB 版では掲載を省略します)

- 1) 2025 年 2 月 childhood & philosophy Vol.21 pp.1-24 (加戸友佳子)
- 2) 2025 年 9 月 都市問題 Vol.116 pp.21-26 (津田英二)
- 3) 2026 年 2 月 みんなのねがい p.13 (元 KUPI 学生)
- 4) 2026 年 2 月 第 32 回大学教育研究フォーラム 発表論文集 p.81 (川地亜弥子)

Kado, Y. (2025). shaping inclusion: possibility of “community of inquiry” in people with intellectual disabilities. *childhood & philosophy*, 21, 1–24. (加戸友佳子「インクルージョンを形づくる：知的障害をもつ人々の『探求の共同体』の可能性」)

Kado, Y. (2025). shaping inclusion: possibility of “community of inquiry” in people with intellectual disabilities. *childhood & philosophy*, 21, 1–24. (加戸友佳子「インクルージョンを形づくる：知的障害をもつ人々の『探求の共同体』の可能性」)

津田英二 (2025) 障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて. *都市問題*, 116, 21-26.

津田英二（2025）障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて．*都市問題*, 116, 21-26.

津田英二 (2025) 障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて. *都市問題*, 116, 21-26.

津田英二 (2025) 障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて. *都市問題*, 116, 21-26.

津田英二 (2025) 障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて. *都市問題*, 116, 21-26.

津田英二 (2025) 障害者の生涯学習を支える制度と実践——多様な人たちが学びあうインクルーシブな社会に向けて. *都市問題*, 116, 21-26.

元 KUPI 学生(2026 年 2 月 1 日). 進め! 推し活道. みんなのねがい 2 月号 (第 725 号). 13.

川地亜弥子(2026).知的障害青年を対象とした大学教育プログラム-カリキュラム編成と学生の発達-. 第32回大学教育研究フォーラム発表論文集. 81.

9. おわりに : KUPI の磁場

赤木和重

KUPI は、なんと、7年目を終えることができました。制度的、予算的に強い基盤のある事業ではありません。基盤が弱いと、最初は注目されるものの、だんだんとフェイドアウトしてしまう事業も正直あります。そんななか、KUPI が7年にわたり、継続・発展することは、私が「中の人」ということをさしおいても、すごいことだと思っています。

それにしても、なぜ7年も続いたのでしょうか。様々な魅力があるかと思いますが、ここでは、2つのことをあげたいと思います。

1つは、KUPI の中には、「ほんもの」があふれているからです。知的障害者だからといって、決して、学びの内容を薄めているわけではありません。第一線で活躍する研究者が、KUPI 学生にわかるように、しかし、それ以上に学びの本質を届けようと試行錯誤しています。「書くとはなにか」「表現するとはなにか」といった問いを本気で差し出します。だからこそ、KUPI 学生は、それに応え、もしくは、それ以上のパフォーマンスを出したくなるのでしょう。大きな魅力の1つです。

2つは、KUPI には、異種混濁のつながりがあふれているからです。KUPI には、KUPI 学生はもちろん、メンター学生やボランティア、ゲスト講師などに様々なバックグラウンドをもった人たちが集います。そこでは、普段は話すことのないような雑談をすることになったり、日常では考えたことのないようなことを考えたりします。日々の流れとはちがうつながりや、感情、言葉、思考がうまれ、それは、ドキドキしつつも心地よい経験になります。これも魅力の1つです。

このような魅力が、KUPI の磁場となって、たくさんの人々をひきつけ、7年にもわたって継続しているように感じます。

もちろん、KUPI にも様々な課題があるのは事実です。継続的、安定的に予算がつきにくいということや、メンターや KUPI 学生の参加人数が年度によっては少ないといったこともあります。しかし、このような課題はありつつも、このような課題をともに考えることで、新しいアイデアや運営方法が生まれますし、それこそが KUPI の持ち味だと思っています。

引き続き、KUPI の応援をお願いするとともに、さらには、ぜひ一緒に KUPI の磁場に巻き込まれ、磁場をつくっていただければうれしいです。

本冊子の編集者・執筆者

- 津田 英二 神戸大学人間発達環境学研究科
赤木 和重 神戸大学人間発達環境学研究科
川地 亜弥子 神戸大学人間発達環境学研究科
黒崎 幸子 神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」コーディネイター
橋澤 慧 神戸大学「学ぶ楽しみ発見プログラム」コーディネイター
井上 太一 神戸大学人間発達環境学研究科博士後期課程（メンター学生）
竿 美羽・飯田 理愛・多々内 風花・近藤 史香・足高 聖子・喬 慧娟
以上、神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程（メンター学生）
荒木 絃汰・伊東 佑莉・木坂 友絵・西井 明・福本 美琴
以上、神戸大学国際人間科学部（メンター学生）
今井 進吾 神戸大学人間発達環境学研究科博士前期課程（ボランティア）

本実践研究にあたって、神戸大学大学院人間発達環境学研究科における人を直接の対象とする研究審査による承認（No.454）を受けています。

2025年度 文部科学省委託事業

「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」

「神戸大学・学ぶ楽しみ発見プログラム」

～知的障害青年のための大学教育の創造～

2026年2月発行

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11

Tel 078-803-7970 fax 078-803-7971